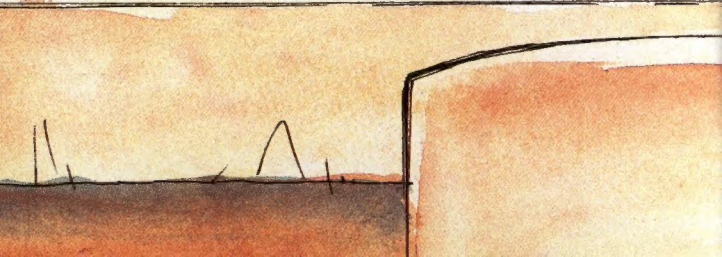
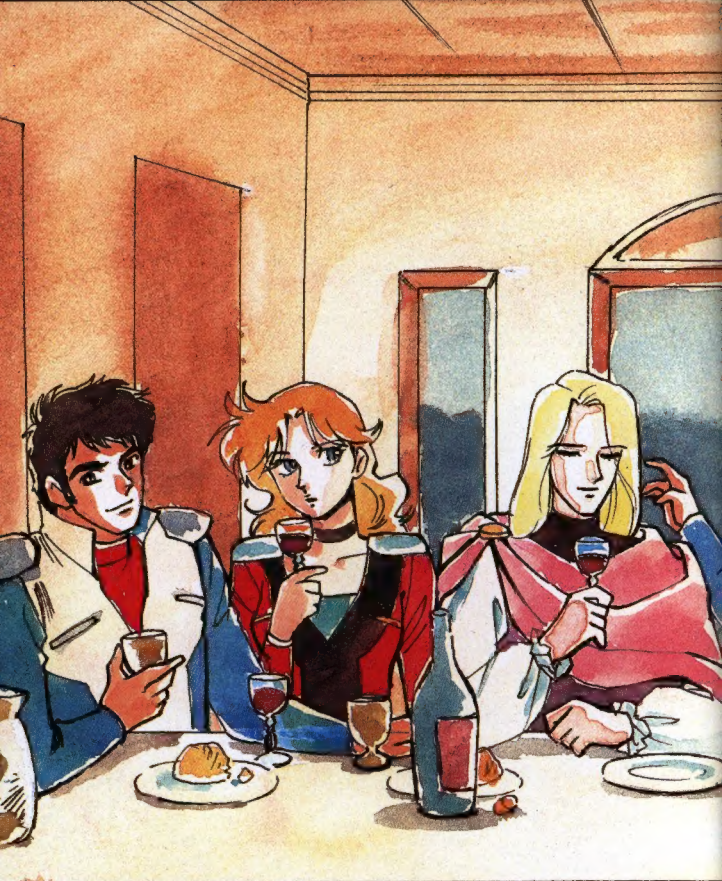
戦国魔神ゴーショーグン 番外篇2
たそがれ
美しき黄昏のパバーヌ
作／首藤剛志
絵／羽原久美子
AM JuJu

戦国魔神ゴーショーグン　番外篇2

美しき黄昏(たそがれ)のパバーヌ

真吾、レミー、キリー、ブンドル、カットナル、ケルナグール、おなじみゴーショーグン・チーム6人が着いたところは、今度は15世紀のイタリアはフィレンツェの郊外だった。

彼らが出現したとたん、そこでは砲弾が飛びかっていた。勝手もわからず襲われていた乙女を助ける6人。彼女の名はイザベルといい、ルネッサンス期のフィレンツェを支配した〝メディチ家〟につながるものだという。

イザベルに護衛隊として雇われた6人は〝花のフィレンツェ〟へ向かう。彼らはそこでルネッサンスの美術品をめぐる陰謀へと巻き込まれていく。待望のゴーショーグン・シリーズ第8弾。

アニメージュ文庫

戦国魔神ゴーショーグン　番外篇2

美しき黄昏のパバーヌ

首藤剛志

絵/羽原久美子

Pocket Editions of Animage
by Tokuma shoten

パバーヌとは………

ラテン語でPOVON

孔雀(くじゃく)

16世紀に流行した宮廷舞踏曲から発達した
優美な舞曲。
女性の舞姫の踊る姿が、羽根を広げた孔雀に
似ているところからこの名がつけられた。

これは、宇宙の創造にかかわる何ものかの意思によって、はからずも時空を超えてさまよわなければならなかった六人の戦士の、みずからの自由のための戦いと、様々な世界との、出会いと別れの物語である。
彼らの名を人はゴーショーグンチームと呼んだ。

そして今……

Y・Mに捧ぐ

目次

第一楽章

荒野の砲弾

イザベルのテーマ

頭上の夜空を妨げるものは、雲ひとつなかった。
満月の光が、荒野を白々と照らしている。
荒野は、まるで、時間の止まった、夜の海のようだった。
荒野にところどころ剥き出した石灰岩の岩肌が、月の光を照り返して、まるで荒れた海の波濤のように見える。
確かにそれは、時の止まった瞬間かもしれなかった。
なぜなら、月の光に少しも負けずに夜を支配している星々の光も、だれに語りかけているのか知れぬ瞬きを、そのときだけは一斉にやめて、ただ、闇にばらまかれた、光の粒として静止していた。
それが、時とは感じられないほどわずかな時間が経過した後、いきなり月の光が揺らぎ、六つの人影が、荒野に立っていた。
人影の一人、髪の長い男が、まわりの人影に目をやり呟いた。
「どうやら、今回は、馴染みの顔が欠けずに済んだようだな……」
「それはいいとしても……」
六人の中で、たった一人の女が、ふっと溜め息をついた。
「問題は、ここがどこかってこと……」
そのときだった。
鈍い爆裂音が、遠くで聞こえた。

「考えている暇はない」
もう一人が、そう言うと、腰の銃を抜いた。
「真吾、どういうこと?……」
答えを聞くまでもなく女の手には銃が握られている。
いや、女だけでなく、六人のすべてが、それぞれ銃を抜いていた。
そのうちの一人の肩にとまっている大柄のカラスも、来たるべき敵に対する迎撃姿勢を取った。
「普通の耳を持っているやつなら、あの音が……」
真吾と呼ばれた男が、そう言い終えぬうちに、くすんだ金髪の長身の男が叫ぶ。
「伏せろ!」
その男キリーが、頭を抱え、ダイビングをするように地面に倒れ込むより先に、他の五人は、思い思いに、身を隠す行動をとっていた。
頭上に、何かが風を切る音をさせてやってくる。
それは、六人が、今まで何度も聞いた危険な音だ。
そして、だれもが次の瞬間、それが、今までのどんなときよりも危険な音なのを悟って、絶望的な気分にさせられていた。
それは、砲弾の飛んでくる音だった。
しかも、落ちるのが、六人の至近距離であるのもわかった。

直撃は避けられたにしても、炸裂する衝撃や爆風、砕け散る破片弾をかわすのは不可能だ。
砲弾に、焼夷剤でも入っていたら、一瞬のうちに、黒こげの炭の人物像が、六つできるだろう。
いや、形が残ればいいほうで、高熱の炎で跡形もなく蒸発してしまうかもしれない。
これまで、幾多の戦いを潜り抜けてきた六人には、それがよくわかっていた。
……助からない……。今度ばかりは……
キリーは、肩を竦めた。
……今まで、いろんなことがあったが、結局、おれには、何もなかった……
ケルナグールは、元ボクサーの習性で反射的に拳を握りボクシングの構えをしたが、
「馬鹿か……、おれは……。大砲に勝てるわきゃなかろう」
妙に納得して頷いてから、それでもあたふたと頭を抱えて倒れこんだ。
元アメリカ大統領の経験のあるカットナルの口から漏れたのは、相変わらずかねてから用意していた暗殺されたときに備えての言葉……、
「カットナル死すとも自由は死せず」
だが、言ってみて今、浮き草そのままに時空を放浪中の身には、意味のない台詞に思えて、別の言葉を考えておくのだったと後悔した。
「敵はアラブか中南米か……」
とっさに、そんな台詞も思い浮かんだが、さらに、現在の自分には関わりのないことだと……、苦笑しながら、地面に倒れ伏すよりなかった。

ずん……。
鈍い音と地響きが、六人の身体を揺すった。
ぱらぱらと土の塊が、降りかかる。
「あん？」
すっとんきょうな声を上げたのはケルナグールだった。
「なんで、生きとるの？　わしゃ……」
隣で倒れていたカットナルは、その声に思わず自分の身体中を触ったが、やはり傷ひとつない。
「わしも生きてる」
ケルナグールが頷いた。
「どうやら、みなさん、生きてりゃめでたいが……」
キリーが立ちあがり、荒野の一方を睨んだ。
土埃を払いながら、レミー、ブンドル、真吾の三人も起き上がり、キリーの見つめる方向を見据えた。
「次はわからん」
キリーがそう呟いて肩を竦める間もなく、ボコン……、シャンペンの栓を開けるような爆音と火花が見えた。
「確かにあれは大砲の音よね……」

レミーが、呆れた口ぶりで言った。
……にしちゃあ、ずいぶん、気の抜けたシャンペン。……不味そう……
本当にうまくない音だ。
上空にまた、風を切る音が迫ってくる。
「右へ走れ！」
真吾が叫んだ。
六人は、弾けるように真吾に従って動いた。
ずん……。
土砂を飛ばして、今まで六人のいた場所に何かがめり込んだ。
しかし……、六人に降りかかるのは、土のかけらだけだ。
爆風も炎も炸裂する破片もない。
「なんちゅう大砲？」
首を振りながら、レミーが、そこを覗き込んだ。
バスケットボールほどの球体が埋まっている。
「こりゃ大砲というより……、パチンコ玉よね」
確かにそれは、丸い鉄の塊だった。
「クラシカルじゃな……、ずいぶんに……。いったい、ここはいつの時代じゃ」
カットナルが、あたりを見回す。

大砲といえば、とっさに核弾頭か、細菌入り、軽くて毒ガス入りの砲弾しか思いつかなかった元アメリカ大統領のカットナルである。
ただの鉄の玉だったことにすっかり安心しきっていた。
「おいおい、パチンコでも当たりどころ次第で人を殺せるぜ」
キリーが、いちおう釘をさした。
それでも、六人の表情には、明らかに、先刻までの切羽詰まった緊張感はなかった。
彼らが今まで潜り抜けてきたさまざまな危険から比べれば、直撃を避ければ生きていられる砲弾など、宝くじの一等に当たるほどの確率しかない危機に思えた。
「二十五度北……、距離千五百メートルだな」
真吾が唾をつけて濡らした指で風向きを計りながら言った。
「なにが？」
キリーが聞き返す。
「この大砲を撃った地点さ。それも、二台しかない。もっとあれば、連射してくる。それにそいつは、地球で考えれば五、六世紀昔の大砲らしい。弾の大きさ、発射音、着弾までの時間、その他もろもろで類推できる」
キリーは、口笛を吹いて肩を竦めた。
「さすが、元国連破壊工作員ってわけか……」
「飛び道具は、吹き矢からレーザーまで、相手をしなきゃならない……。国連だけにな、敵は

いろいろだった」
真吾はこともなげに答えた。
「能書きはともかく、どうすんじゃい。たかがパチンコ玉の親玉とはいっても、こう大きいんじゃ、おれの拳で殴ってても勝てそうもないぞ」
それでも、ケルナグールはそぶりだけでも、勝てそうに拳を握って見せた。
さらに、大砲の発射音がする。
「今度は、左に逃げろ」
真吾の声は、まるであわてていない。
五人も、素早く動く。
砲弾が着弾する。
六人は、怪我ひとつない。
ただ、降りかかる泥は避けようがない。
「逃げまわるのはいいけど、終わった後に、シャワーはあるんでしょうね」
レミーが、髪を払いながらぼやいた。
「反撃はできるけれどな……」
真吾が呟く。
「あん？」
とカットナルとケルナグールは、真吾をまじまじと見詰めた。

「敵さんまでの距離なら、おれの銃で十分届く。おれの腕が鈍っていなければ、一撃で失敗もないだろう」
「なぜ撃たんの！」
　ガットナルがわめいた。
「真吾君の判断は正しい」
　ブンドルが、静かに呟く。
「だろ？」と、真吾が答える。
「説明してあげて……」
　レミーは、反撃しないのをとっくに了解していたかのように言った。
　真吾は、言わずもがなとでもいうような溜め息をついた。
「ここが、どこだか、わからんからさ。われわれが紛れ込んだのは戦場か、それとも何かの軍事演習か……。この砲弾が、おれたちを狙って撃っているのかすらわからん……。おっと、今度は前へ」
　また、砲弾が発射されたのだ。
　いちおうみんなが着弾を避けたのを確かめてから、真吾は続けた。
「手向かえば、その瞬間から、おれたちはやつらの敵になる」
「神になるかもしれぬ……」
　ブンドルが付け加えた。

「かみ……？」

反撃をすれば好むと好まざるにかかわらず、この砲弾を撃つ人々の敵になってしまうことは理解できても、神になるというブンドルの言葉にとまどったキリーが、聞き返した。

「真吾君のレーザー銃は、二十一世紀の地球の物だ。ここの文明程度の武器と張り合えば、彼らはどう思う？」

「そりゃ、やつらから見りゃあ、レーザーは、神の雷かもな……。パチンコと雷じゃ相手にならない」

キリーはおどけて胸に十字をきった。

「それならそれでいいかもしれん」

カットナルは、思わず片目を輝かした。

「神だと思ってくれるなら、わしらは何もせずにこの世界をものにできる……。数百人でメキシコを手に入れたスペインのコルテスのように……」

カットナルは、地球の歴史の分野で何に明るいといったら、戦略、侵略の世界史ほど詳しいものはなかった。

二十一世紀のアメリカ大統領たるべきものの当然のたしなみだった。

地球の十六世紀、繁栄を極めたメキシコ文明が、ヨーロッパから来たコルテスという白人を、神だと勘違いし言いなりになったために、略奪虐殺をほしいままにされ、あっという間に滅ぼされた歴史を咄嗟に思い浮かべても不思議ではなかった。

その同じ世紀、南米のインカ文明も似たようなかたちで、ピサロというスペイン人によって滅亡させられている。
それは、人類の歴史にいくつも見られる異文化による文明破壊の、きわだったもののひとつだった。
「いやいや、別に、コルテスやピサロのような非道を真似ようとは思わんがな」
カットナルは、あわてて弁解した。
「神で済めば……、まだましかもしれぬ……」
ブンドルは、かすかに溜め息を洩らした。
「言える……。ここがもしも地球だったら……」
レミーも肩を落とした。
「あっ……、そうか」
カットナルは、気がついた。いや、ケルナグールを除くみんなが気がついていた。
そして、またまた発射音……。
「なにが、そうかじゃ？」
一同が真吾の指示で四発目の砲弾を避ける途中でケルナグールが聞いた。
「大砲の弾より固い頭じゃなあ……。先が見えんのか」
カットナルが、あきれかえった口調で言った。
「おまえの片目よりは見えるつもりじゃ」

ケルナグールは言い返した。
「きさまの悪口雑言に、怒る気もせんわ……。いいかな、カットナル」
カットナルは、得々と説明しだした。
もちろん、飛んでくる砲弾を、かわしながらだ。
「もし、ここが地球でだ、ここが歴史に名高いどこかの戦場だったらどうする？　そこに、雷を落とすような神様が現れたらどうなる？　そして、大砲をぶっぱなしているやつらの中に、有名人がいたらなんとする？」
「有名人がいなくても危険だ」
真吾が付け加えた。
「だから、どうする？　どうなる？　なんとするっちゅうんだ！」
ケルナグールが、じれて叫ぶ。
「地球の歴史が変わるかもしれん……。そうなりゃ、わしが、二十一世紀にアメリカ大統領になれていたかどうかもわからん。それどころか、ここで、銃を撃った結果、われわれのだれかの先祖が死んだら、わしらがここにいることすらどうなるかわからん。わしらは、歴史を変えちゃまずいんじゃ」
カットナルの説明に、ケルナグールが喚いた。
「もったいぶって、ごちゃちゃ説明すな！　最初からタイム・パラドックスといえばいいんじゃ……。自分がご先祖を殺したら自分は生きているか……ちゅうやつじゃろ！」

片目を丸くするカットナルにケルナグールは胸を張った。
「ばかにするなよ。いくらアフリカの田舎生まれだからといって、衛星放送で、バック・ツー・ザ・フューチャーぐらい見ているわい」
「どうせ、二十一世紀のリメイク版だろう。わしは、二十世紀のオリジナルを三枚ディスクで持っている」
カットナルとケルナグールが、言い合いを始めると、必ず話があらぬ方向へいく。
キリーが、たまらず喚いた。
「骨董品の空想映画の話なんかいい！　こいつは、現実問題だぜ」
カットナルとケルナグールは、改めて互いの顔を見合った。
そして、どちらともなく呟いた。
「そう、こいつは現実だ」
真顔で頷き合う。
「現実じゃ……。そう現実じゃ」
それから、なぜかぷっと吹きだした。
……現実か……。確かにね……。でも、なんて現実なの……
レミーも、なぜか笑いたくなった。
真吾もキリーも笑いを堪えている。
「あら、知ってたの？」

あのブンドルですら、微苦笑を浮かべている。
六人、それぞれが、この現実を笑わずにはいられない。
……そりゃそうだわ……
レミーは思う。
飛んで来る砲弾は、避けようと思えば避けられる。
ぽつんぽつんと散発で、さほどの緊迫感はない。
けれど、直撃されれば、確実に死という現実がある。
とはいえ、反撃すれば、歴史を変えてしまうどころか、自分の存在自体が消えてしまうかもしれない。……もしかして、ここが、レミーたちが生きていた地球と同じ時空の過去の地球だとしたならば……、過去を変えるかもしれない行動は、のんびりと落ちてくる鉄の玉の死という現実よりも危険な気がする。
六人たちは、かつて、地球の過去らしき時代に辿り着いたことがないわけではない。
だが、そこは、二十一世紀に生まれた彼らにとって、あまりに異郷の地だった。
二十世紀には、経済大国だったが、二十世紀末の中東湾岸戦争への対処あたりから、世界における地位にけちがつき始め、たちまちのうちに統一ドイツにその地位を奪われ、二十一世紀には、世界地図の片隅にある島国としか存在価値のないぐらいに急速に没落したという国、日本の……しかも、幕末という時代だった。
あまりの風俗風習の違いに、それに慣れるのに精いっぱいで、タイム・パラドックスを気に

する余裕もなかったといっていい。
レミーと真吾という二人の、日系の血を引くメンバーがいながら、それを切実に感じなかったのも、日本の幕末という時代が、世界史において、ほとんど重要な位置をしめていないことも手伝っていたかもしれない。
事実、日本の幕末らしきところで彼らが行動した結果は、現実の六人にさして影響をあたえた気配はなかった。
だが、正直な話、少なくともレミーと真吾、そして、ブンドルは、日本の幕末で六人が巻き起こしたことが、今の六人に響いていないらしい現実に、ほっと胸を撫で下ろしたのも確かだった。
だが、二度目の今は、そうはいっていられない。
……ここは、地球なのか……。そして、いつの時代の、どこなのか……
それがわかるまでは何もしないでいるよりなかった。
しかも夜。荒野……。手掛かりは、飛んで来る旧式の砲弾しかない。
どすん。どすん……。
砲弾は、地表をえぐっている。
どすん。どすん……。
そのたびに土砂が、扇状に弾かれる。
落下の速度は、物理の法則にかなっているはずだ。

だが、それが、六人にはやたら、のんびりと感じられる。
まるで、砲弾は、彼らをもてあそんでいるようだ。
遠くで貧弱に吠えている大砲も、夜空の月も星も、なにもできない六人を笑っているように感じられる。
……何もしないでいるったってどうすりゃいいのよ……。ただ、ぴょこたんぴょこたん逃げ廻っているしかないの?……。これが、今の私たちの現実だとしたら、やっぱりこっちも、笑っちゃうしかない……。だが、……ほんと、現実、生身の人間としての私たちとしては、疲れてもくるわけだし……。どうしようもなくうんざりして、しようもなくハハハハと笑うか……
レミーは、いっそのこそ、カットナルやケルナグールのように、声を上げて笑おうかとすら思った。
そのときだった。
真吾が、呟いた。
「どうやら撃ち止めだな……」
「えっ?」
聞き返すレミーに、真吾が笑いかけた。
「もう飛んでこないさ。しばらくは……」
キリーは、肩を竦めて聞いた。
「説明を……、納得させてよ。真吾先生……」

「旧式の大砲だ。砲身が熱くなって何度も撃てない。ここいらが限度だな」
……はあ……
一同は、ぽかんと口を開ける。
真吾は、大砲の発射されていたあたりを見て、こともなげに言った。
「ほらな……、もう射ってこない。計算どおりだ」
「それって……、わかってたら……」
レミーは思わず口をとんがらかせた。
「先に言えっ！」
カットナルが、肩のカラスと一緒に喚いた。
「だれも聞かなかった。知っていると思った。常識だろ？」
悪気なくそう言う真吾に、一同は、溜め息をつくよりない。
「いずれにしろ、事態は次に進展しそうだ」
ブンドルが荒野の一点を見詰めた。
砲弾の音以外のものが聞こえてくる。
やはり、二十一世紀育ちの彼らには、耳に馴染まない音だった。
「パチンコ花火の次は何？」
レミーは、目をこらした。それは、馬車だった。
月の光のなか、白い砂煙をあげ、一台の馬車が走ってくる。

四頭立ての、全力疾走だ。
聞き慣れぬ音は、馬の蹄と、岩だらけの荒野をあまりの早さで走るために、馬車の鉄の車輪が摩擦にきしみあげる悲鳴だった。
さらに、その後を、十数騎の騎馬の群れが追っている。
馬車は、まっしぐらに六人のいる方向へ向かっている。
「ここが、どこであろうと、先刻の砲弾は、われわれを狙ったものではなさそうだ」
ブンドルが言った。
「らしいな……」
真吾が頷いて、先刻の砲弾の説明不足を気にしたように続けた。
「どうやら、あの馬車を止めたくて射った威嚇らしい」
確かに、砲弾の落ちた位置は、馬車からすれば進行方向だ。
「そこにおれたちがお邪魔したちゅうわけか……。どうもおれたちはつきがないというか、着地が下手というか……」
キリーは、いかにもけだるそうに、天を仰いだ。
ぽこん、ぽこん……、小太鼓を叩くような音が連発した。
銃声と呼ぶには、あまりに凄味がなく聞こえたが、銃弾には変わりない。
馬車を追う騎馬兵が、撃ったのだ。
何発かが命中したのだろう。いきなり馬車の前の二頭が立ち上がり、前脚を振り上げ宙をか

きむしった。
ぐらりとひと揺れした馬車が、馬の断末魔のいななきを残し横倒しになったとき、そこはもう六人の目と鼻の先だ。
馬車から外れた車輪が、六人の目の前を転がっていく。
馬車の中から、呻き声がする。
怪我人が、いるようだった。
……救ける？……
一瞬、一同は互いの顔を見合った。
だが、馬車を追ってくる騎馬のひづめの音を聞いたとき、六人の態度は決まった。
……関わりを持たない……。ここは、知らぬふりしかない……
六人は砲弾に抉られた穴や岩陰に素早く身を隠した。
追っ手の騎馬兵たちは、馬車を取り囲むと馬から降りた。
昔、レミーが地球の博物館で見た中世の武具のようなものを身につけている。
やがて、騎馬兵の数人が、馬車の中から人影を引きずり出した。
これまた、地球の西洋中世……、トランプのジャックが抜け出したような服を着た男だ。
怪我をしているらしく、なすがままにされている。
騎馬兵のリーダー格らしい男が、近寄っていく。
月の光にリーダー格の手に持った何かが、一瞬きらりと光った。

それは、だれの目にも剣の切っ先に見て取れた。
「アイウート！」
引き出された男の絶叫が響いた。
……アイウート？……
六人のうち、四人が、その言葉に覚えがあった。
地球の数十カ国語に堪能（たんのう）な、真吾やレミー、そしてブンドルはともかく、それはニューヨークのスラム街ブロンクスで育った、キリーにも耳慣れた言葉だった。
……アイウート！……ユダヤ人と同じ移民でありながら、黒人と同じようにアメリカの下層で割りを食っている人々が、年中使う言葉……、そしてなにより暗黒街を牛耳るマフィアたちが、その名づけ親（ゴッド・ファーザー）の前で連発する言葉……。英語でＨＥＬＰ！……
「日本語では……、助けて……」と、真吾が呟いた。
「フランスじゃあ……、オースクール……」と、レミー。
さらに、元、ヨーロッパ情報部のスパイだったレミーには、それがイタリア語の方言に似た発声をしているのに気づいていた。
……イタリアのトスカーナ地方……。でも、少し違うかも……
レミーのそう言いたそうな顔に、真吾は、頷いた。
……やはり、ここは、地球だったのか……
……そんなことよりなにより、あの人は助けを求めている……

……どうする？……

だが、考える暇はなかった。

夜空に、悲鳴が響いた。

それは、どこの国の言葉であろうと区別のない、絶叫だった。

救いのない悲鳴……。いきなり、騎馬兵の剣が、助けを請う男の首をはねたのだ。

……そんな！……

レミーは、思わず、腰に下げた四十五口径マグナムに手をやった。

だが、別の手が、やさしく押し止める。

……え？……

ブンドルだった。

……関わりを持ってはならない……

目が、そう言っていた。

……でも……

ブンドルは、首を振る。

……そう……そうよね……。ここが地球なら……過去に立ち入ってはならない……

レミーは、冷静さを取り戻そうとした。

そのときだった。

騎馬兵たちの歓声が聞こえた。

馬車の中から、もう一人が、引きずりだされた。
「ドンナ！……ドンナ！……」
騎馬兵たちが、口々に喚く。
……ドンナ……、ドンナ……。女……、イタリア語で女！
岩陰で窺うキリーの背筋が、しゃきっと伸びた。
「ノー……」
抵抗する女の声が、力なく聞こえる。
イタリア語でも英語でも、ノーは同じ意味だ。
騎馬兵のリーダー格が、女の被りものを毟り取った。
艶やかな黒い髪、そして月の光に、女の顔が、青白く浮かび上がった。
若い。二十歳は、越えていないだろう。
騎馬兵たちの下卑た笑いが広がる。
女は、もう、声も出ず竦んでふるえている。
この若い娘が殺されるとしても、その前に、何をされるのかだれの目にもわかった。
……ちょっと……、これも黙ってみてろっていうの……
騎馬兵のリーダー格は、いきなり娘の胸元に手をつっこみ、服を引き千切った。
娘は、あらわになった胸を押さえ、崩れるように膝をついた。
口元から、かすかに嗚咽が漏れた。

……辛抱たまらん！　女として！……

レミーは銃を抜いた。

……歴史が変わろうと私がどうなろうと許せないことがある！……

だが、四十五口径の鉛の玉を発射するには及ばなかった。

それより早く五本の光線が、騎馬兵のリーダーの足元に叩き込まれていたのだ。

呆然と振り返る騎馬兵たちの手に持った剣が、レーザー光線に弾き飛ばされていく。

騎馬兵たちの前に、レーザー銃を手にした真吾が、キリーが、ブンドルが、ケルナグールが、カットナルが立ちふさがる。

「カ〜ッ！」

カットナルの肩のカラスが、凄味を利かせて一声鳴いた。

……みんな……

レミーは、うれしくてたまらなかった。

……いよっ！　でたっ！　ゴーショーグンチーム！　カッコ良い！……

と、久々に声をかけたいぐらい五人の男たちが、頼もしく思えた。

「娘に手を出さねば、命まで取ろうとは言わん」

ブンドルが、騎馬兵たちにイタリア語で言った。

リーダー格が、震える指でブンドルを差した。

「おまえたちは、神か……悪魔か……」

「おまえたち次第で、神にでも悪魔にでもなろう……」
ブンドルは、抑揚のない調子で答えた。
「ただちに馬に乗りこの場を立ち去れ……。よいか、おまえたちは、ここで起こったことを他言してはならない……。もし、それを喋れば災いは子々孫々まで及ぶであろう……」
騎馬兵たちは、いつのまにか、ブンドルにひざまずいていた。
「行け！」
ブンドルは、荒野の彼方を指差した。
騎馬兵たちは、おどおどと、だが、馬に乗ると堰を切ったように先を争って逃げていった。
「役者じゃのう……、ブンドル」
カットナルが、感心しきった様子で言った。
「だが、本当にやつらは、わしらのことをくっちゃべらんじゃろうか？　ひと思いに連中をやっつけたほうが、安心だったんじゃないか？」
「おそらくここは、武器や殺しよりも、神や悪魔や魔法の恐れられている時代だ……。無用の闘争をする必要はない……。それに、今のことは、さして歴史に影響を与えなかったようだ。さいわいにしてな……」
「なぜ、そう言い切れる？」
キリーが聞いた。
ブンドルの代わりに、真吾が答えた。

「なぜなら、おれたちは、まだ生きている。ここに今六人いることが、なにより、その証拠さ……」

そのときだった。

「どこの傭兵です？　あなたたち……」

馬車の娘が、千切れた服の胸元を押さえて立っていた。

思わずキリーが呟いた。

「よく見りゃ、美形……」

きりっとした目が印象的な聡明そうな娘だ。

「キャッツ・アイ……、それもずるくない猫……。猫の目だねっていわれたことない？」

キリーが、イタリア語で聞いた。

娘は、微笑んだ。

「グラーチェ……、ありがとう。でも初めてです……そんなこといわれたの……。喜んでいいんですか？」

「もちろんさ……。おれが、女の子にいうことに悪口はない」

「はい……。だったら、とてもうれしいです」

娘は、キリーを見つめ、本当にうれしそうにもう一度微笑んだ。

……あらら……

レミーは、男たちの顔を見て呆れた。

キリーはともかくとして、真吾や、ケルナグール、カットナル、あのブンドルまでが、知らず知らずのうちに娘に微笑み返しているのだ。
おまけに、カットナルの肩のカラスまで、娘に見惚れているようだった。
レミーは、思わずしら〜っとなった。
どうやら……、男たちは、娘の微笑みに、魅了されたようだった。
……にゃろめ、猫の目……
レミーはさっき上げた男たちの採点を一点ずつ落とすことにした。
しかし、それ以上の減点はしなかった。
女性のレミーすら、この娘の微笑は好感が持てたのだ。
それほど、爽やかな笑みだった。
しかし、男たちも、いつまでもにやけているわけではない。
「傭兵と言ったね？　先刻、私たちのことを」
ブンドルが、娘に聞いた。
娘は、微笑を絶やさず、物怖じしない声で答えた。
「はい、雇われたんでしょう？　私を守れと……」
「雇われた……」
「私を助けてくれたんですもの……、そうよね」
「私たちが、兵隊に見えるのかね？」

娘は、こくりと頷いた。
「少なくとも、神様や悪魔には思えません。だって、神様や、悪魔は、人間の私に、こんなにやさしく話し掛けてくれないわ……、きっと」
「おれっちがやさしい？」
キリーは、自分を指差してブンドルと娘の間に割り込んだ。
「はい……。違いますか？　違うかなあ……」
首をひねって、無邪気に顔を覗き込む娘に、キリーは、飲まれてしまった。
「え……、あ……、ことさらやさしいといわれると照れますねえ……」
「にやけるな。おまえは厳しさが足りなさすぎるんだ」
真吾が、キリーの肩を押して娘の前に出た。
「お嬢さん……、質問がある」
「はい？」
娘は、微笑を絶やさず真吾の顔を覗き込んだ。
「え……、あ……、あの……、その……」
真吾は、あまりに無垢に見える娘の眼差しに口籠もってしまった。
レミーは、溜め息をついた。
……駄目だ、こりゃ……。何を聞き出すにしろ、男たちに任せておくと夜が明けちゃうわ……

「女は女同士……。ここは、私に任せて……」

娘は、きょとんとレミーを見詰めた。

「女同士……？」

そして、

「はい？　ってことは……あなた、女の方なんですか？」

レミーの肩の力が抜けた。

確かに、レミーはファイテング・スーツを着て、スカートはつけていない。

……だけれど、美少女さん、今の台詞はないんじゃない？……私、出るとこ出ているつもりだし、髪だって長い……。ブンドルには負けるけど……。そりゃ、二十歳を幾つか過ぎて、ロリコン少年のお呼びはかからないかもしれないけど……。これから、花の女道……、オバタリアンは、まだまだで、フローリアンの真っ盛り……。それを……それを……おっと……と、と、と……。怒っちゃいけない……、私は大人……

レミーは、気を静めて、曖昧複雑な微笑を浮かべた。

「私が、女じゃまずいかしら？」

「いいえ……」

娘は、目を輝かした。

「素敵です。尊敬します。戦う女……、理想です。ギリシャ・ローマ古典の復活です。アマゾネス。大好きです！　進んでるんですね、あなた方の兵団は」

「アマゾネス！……アマゾネスにされてもた」
アマゾネスといえば、敵国の男たちを蹴散らしたという、ギリシャ伝説に語られた筋骨隆々とした女性軍団のことだった。
「わしゃ……筋肉ウーマンか？」
レミーは、いささか傷ついてしまった。
「諸君では、話が前に進まんな」
ブンドルが、苦笑し、娘にもう一度、先刻と同じ質問をした。
「どうして、私たちを兵隊だと思うのかね？」
「違うんですか？　武器をお持ちなのに……」
娘は、ブンドルの手に握られたレーザー銃を見て言った。
「武器か……。しかし、君を追っていた兵隊たちはこの光線をみて、われわれを神か悪魔と思ったようだが……」
「不思議なものを、なんでも神や悪魔や魔術のせいにするのは、遅れた人たちだと思います」
「なるほど……。では、この光線を、どう説明するのかな？」
ブンドルは、レーザー銃を、近くの岩に向けて撃った。一瞬のうちに岩は蒸発した。
「はい、よくはわかりませんけれど、雷の光か何かが、関係しているんでしょう？　でも、人が使う以上、武器は武器です。力が強くなればなるほど、犠牲者が、増えていくだけです」
娘の表情に初めて暗い影が宿った。

「武器を持っているから、あの兵隊たちも人を襲いたくなるのだと思います。単なる、通りがかりにすぎない私を……」
「通りがかり？」
「はい、あの人たちは、どこかの国に雇われた兵隊です。戦争のないときや、お金がなくなれば、雇い主でない限り、持っている武器でだれかれかまわず襲うんです」
「そこを、私たちに救われたわけか」
「はい、旅の私たちを助けてくれる兵隊は、やっぱり、雇った兵隊しかいません。でも私を守るための兵隊は、彼らに襲われて、みんないなくなってしまいました。皆さんが迎えにきてくれなければ危ないところでした」
「私たちは迎えにきたわけでも雇われたわけでもない……。ん？」
ブンドルは、娘の足元に、きらりと光るものが落ちているのに気がついた。
だが、娘はそれどころではなかった。娘の顔に、初めて警戒の色が走った。
「はい？……じゃあ、あなたたちは？」
娘は、六人が味方の雇われ兵だと思い込んでいたらしい。
「安心なさい。私たちも通りがかりのようなものだから……」
レミーが、言った。
「雇い主はいないのですか？」
娘がおずおずと聞いた。

「あいにくと、ここにきたばかりなの」
レミーは、肩を竦めた。
「そう……、そうなんですか……」
娘の表情にまた微笑が戻ってきた。そして、言った。
「でしたら、私が雇います……、皆さん、全部を」
「あんたが、おれっちを雇う？　かわゆい美少女さんのあんたがかね？」
キリーが、すっとんきょうな声で言った。
「はい、私を、私の街まで送ってください。ご損はさせません」
真吾は、六人の大人を平気で雇うなどという娘に、いささか気分を害した。
「損もしたくないが、関わりも持ちたくない」
「せっかく、助けておいて……、こんな危険なところに私を放っていくんですか？　それって、残酷です。はい」
娘は、自分で自分に頷いた。
「絶対ひどいです。違いますか？」
ひたむきな目で真吾に聞いた。真吾は女性のこういう眼差しに耐えられるタイプではない。
「え？……ひどいといえば、ひどいかも……」
しどろもどろである。
そのときだった。

レミーたちが、話している間、地面から何かを拾い上げて、じっと見詰めていたブンドルが、ぼそりと言った。
「雇われてもよかろう。この娘を確かにこのままここにほうってはおけまい」
「しかし……、このまま足をつっこむと……」
真吾は、慎重論だった。
「じゃが、この世界に関わるなと言っても、わしらは、食物もないし金もない。どうやって生きていく？」
それまで黙っていたカットナルが、いきなり現実論を言った。
沈黙し続けるケルナグールは、切羽つまって現実的だった。
口では何も言わない代わりに、空腹の腹がきゅーっと鳴った。
「結局、この娘を助けたときに、関わりができたのかもしれぬ」
ブンドルは、ふーっと溜め息をついた。そして、娘を見据え、聞いた。
「お嬢さん、あなたの名前は……」
「雇われてくださるんですね……。そうでなければ、名前は言えません。ごめんなさい」
娘は、胸の前で十字を切って、ブンドルに謝る素振りを見せてから続けた。
「だって名前を悪用されたくないんです」
「われわれを信じるよりなかろう？」
娘はほんの少しの間ブンドルを見つめてから、こくりと頷いた。

「はい……そうですね……。それしかないですね……。はい、信じます。皆さんを……」
娘は、もう一度頷いてから、
「私……イザベルっていいます」
「イザベルって……」
レミーとキリーが、同時に呟いた。
そして、互いに顔を見合った。
「何か聞きたいのなら、お先に。レディ・ファースト」
キリーが、レミーに恭しく礼をした。
「グラーツィエ（ありがとう）、キリー」
レミーは、イザベルに、向き直った。
「イザベルって……、あなたのお宅、もしかして、名門？」
レミーには、思い当たる人物がいたのだ。
イザベルという名は、ヨーロッパに少なくない。英語やドイツ語ではイザベラとも発音する。
だが、この時代が、四、五百年前のヨーロッパ……、それもイタリアだとしたら……
「ご存じの方は、知っているかもしれません」
「まさか、マントヴァのイザベラ……」
イザベラ・デスケ……。マントヴァの公妃……。イタリアのルネッサンス芸術を語るうえで欠かせない大パトロンの一人だ。

美術評論家の肩書きを持っているレミーが、忘れるはずもない名だ。
あの、寡作で知られる「モナ・リザ」や「最後の晩餐」の画家レオナルド・ダ・ビンチのデッサンにすらその姿を残す女性だ。
「イザベラ・デスケさんのことですか？……私、そんな凄いイザベルじゃありません」
イザベルは、微笑して、首を振った。
……そうよね……。そう簡単に有名人に会っちゃたまんないわ……。でも、イザベルといったら念のために……
「もしかして、お里はカスティリャ……、スペイン関係？」
レミーが、思い浮かべたのは、イザベラ・デスケよりもっと有名なイザベルだった。
スペイン……当時のカスティリャ（日本ではカステラの名に残っている）の女王イサベル一世……。スペイン後期のゴチック建築様式……イサベル様式にその名がつけられ、なによりコロンブスのアメリカ発見の後ろ盾として、後の西洋世界を形作ったともいえる女性だ。
「私は、ただのイザベル……。でも、IでなくYで始まるY・S・A・B・E・L……、イザベルです」
イザベルは、スペルを並べた。
いちいち、スペルを言うところは、それだけ、イサベル一世やイザベラ・デスケを、意識しているといえないこともなかった。
「おれのイザベルは、Iだった……」

キリーがぼそりと言った。
キリーが、地球時代、最後に愛した女性の名だ。
「あいつもただのイザベルさ」
キリーは、肩を竦めた。
イザベルは、そんなキリーに微笑んだ。
「はい、私も、たぶんただのイザベルです」
「ただのイザベルでも……、あなたの里はフィレンツェだね」
ブンドルが呟いた。
「え？……はい……。故郷のフィレンツェへ旅する途中です。でも、どうしてそれがわかりました？」
「落とし物だ」
ブンドルは、地面から何かを拾い、イザベルに渡した。
イザベルが騎馬兵のリーダー格に襲われたときに弾け飛んだらしいペンダントだった。
そこには幾つかの丸い玉と百合の花の紋章が刻みこまれていた。
「あなたの名は……、イザベル・デ・メディチというのだね？……」
「はい……。私の紋章に気づかれたのですね……」
……メディチ家！……
レミーは、茫然とブンドルとイザベルを見つめるしかなかった。

「そう……、丸い玉のいわれは、薬の丸薬……。一介の薬屋からイタリアの大富豪に成り上がった一家の紋章だ。フィレンツェのメディチ家……」
他の四人もブンドルのフルネームを、忘れるはずがなかった。
レオナルド・メディチ・ブンドル……。
だが、今は呆気にとられて、何も言わずブンドルを見据えるだけだった。
なぜ、ブンドルが、メディチ家の人間であると知っていながらイザベルと関わろうとするのか……。だれもその気持ちまでは計り知れなかった。
「雇われてくださるのなら、お願いがあります」
重苦しい沈黙を破ったのはイザベルだった。
「お願いです。この人にお墓を……」
そして、先刻、追っ手に首をはねられた男の屍体の前に跪いた。
「エンリコ……、私の従者です。奴隷の身でした。この世には、至るところに死が溢れ、放っておかれているけれど、この人の死を平然と受け止められはしません」
イザベルの肩は泣いていた。
本気で従者の死を悲しんでいた。
……この娘は……レミーは思った。
レーザー銃という未知の兵器を持つレミーたちを前にして見せた物怖じしない態度、そして絶やさない爽やかな微笑……。しかも、素早く六人を雇い入れようとし、今は、従者の死を悼

み涙を隠そうともしない。
イザベルという娘は、それを自然にやってのけている。
レミーだって、この娘の年ごろには、いくつもの苦境をくぐり抜けた。
だが、ここまで自然流で、対処できただろうか。
……この娘は凄いのかもしれない……
少なくとも、こんな娘にレミーは今まで会ったことがなかった。
イザベルは自分が、メディチ家の血筋であること……、そして、旅の、目的地が故郷のフィレンツェであること以外、何も話そうとしなかった。
六人もあえて聞こうとしなかった。
無理に何かを聞きだしたとしても、その言葉が事実であるかどうか確かめようもない。
真偽の定かでない情報は、状況判断を迷わせる。
中途半端な情報は、かえって邪魔なだけなのを六人はよく知っていた。
だから、言いたくないものは、聞かない。
それが、六人の姿勢だった。
まして、メディチ家といえば、欧州で、二十一世紀の小学生の歴史の教科書にまでその名を残す大富豪である。
細かなところでは、いろいろ、複雑な事情があるに違いない。
六人は、イザベルを、フィレンツェに無事に護衛し、送り届けるために雇われたのであり、

それ以上の関わりは、面倒だし僭越にも思えた。
だが、ブンドルだけはレミーたちに、釘をさした。
「偶然か、はたまた何かの因縁か……。私とこの時代のメディチ家の関係がはっきりするまで、私の名の中にメディチの文字があることをイザベルに秘密にしておいてくれ」
レミーたちは頷いた。
六人の生きた二十一世紀ともなれば、名前に貴族や名門、豪族の名がつく家は胡散臭い者が多かった。
ビスコンティ……フッガー……ハプスブルク……チェダー……ｅｔｃ
過去の名声を金で売り買いした家も少なくない。
名門の出という肩書きほど怪しいものはなかった。
まして、西洋美術に詳しいレミーは、正確な年号は忘れたにしろ、ルネッサンス期に華麗を極めたメディチ家の血筋が、後の十八世紀に最後の後継者大公妃アンナ・マリアの死によって滅亡した歴史を知っていた。
しかし、だからといって、ヨーロッパの複雑な歴史を思えば、血筋や継承関係などどこで繋がっているのかわかったものではない。
もしも、繋がっていれば、イザベルとの関わりは、当然、今のブンドルになんらかの影響を与えるに違いない。
それは、取りもなおさず、レミーたちの今までの歴史にも関わりを与える。

キリーが、肩を竦めて投げやりにいった。
「ごちゃごちゃ考えても仕方がない……。こうなりゃなるようになるしかないさ……」
キリーは、突然現れた好みの娘の名が、昔の恋人(こいびと)と同じ名だったことに、なによりショックを感じていた。
……この娘の名を呼ぶたびにあいつを思い出しちまう……。ああ……なるようになるしかない……。
ブンドルも今はそれしか言いようがなかった。

＊

六人は、イザベルの従者を埋葬すると、イザベル・デ・メディチの傭兵としてイタリア、トスカーナ地方の都フィレンツェに向かった。
それは、この土地の年号で、西暦(せいれき)一四九二年……、コロンブスという男が新大陸を発見したとされる年の早春のことだった。

第二楽章

フィレンツェの暗雲

巨星の墜ちる日

ゆったりと流れる川の向こうに、巨大な朱色の天蓋の教会が見える。
「来たわ……、花の都に」
レミーは、胸の高鳴りを押さえることができなかった。
見間違えるはずはない。
あれが、天才建築家ブルネッレスキの設計したサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のドームだ。
別名、花の聖母寺ドゥオーモ……。
その大理石の壁は、われわれのイメージする純白ではない。
白とピンクと緑の色大理石の組み合わせで構成されていて、石の建物とは思えない暖かさに包まれている。
まさに母を感じさせる寺院だった。
どんな写真も絵画もそのやわらかな色彩を表現してはくれない。
その横には、しっかりと青い空に突き立つジョットの鐘楼。
そう……、青い空のキャンバスにこそ花はよく映える。
レミーはフィレンツェを、何度も訪れたことがある。
だが、そこは二十一世紀のフィレンツェだった。
この街は、なんといってもルネッサンス芸術を生み育てた街だ。
二十一世紀では、もうけっして見ることのできないだろう空の青さが、今、レミーの目の前

に広がっている。
この空の下だからこそ、暗い中世の文化の中に絢爛としたルネッサンス芸術が生まれたのかもしれない。
ミケランジェロが、レオナルド・ダ・ビンチが、ラファエロが、この街の石畳の上を歩いていた十五世紀、十六世紀にこそ、まさに花の都と謳われたフィレンツェの神髄がある。
その時代のフィレンツェにいあわせることができるなど、美術評論家でなくても、胸躍る体験に思えた。
ミケランジェロの、レオナルド・ダ・ビンチの、ラファエロの美術に、まさに作られたその時点で会えるかもしれないのだ。
それに、さすが、当時イタリアで国際都市としても栄華を誇ったフィレンツェである。行き交う人々の髪や皮膚の色もさまざまで、その意味でいろいろとり交ざったレミーたち六人組の一行も、この街では、決して、不自然に見えなかった。
レミーたちは、イザベルを護衛しながら、フィレンツェの動脈ともいえるアルノ川にかかるヴェッキオ橋から、市中に入った。
ヴェッキオ橋は、両側になめし皮屋や肉屋が軒を連ねた中世特有の橋だ。
レミーの知っている二十一世紀で有名なヴェッキオ橋は、観光客めあての彫金細工の店や宝石店の並ぶしゃれたプロムナードだったが、この時代はまだ生活臭の溢れた市民の胃袋を満たすための橋だった。

値段を交渉する客と店の間に威勢のよいトスカーナなまりのイタリア語が飛び交う。
肉の異臭が鼻につきこそすれ、観光客とファッションでしか生きられない二十一世紀の気取ったフィレンツェより、生活のエネルギーが感じられ、レミーには、それがむしろ気持ちよかった。
この活力こそが、ルネッサンスを生み出す素だったのかもしれない。
「これが本当のフィレンツェなんですね……」
イザベルが目を丸くして、まるでレミーの思いそのもののような溜め息を洩らした。
「え?……」
レミーは、そんなイザベルの呟きが意外で、思わず顔を覗き込んだ。
イザベルは、相変わらずの微笑を返した。
「私、初めてなんです。フィレンツェ……」
「でも、あなたは、ここが故郷だって……」
「メディチ家の血を引くものは、どこで生まれても故郷はフィレンツェです。そう教えられてきました。私、いつも夢見ていました、この街を……。私、来たかった……、この街に……」
レミーは、イザベルの目の輝きにいささかあわてた。
女の子のこういう目つきは古今東西、同じである。
それにパリの場末の街で育ったレミーは、行き場を知らずさまよう少女たちの悲惨な行く末を嫌というほど、見てきた。

「あなた、もしかして家出さん？……」
「だと、楽ですよね……」
イザベルは残念そうに首を振った。
「いちおうメディチ家ですもの……、それはさせてくれません。私がこの街に来られたのは、本家様のお呼びがあったからですわ」
レミーは、思わず自分の育ちでイザベルを見てしまったのに気づき、肩を竦めた。
「そりゃそうだ。メディチ家だものね……。並みの未成年のような真似はできないわよね」
「でも、はい……。飛びだしてでも、この街には来たかったんです。たぶん、お呼びがなかったらそうしたかもしれません。はい」
そう言って、イザベルは、自分に言いきかせるように頷いた。
レミーは、いつも落ち着いて見えるこの娘が、なぜか、このときだけ自分を忘れて本気になっているのが、不思議だった。
もっとも、それほど、この時代のフィレンツェは、魅力的なのかもしれない。
……いいえ、いつの時代だとしても、フィレンツェには、私、ミーハーになれるわ……
レミーの胸も、少女のようにうきうきしている。
そのときだった。
鐘の音が街中に響きわたった。
この鐘の音だけは、二十一世紀と変わりはなかった。

サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の鐘だ。
街行く人々の間にどよめきが起こった。
口々に、名前を叫びながら、通りを同じ方向へ歩きだした。
「サヴォナローラ！　サヴォナローラ！」
「ジロラモ！　ジロラモ！」
「なんの騒ぎ？」
そう聞くレミーに、イザベルは、首を傾げる。
「おそらく……」
ブンドルが、代わりに答えた。
「ジロラモ・サヴォナローラ……、フェラーラの聖人のことだ」
レミーは、思わずぽかんと口を空けた。
「あらら……。それって、あの有名人？」
「ここは、一四九二年のフィレンツェだ。その男しかいまい」
レミーには覚えのある名前だった。
いや、イタリア・ルネッサンス美術を語る者で、その名を知らぬ者はもぐりだといっていい。
サヴォナローラ……それは芸術家の名ではない。芸術の破壊者として、後年、凶僧とも呼ばれた修道僧の名だった。
歴史は、その書かれた時代と筆者の立場によって表現を異にする。

時としては、救世主と呼ばれる人物が時代と考え方によっては、悪魔の手先として歴史に描かれるのはよくあることだ。

サヴォナローラが、実際どんな人物かは定かではないが、イタリアのルネッサンス時代を芸術的に評価する者にとって、この男は、あまりよく思われてはいない。

それによれば、様相、性格とも散々である。

イタリアのフェラーラという街に生まれ、鷲鼻の醜い小男で、まともに人と話もできない口下手で陰気な修道僧が、いつのまに神の奇蹟か悪魔の魔法としか思えない弁術を身につけて、口先だけでフィレンツェの修道院長に成り上がった。

そして、徹底的にメディチ家のフィレンツェ支配を攻撃しまくった。

サヴォナローラにとって、メディチ家のやることなすことすべてが神に逆らう悪業だった。

メディチ家のルネッサンス芸術への傾倒と庇護は、神の教えを無視する堕落した奢侈の現れとして、忌み嫌った。

「サヴォナローラ！　サヴォナローラ！」

だが、今、フィレンツェの市民の彼の名を呼ぶ声は熱狂的だ。

イザベルと六人は、人の波に押されて通りを大聖堂の方向へ流されていくしかなかった。

＊

サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の前は黒山の人だかりだった。

説教壇の上に、小柄な僧侶が立っている。

そして、こっけいなほど大袈裟な身ぶりで、説教を始めている。

「フィレンツェよ、悔い改めよ。もはや、待つときではない！　ロレンツィオ・デ・メディチに、神罰が下される日は近い！」

「ロレンツィオ様に神罰？……」

イザベルの顔が心なしか、青ざめた。

これもレミーには憶えのある名だ。

「ロレンツィオ……。そか……サヴォナローラがいれば、当然、ロレンツィオ・デ・メディチの時代よね」

ロレンツィオ・デ・メディチ……彼もイタリア・ルネッサンスを語るうえに欠かすことのできない人物だった。

当時、民主的な共和国といわれた自由都市フィレンツェにおいて、実質的な支配者だった男……。

王政でないにもかかわらず、フィレンツェの豪華王と呼ばれ、他国の王を凌ぐほどの支配力を握っている男が、ロレンツィオだった。

そもそも、メディチ家は、もとはフィレンツェの北にあるムジェルモという田舎の農民の一家だったが、一旗上げるために畑を売り払い、街に出てきたという。

最初は、薬屋だったが、歴代の家長がそれぞれ商才にたけていたのだろう。十三世紀には、

フィレンツェの街でもかなり裕福な一家に成り上がっていた。

やがて、金融業に力を入れだし、十五世紀にもなると、もはやメディチ家は、薬屋というより、銀行家としてヨーロッパ中に知れわたる大富豪になっていた。

とくにロレンツィオの祖父コジモ・デ・メディチのころともなると、その銀行の貸し付け帳簿には、フランス、スペイン、ドイツの王侯貴族が名を連ね、当時のどんな権力者もメディチに借金のないものはいないといわれるほどになった。

コジモは、その莫大な利益をフィレンツェの文化に注ぎ込み、ついにこの街にクワトロチェントと特別に呼ばれる繁栄の一四〇〇年代を生み出した。

ある哲学者は、この時代のフィレンツェをこう書き記している。

「このフィレンツェで、われわれは、大昔の人々が語った黄金の時代を復活させた。すなわち……文学、美術、建築、音楽……その他、今まで人間が失っていたさまざまな創造活動を、このフィレンツェの黄金のクワトロチェントで、われわれは取り戻した……」

伝説の黄金時代の復活……。それが、ルネッサンス（文芸復興）と呼ばれる文化だった。

人々は、フィレンツェの自由な空気に憧れた。

コジモの孫、ロレンツィオの時代、メディチ家に流れこむ利益はさらに莫大になり、同時に、フィレンツェは、繁栄の極に達した。

ロレンツィオの祖父コジモ・デ・メディチが、フィレンツェの繁栄を生みだした「祖国の父」ならば、ロレンツィオはフィレンツェの最盛期を支えた庇護者だった。

その時代、フィレンツェは、ロレンツィオ・デ・メディチの名とともにあり、西欧社会のなかで、まさに黄金のように輝く都に見えた。
だが、今、そのロレンツィオのメディチ家を、あろうことか、フィレンツェの中心サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の説教壇から名指しで誹謗しているのが、修道僧サヴォナローラだった。
「フィレンツェの民よ。金にあかした贅沢を止めよ。目先にちらついた享楽を追い求めるな。フィレンツェは、今、狂っている。賭け事、祭り、飾りだらけの衣服。淫らな香水。おしろい。神を辱める裸の絵や彫刻。何が芸術だ！　これらは猥褻な汚物だ。金に目の眩んだロレンツィオに騙されるな！　神の教えにしたがって、質素倹約し神に祈るのだ。堕落した華美な生活は魂を滅ぼすだけだ。神は、メディチ家とフィレンツェをお怒りである！　そう遠くない日に恐るべき天罰が下るであろう。この説教をしているのは私でなく神である。これは、神の声である！　フィレンツェの民よ。神に許しを乞うのだ！　神に祈れ！　贅沢な悪魔、メディチに耳を貸すな！　そして、堕落の道に誘うロレンツィオを罵るのだ！　ロレンツィオ・デ・メディチは神の敵！　ロレンツィオ・デ・メディチはフィレンツェの悪魔！」
サヴォナローラは天に向かって吠えるように叫んだ。
民衆は歓声をあげる。
ケルナグールが、顎を撫でながら言った。
「おやおや、メディチさんとやら、えらいヤジられようじゃなあ……」

「けしからん！　いつの世にも政府のやり方に反対するやつらは、言いたい放題……。礼儀を知らん！　わしが、この街の支配者のメディチさんとやらなら、機動隊か、軍隊で捻り潰してやるのに……」

昔、アメリカ大統領だったころ、反政府デモで、野次られっ放しだった経験には事欠かないカットナルが、当時を思い出して吐き捨てた。

「おおこわ……。アメリカって、そんなことができる国だったの……」

レミーが肩を竦めた。

「できりゃ、やりたかったわい……。だが、一応アメリカは、民主主義だ。言論の自由っちゅう下らん風習がある。わしもこんなときゃあ苦労したよ」

カットナルは、昔をなつかしむように、目を細めた。

そして、聞かれもしないのに、喋り続ける。

「こんなときには、連中の欲求不満を減らしてやるよりない。これには、歴代の大統領が苦労しておってな……。どうやら、一番いいのは、手ごろな他の国を悪役に見立てて戦争をふっかけることじゃ……。そうすりゃ、国民なんちゅうもんは、日ごろの文句なんか忘れて、戦争に夢中になる。民主主義には、戦争がいちばんじゃ……」

「フィレンツェも、民主主義の街です」

イザベルが、ぽつりと言った。

「フィレンツェでは、言論の自由は守られます。何を言っても言いはずです」

サヴォナローラの声が響く。
「ロレンツィオを神は許さない！……もうすぐ天罰が下る！……目覚めよフィレンツェ市民！」
「サヴォナローラ！　サヴォナローラ！　サヴォナローラ！」
群衆は、サヴォナローラの名を連呼し手を振り上げて答えた。
六人は、その熱狂に圧倒されるしかなかった。
だが、イザベルだけは小さな声で、しかし、はっきりと吐き捨てた。
「でも、馬鹿馬鹿しい……。まるで集団催眠だわ……」
「え？……今、なんて言ったの……」
群衆の歓声のなかで、イザベルの声が聞き取れなかったレミーは、耳をそばだてた。
イザベルは、肩を竦めた。
「別に……早く行きましょう。フィレンツェ見物は後回し……。こんな説教を聞かせられるのはごめんだわ……。こんな説教いらない……。この世に神がいるとしても、私の知っている神様は、こんな野暮は言わないもの。まったく、いったいどうなっているの？　この街は……」
ぶつぶつと独り言を言いながら、人波をかきわけるようにして足早に歩き始めた。
「あ……、待って！」
あわてて、あとを追いながら、レミーは首を捻った。
「ど〜ゆう娘なんじゃ……。私も変わった娘だけど、あの娘はそうとう異色だわ……」

「なんにしろ、今はルネッサンスだ。百花繚乱いろいろなものがでてくる」
ブンドルが呟く。
「どんな時代のどんな女だっていい……、可愛けりゃなあ……。しかし、イザベルって名だけは……、僕は困っちゃったな」
キリーは、意外と純情なのか、それとも単に未練がましいのか、いまだに昔の恋人がちらつくらしくぽりぽりと頭を掻いた。

*

大聖堂を背に通りをしばらく行くと、荒けずりな石積みでありながら優雅な線を持つという一見矛盾したことを見事に調和させた建物が建っている。
イザベルは、脇目もふらずその前まで来ると、ふーっと一息ついて頷いた。
「ここが、メディチ家のはずです……」
レミーは思わず頷いて涙ぐんでしまった。
「そういうことだったはずだけど……、ほんとにいいの？」
そこは、勝手知ったる二十一世紀の観光都市フィレンツェそのままの地理だった。
二十一世紀とルネッサンス期の街の様子が同じなのが何だかとても感動的だった。
破壊の限りをつくした第一次大戦や第二次大戦がその間に横たわっていることを思えば、それは歴史の奇跡といってよかった。

もちろん、二十一世紀では一般に開放されているが、この建物の名はリカルディ宮……イタリア・ルネッサンスの宮殿建築の典型といえる建造物だった。
「私も来るのは初めてだけれど、たぶん、ここでいいはずです」
イザベルは、すたすたと門の前を守る数人の護衛兵に向かって歩いていった。
そして、怪訝そうに見詰める護衛兵に言った。
「イザベル・デ・メディチです。ロレンツィオ様にお目通りに上がりました」
護衛兵たちは、目を丸くした。
「お嬢さん、今、何と言った？」
「イザベルです。ロレンツィオ様にお取りつぎください」
護衛兵の一人が大袈裟に肩を竦めた。
「イザベルちゅう名前は、おれのおばさんにもいるがね……。おばさんどころか、おれの嫁さんが頼んだって、ここは通れる門じゃないよ」
「あなたの奥さんはともかく、私は通らなければなりません。ロレンツィオ様に呼ばれたのですから……」
「ロレンツィオ様が呼んだ？……馬車にも乗らず護衛もいない小娘を、ロレンツィオ様が、お呼びになる？」
兵隊たちはげらげらと笑った。
「護衛ならいます。あそこにいる者たちを雇いました」

イザベルは、道の向こうにいる六人を指差した。
兵隊たちは顔を見合わせ腹を抱えて笑った。
「あれが兵隊？」
「白いのに、黒いのに、黄色に、片目に、女が二人……」
「女が二人？」
イザベルは聞き返した。どうやら、レミーとブンドルのことらしい。
イザベルは、いまさらながらにブンドルを見詰めて肩を竦めた。
「そう見えても、仕方ないかも……。美形ですものね。あの方……」
いくら、ルネッサンスの時代とはいえ、ブンドルほど髪が長いと、まともに男とは見てくれないらしい。
兵隊たちは、六人を指さして笑い続けた。
「おまけに、カラスまでつれて……。ありゃ、道化の兵隊か？」
「はやりの多国籍軍かもしれねえな」
当時のイタリアの都市国家の軍隊は、ほとんど傭兵で成り立っていた。
当然、外人部隊も多かったが、それにしてもレミーたちは、バラエティに富んでいすぎることも確かだった。
「春ともなると、こういうのが出てくるのさ」
と、頭を指差し笑う兵士もいる。

「私は正気です……。それに、人を指差して笑うのはおやめください。人を、身なりや人種で評価するのを、メディチ家は許さないはずです」
　イザベルは、少しだけきつい口調で言った。
「冗談で済んでいるうちに消えるんだな。メディチ家はおまえらのようなお知り合いはいないさ」
　兵隊たちは取り合わない。
「そう……、では、これでもですか？」
　イザベルは、胸のペンダントを見せた。
　メディチ家の紋章が光った。
　兵隊たちの笑いが、とぎれた。
　イザベルは、兵士たちを見据えた。
「おわかりのようですね……、私が、メディチ家の血筋だということが……」
　兵隊の一人が、堅い表情で言った。
「確かイザベル様といいましたな……」
　イザベルは頷いた。
「ええ……、何度でも言います。イザベル・デ・メディチ……、私のことです」
「イザベル・デ・メディチ……」
　兵士たちは、頷き合うと、いきなり剣を抜いた。

「え？」
思わず後ずさるイザベルに、兵士の一人が叫んだ。
「そのペンダント、どこで手に入れた。メディチ家の名をかたる不届き者め……」
イザベルに駆け寄ろうとする六人にも、兵士たちの槍が素早く突きつけられていた。
「イザベル・デ・メディチ様は、数日前に、お亡くなりになったとの報が入っている」
「私が死んでいる？」
イザベルは、一瞬、立ち竦んだ。
だが、うろたえた様子はすこしも見せず、ふっと息をついてから微笑した。
「私が、死んだというなら、ここにいる私は、だれなんです？」
「あん？」
……この娘は、剣をつきつけられても、まるで落ち着いている……
今度は、兵士たちが呆気にとられて、イザベルを見直した。
「イザベル・デ・メディチと、あなたたちは会ったことがあるんですか？　私は、あなたたちと会った覚えがありません。会ったこともない人を、なんの根拠があるのかしりませんが、死んだと決めつけるのは、軽率だとは思いませんか。なぜなら、本人の私が、私をイザベル・デ・メディチと言っているんです。あなたたちは、少なくとも、確認を取る必要があると思いますけれど……、違いますか？」
さわやかな微笑を絶やさず話し続けるイザベルに、兵士たちは何となく気押されてしまった。

イザベルは、話し続ける。

「ここは、世界にその名も知られたメディチ家の宮殿……、しかも、その正面門のはずです。そこを守る兵士が、訪れた者に対して、何者か確かめもせずに剣を抜くような礼儀作法は、メディチ家としてふさわしいものでしょうか？」

兵士たちは顔を見あわせる。

「もしも、私が、ほんとうにイザベル・デ・メディチだったら、この非礼の責任をロレンツィオ・デ・メディチ様は、どう追及されるでしょう？」

イザベルは、兵士たちの顔を覗きこんだ。

レミーたちもあきれて、イザベルを見詰めるじかない。

六人は兵士たちから剣をつきつけられた瞬間に、それぞれ懐の銃に手をやりいつでも発砲できる用意をしていた。

だが、今、剣を抜いた数人の兵士たちを相手に、一歩も引かないイザベルを前にしては、このまま黙って成り行きを見まもるよりなさそうだ。

「どんな素性のものであろうと、メディチ家に敵意がない限り、礼を持って対応すべし……。金融、銀行業のメディチ家にとって、預金する一枚の硬貨さえ持っていれば、たとえそれが、浮浪者であろうともお客様である……。いかなる相手にも礼を失うなかれ。私、メディチのモットーを、そういうふうに教えられてきましたけれど、違うんですか？　メディチ家の宮殿を守る兵隊さんが、それを忘れたのではは困るのではありませんか？」

イザベルは、あくまで落ち着いて笑顔を絶やさない。
……この娘はなんなんだ？……
兵士たちは、困惑するしかなく、互いの顔を見あった。
「しかし、イザベル・デ・メディチ様は、盗賊化した他国の傭兵隊に襲撃されたとの報告が入っている」
「それが、なぜ私が死んだことになるんです？」
「生存者はいないし、未だにイザベル様の身代金をよこせという便りもない。不幸にして、お亡くなりになったと考えるよりあるまい」
「では、このメディチの紋章をつけている私を、どう説明するんです？」
「だから、盗賊の一味か……、さもなくば、それを拾ったか……」
「盗賊の一味が、のこのこ、ここにやってきますか？」
イザベルは、たたみかけるように言った。
「そりゃそうだ……。捕まって火焙りにされるに決まっているからな」
兵士の一人が思わず頷いた。
イザベルは、にっこりと頷き返した。
「でしょう？　私も火焙りなんてごめんです。そんなこと、わかっていながらここに来た私は、でしたら、だれなんでしょう？」
兵士たちは、イザベルの見せる紋章を、まじまじと見詰めた。

……もしかしたら、この娘のいうことは本当かもしれない……。本当に、メディチ家の血を引くイザベルだったら、無礼を詫びるだけではすまされない。下手をすれば、家名を重んじるメディチ家のことだ。兵士の職を解雇されるだけではすまないだろう……
なにしろ、主の親戚に、剣を抜いたことになるのだ。
兵士たちの表情に、動揺がありありと見てとれた。
「あの……、ですから、私……、思うんですけど……」
イザベルは、遠慮がちに言った。
「そんな、恐いもので私たちを捕まえるより、とりあえず、私の身元を確認したほうがいいと思うんです」
兵士たちは、困惑しきった顔で相談を始めた。
「あのう……お話し合いされるのは結構ですけれど、答えは出ないと思うんです。だって、兵隊さんたちのだれも、私がイザベルだってこと、確かめられる人いないんですもの。ここは、早めに、宮殿の中のそれなりの方に報告したほうがよろしいんではないかと思ってみたりするのですけれど……。あの……私たち、その人斬りナイフ、見なかったことにしますから……」
「ほんとうか？」
兵士の一人が、縋るように聞いた。
「はい」
イザベルは、すっきり微笑した。

「ここで、待っていてください」
「はい、待ってます」
イザベルは素直に頷いた。
兵士の一人が、門の中に駆け込んでいった。
残った兵士たちは、おずおずと剣を収める。
ふっと息をついたイザベルは、レミーたちに駆け寄った。
「よかった……。みなさんが、あの雷（かみなり）の武器を使うんじゃないかと思って、ひやひやしていました」
「こちらも同じ、あなたにひやひや……」
レミーが、肩を竦めて微笑した。
「はい？」
イザベルが、首を傾げる。
「たった一人で、よく、やりあったわ……、恐い兵隊さんと……」
「はい、それはまあ……」
イザベルは頷いた。
「恐かったです。とっても……、でも、私、一回、殺されかけた命を、せっかく、みなさんに助けていただいたのに、ここまで来て引き下るのって、なんだか惨（みじ）めで……。だから、焼けっぱちの気分でやりました……、でも……」

イザベルの表情が、少しだけ暗くなった。
「でも？……」
レミーが聞き返した。
「どういうこと？」
「私が、本物のイザベルだってこと、わかる人、ここにいるのかしら……」
「一度も会ったことがない？……」
「私、物心ついたころから、一度もメディチ家の方と会ったことないんです」
六人は、呆気にとられてイザベルを見詰めた。
「はい……。三歳のときに、ヴェネチアの修道院に預けられて、そこから、学校に通ったんです」
「三歳で学校？」
学校の経験のないキリーが、口笛を吹いた。
「はい、いろいろな国の言葉を覚えるのは、世界中と貿易しているヴェネチアが、一番いいという、本家のお言いつけだったそうです」
「なるほど……幼児教育ってことか……。この時代も、子供の教育は大変だったんじゃなあ」
二十世紀後半からの幼児教育ブームで、生まれて三カ月目から語学とパソコンの教育を過剰に受けて乳児性ノイローゼになって以来、精神安定剤入りミルクを十八歳まで手放せなくなった苦い経験のあるカットナルが、感無量のおももちで言った。

「おかげで私、十歳のとき、ヴェネチアの貿易商の養女になり、通訳代わりに、いろいろな国に行けました」
「しかし、ヴェネチアといえば、フィレンツェにとって、時勢によって敵になったり味方になったりあてにならぬ関係だ。メディチ家の血筋を育てるには安全とはいえぬ場所のはずだが？」
ブンドルが、イザベルに言った。
確かに、この時代、イタリアの諸都市は、それぞれの街の利益を拡張するために互いに競い合っていた。
都合次第で、昨日の敵が今日の友になる関係が、あたり前のように起こっている。
特に、フィレンツェとヴェネチアは、最大のライバルとして、たびたび戦争が起きていた。
「ですから、私が、メディチ家だということは秘密だったのです。私自身が、知らされたのも三年前のことでした。突然、育てられた修道院の院長様からペンダントを渡されて、そう聞かされたんです。私がメディチ家の血筋だなんて、ほんと信じられませんでした。でも、フィレンツェって、私、憧れていましたし、生まれが馬小屋のみなしごって言われるよりはましでしよう？」
「ましというより、小公女、小公子、の世界じゃ」
ケルナグールが二十歳（はたち）過ぎまで、擦（す）り減るほど、何度も読んだ愛読書の名をあげた。
「もちろんヴェネチアの人々は、フィレンツェをよく思っていません。まして、メディチ家な

どと言ったら、石どころか、大砲の弾が飛んできかねません。ですから、ヴェネチアにいる間、身元はだれにも明かせませんでした。知っているのは、修道院に出入りする数人の人だけです。それが、いきなり、今になってメディチ家からお呼びがかかったんです。早急にフィレンツェに行き、ロレンツィオ・デ・メディチ様にお会いしろって……。でも、ご存じのとおり、一緒に来た人たち……、私がメディチ家のイザベルだってことを証明してくれる人は、襲撃されてみんな殺されてしまったし……、そうですよね……、このペンダントだけでは信じてもらえそうにありませんよね」

イザベルは、自分で自分の言葉に納得しながら溜め息をついた。

「困ったな……。いったいどうしたら、私がイザベルだってわかってもらえるのかしら……。ほんと……、これは困った……、ですよね」

イザベルは、門の前の階段に、頬杖して座り込んでしまった。

「この娘が本人だと証明できなければどうなるんじゃ？」

ケルナグールが聞いた。

「この時代じゃ、名門の名を騙った罪で、拷問の末、舌を抜かれるか、さもなければ魔女あつかいされて火焙りじゃろうな」

なぜか、刑罰の歴史だけは明るいカットナルが呟いた。

「はい、そんなところです……」

イザベルが頷いた。

「かわいそうに……。なんとかしてやりたいのう」
ケルナグールが、小公女を読んで涙を流した日々をなつかしんで呟いた。
「おい、のんびり心配してあげてるけど、そうなりゃ、この娘についてきたおれたちもおんなじ目に会うんだぜ……」
キリーがケルナグールの肩をちょんちょんと叩いた。
「ん？……そ、そか！　そりゃたまらん」
ケルナグールはあわててイザベルの顔を覗きこんだ。
「あの……、娘さん、証明写真のようなものはないのかね」
「あるわけないだろ……。写真は十八世紀の発明だ」
真吾が肩を竦めた。
「血液型は？……」
カットナルはそう言いかけて……、
「わかるわけない。この時代じゃのう」
イザベルは、六人を見詰めて言った。
「こうなれば……、なるしかなりませんよね……。ごめんなさい。みなさんを巻きこんでしまって……。あ……、ごめんを言っても済みませんよね、火焙りじゃ……。でも、今は、ごめんなさいとしかいえませんよね……。ごめんなさい」
ぺこりと、頭を下げた。

そんなイザベルに、六人は思わず飲まれて顔を見合った。
……こんなときに、他人に謝る気持ちを持てるなんて……。素直というか……、度胸があるというのか……
「あなたって……」
レミーは、ふっと息を吐いた。
「はい？」
イザベルは、邪気のない瞳でレミーを見上げた。
「ごめんしなくてもつきあうわ」
レミーはにっこり笑ってそう言った。
六人は、イザベルを挟んで、門の前の階段に座り、頬杖をついた。
兵隊たちは、どうしたらいいのかわからず、遠くから漫然と見詰めるだけだった。

*

何となく間の抜けた時間が経っていった。
イザベルとレミーたちは、兵士たちを無視し、宮殿の前を行き交う人々をぼんやりとウォッチングしていた。
兵士たちも、なす術がなく無視を装って立ち話をしている。
宮殿の前の広場ともなると、やはり上流階級の男女が集まってくるのだろう。

ヴェッキオ橋の喧騒とはうって変わって、きらびやかで優雅な立ち居振る舞いの男女が通り過ぎていく。

これでモーツアルトかプッチーニの曲がバックに流れれば、パリやミラノのオペラ座の舞台が、そのまま抜け出したような情景だ。

……そういえば……、確か、オペラってルネッサンスの時代に始まったのよね……

レミーは、世界最古のオペラ劇場が、このフィレンツェに、他ならぬロレンツィオ・デ・メディチによって建てられたという音楽史を思い出した。

そう、ルネッサンスは美術だけではない……。音楽、文学、芸能、さまざまな欧州文化が芽ばえ花開いた時期だった。

……でも……

レミーは行き交う女性たちの姿に首を捻った。

お腹のせりだした女性がやたらと多いのだ。

しかも、その膨らみを誇示するようにゆったりもったりと歩いている。

「生めよ増やせよかぁ……。いくら芽生えのルネッサンスだからって……」

同じことをイザベルも思ったのか肩を竦めて言った。

「まるで、シニョーラ（ミセス）美人コンテストですね。この通りは……」

「美人コンテスト？」

「はい、子供を身籠もっているのがシニョーラ（既婚女性）の美しさの基準ですから……」

レミーは首を傾げた。

……はあ……。この時代は妊娠したスタイルがグッドプロポーションなのか……

そういえば、中世の宗教画に描かれる女性は、なぜかお腹が大きく描かれている。

しかし、お腹を抱えた生身の女性が、目の前にぞろぞろ現れて「美人でしょ？」と言われると、いくら女のレミーの美意識でも、何だか恐れ入ってしまう。

イザベルが肩を竦めて言った。

「でも、妊娠が、女の美徳なんて、古い偏見だと思うんです。お腹が膨れていようといまいと結婚した女性の美しさに関係ないと思うんですけど……」

「時代はいつでも女に偏見を持っているわ」

とりあえずイザベルにはそう答えたものの、かつて住んでいた二十一世紀の、女性に拒食症的エアロビクス努力を強いる女性美への偏見よりは、よほど健全だとレミーは思った。

……もっとも、ダイエットも妊娠も過ぎたるは体が大変……。女はいつの世もスタイルに泣かされる……。これというのも男の女性美への偏見のせいだ……

「早い話が、男が悪いのよ」

「それだけでしょうか……。生めよ増やせよ……。キリストを懐妊したマリア様の姿こそ女の鏡……。そんな考えを額面どおり信じる人が悪いと思うんです」

イザベルが呟いた。

「え？」

レミーは、思わず耳を疑った。

生めよ増やせよは、言うまでもなく聖書の言葉。聖母マリアはこの宗教のシンボル的存在だ。俗に言えばアイドルだ。ルネッサンス期のフィレンツェで、いくら自由な考え方の芽ばえたころとはいえ、教会の力が全盛の時代に、イザベルのこの発言は危険すぎはしないか……。

「それって、大声で言っていいのかなあ……」

「はい、だから小声で言ってます。人に聞かれたら、神を恐れぬ不届き者と言われて魔女あつかいの火焙りものかもしれません。これって、レミーさんだから言える気します」

「どうして？」レミーは、聞いた。

「レミーさんが、どこから来たのかは知りません。でも、フィレンツェしている人って感じがするからです」

「フィレンツェしてる？」

「何か新しい雰囲気(ふんいき)です。新しいなにかを生みだそうとするこの街の空気です。今までの時代の女の人と違うなにかです」

……ルネッサンスの雰囲気ってこと？……そりゃ、私は、十五世紀末よりは新しい二十一世紀育ちだけれど……。この時代に教会批判と思われかねないことを、けろりと言えるイザベルこそ女のルネッサンスそのもののような気もする……

「それにしても、ちょっと大胆(だいたん)……」

「はい、思わず、言ってしまった私自身、今、ぞ～っとしてます。少し、言葉には気をつけな

ければ」
「そうね。お互いに……」
「よかった……。レミーさんが私の思っていたような人で……」
「えっ？」
「私の言ったことを聞き流してくれました。やっぱり、フィレンツェしている人です。レミーさん」
イザベルは、心から嬉しそうに微笑んだ。
……もしかしたら……と、レミーは、ふと思った。
教会批判という命がけの言葉で、この娘は、私を試したのかもしれない。
……いいえ……、レミーはそんな思いをすぐ打ち消した。
この娘は、信頼できると感じた相手に正直なだけなのだ。
その意識しない大胆さが、この娘のさわやかな瞳の魅力になって現れているのかもしれなかった。

＊

「カミーユ・デ・メディチ様がお会いになるそうだ」
宮殿に伝えに行った兵士が、ようやく戻ってきて言った。
「カミーユ・デ・メディチ？」

イザベルは、その名を知らないらしく、肩を竦め首を振った。
「ロレンツィオ様の養女に当たられる方です。イザベル様が、本当にあなただったら、お世話をいただけるはずの方です」
先刻とはうって変わった丁寧な口調で兵士が答えた。
しかし、疑わしそうに、付け加えるのを忘れなかった。
「本当にあなたがイザベル様だったらですがね……」

＊

イザベルとレミーたちは、宮殿の広間のひとつに案内された。
四方の壁は、巨大なタペストリーが掛けられ、壁ぎわに大理石の彫刻が、七人を迎え入れるようにずらりと並んでいる。
そして、敷きつめられた絨毯の上に、黒檀に無数の貝殻を鏤めた三十人は座れるテーブルが置かれてあった。
「これが、メディチ家の応接間か」
「何千万ドルかかるかのう……」
カットナルとケルナグールは、広間に入ってくるなり品定めを始めた。
アメリカで大資産家に成り上がった二人だけに、贅沢品の値段にうるさい男たちだ。
だが、天井を見上げるなりうめき声を上げ黙ってしまった。

天使と聖母が描かれた壮麗な天井画が、見下ろしている。
しばらくぽかんと口を開けていたカットナルが呟いた。
「中東や中南米の小さな戦争なら、この広間だけで勝てるぞ」
「あん？」
「ミサイルの百発は買える」
「政治家の考えることは、いつもそれじゃ……。わしならCNN放送を一週間買いしめ、ケルナグール・フライドチキンのコマーシャルを全世界に流しっぱなしにするがな」
「それにしてもえらい広間をこしらえたもんじゃな……」
「この広間はたいしたことないわ」
美術評論家としてのレミーが呟いた。
「たいしたことがない？」
ケルナグールが目をむいて聞き返した。
「アートとしては、二流よね。メディチ家はもっと素晴らしい彫刻や絵のある宮殿をいくつも持っているもの」
「いくつも！」
カットナルとケルナグールは、溜め息をつくしかなかった。
「わしらにはとうてい無理だな」
二十一世紀の成金ランク・ベストテンの末尾を汚した経験のあるカットナルとケルナグール

は、今にも泣きだしそうだった。

……わしらの長年の努力が、イタリアのちっぽけな街の金持ちの足元にも及ばないとしたら……

……僕の青春は何だったんだ……。こんな広間ひとつでメディチ家に舌を巻くしかないなんて……

しかもそれが、メディチ家の計り知れない財力のほんのひとしずくにも満たないと知ったら、二人は、しらけきって人間をやめかねなかった。

ブンドルは、ふっと笑った。

「ルネッサンスのメディチには、もうだれもなれまい。なる必要もない。その華麗な消費の痕跡を、われわれは沈黙して観賞するしかない」

だが、観賞する時間はそうなかった。

扉が音もなく開き、衣擦れの音を響かせて、数人の護衛兵を従えた女が入ってきた。

「イザベル・デ・メディチを名乗るものはそなたか？　私がカミーユ・デ・メディチです」

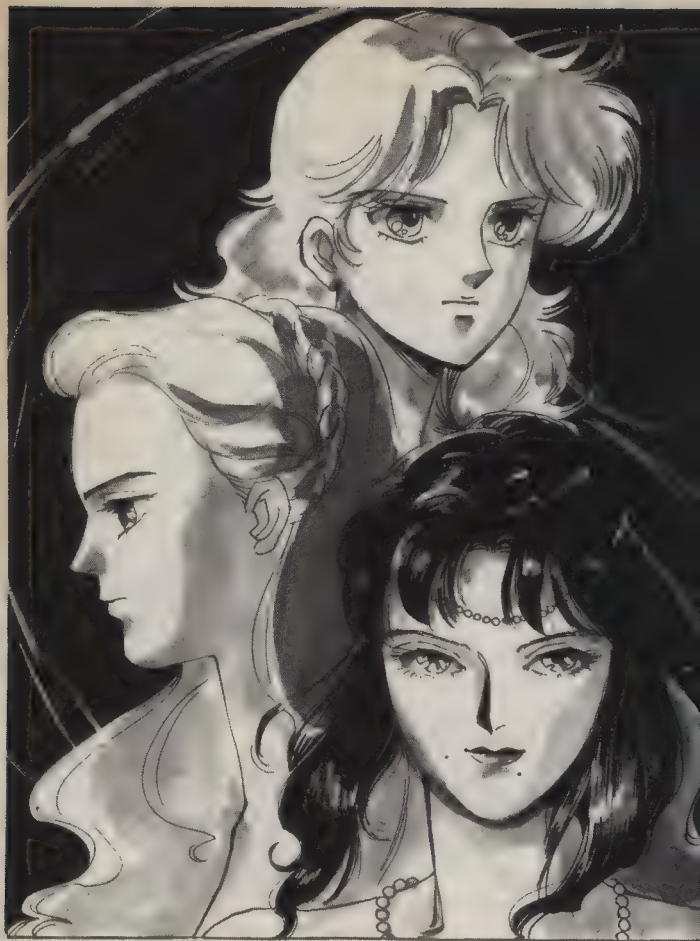
女を見た一同は、思わず息を飲んだ。

一言でいえば美人だった。

しかし、美人というより妖艶という言葉がこれほど似合う女性はいなかった。

歳は三十を越えているかもしれない。

だが、抜けるように白い肌。衣服で隠しきれない胸。くびれた腰。うなじの上に束ねた黒く

長い髪。そして潤んだ目……。口元の小さなほくろ。なによりしっとり濡れた薔薇色の唇。
まるで、ゴヤの描いた着衣のマハの絵を彷彿させる女だった。
それでいて、衣服を通して裸のマハをも感じさせる。甘く熟れた色の香りが息苦しいほどに漂う……。女がもつ艶がそのまま溢れ出たような女性がそこにいた。
「こんなのいるんだ……、世の中に……」
レミーは呆気にとられた。
ここまであからさまに女の色気を匂わされると、男の偏見もフェミニズムも裸足で逃げだし、ふっ飛んでしまいそうだ。
女が女……、そのまんまもろに女が武器で何が悪い、と、この女性に居直られたら、レミーとしては、恐れ入って、ごめんなさいとしか言いようがない。
……やっぱ……、本場のルネッサンスなのかな……。イザベルといい、この女性といい……、なんだかルネッサンスしている。……何が、女のルネッサンスだか知らないけれど……
若いイザベルも、落ち着かない気分に襲われたらしく、カミーユとレミーを交互に見据えている。
カミーユの持つどろどろとこぼれだすような女の香りを意識すればするほど、今までは気がつかなかったレミーの魅力まで、気になってくるらしい。
カミーユもまた、イザベルの持つ輝きとレミーの煌めきに刺激されるのか、針のような視線を浴びせかけた。

まるで、三人の女が、それぞれに持つあまりに異質な魅力に三竦みになってしまったようだった。
五人の男たちはといえば、これも何となくレミーとイザベルとカミーユを順番に見詰めていた。
比較しているわけではない。比較しようもなく違い過ぎる三人の女性だ。
思わずキリーが呟いた。
「洋食……、和食……、中華だ」
……どれもこれも美味しいものは旨い……
だが、けっして旨いとはいえない気不味い空気が、三人の女性たちには流れていた。
カミーユは、イザベルとレミーから目をそらすと、真吾から順に今度はじっとりとした視線を送り、最後にブンドルを、舐めるように見据えてから口を開いた。
「この娘がイザベルかどうか確かめなければなりません」
「私が私だということを確かめる方法があるのですか？」
イザベルが聞いた。
「イザベル・デ・メディチについては、生まれたときから十七歳の今まで、調べつくした記録があります。たとえフィレンツェと敵対するヴェネチアにいても、あなたが毎朝何を食べ、毎夜、いつベッドに入ったか、一日として欠さずお見通しでした」
イザベルは、ぽかんと口を開けた。

「見張られていたんですか？　毎日毎日、十七年間も……」
「大切なメディチ家の血筋なら当然のことです」
カミーユは、こともなげに答えた。
「おそらく、あなたが忘れたことまで、しっかりと記録されているはずです。わたしたちは、イザベル本人よりもイザベルのことを知っているでしょう。ただし、目を離した時期がないわけではありません。今回、メディチの血筋の娘が世界中からフィレンツェに集められました。そして、あなたについていた監視員は旅の途中で、みんな殺されてしまった」
ヴェネチアからだけでも七人います。どうしても監視員が手薄になりました。そして、あなたについていた監視員は旅の途中で、みんな殺されてしまった」
イザベルは、明らかに気分を害した表情で言った。
「それでは、私が私である決め手はないんですね……。いくら、監視員さんご苦労様の記録で私をテストしても、十二歳の誕生日のお昼に何を食べたかなんて、私、思いだせませんもの」
カミーユは、かすかに微笑した。
「十二歳……、あなたが子供を産める体になった年ね……」
イザベルは一瞬、頰を赤らめたが、すぐにカミーユを見返して言った。
「私、それ、だれにも話した覚えはないのですけれど……。ほんとうにご丁寧に調べているんですね……」
イザベルは、肩を竦め、意を決したのか、唇を嚙んで頷いた。
「わかりました。徹底的に私をテストしてみてください。もっとも、忘れたことは、答えられ

ませんし、他人のあなたが、忘れるはずがないと思ったことでも本人の私が覚えていなければどうにもなりませんけれど……」
「そのとおりです。あなたの過去の記録は、確かな決め手にはなりません。でも、わかる方法があるのです」
カミーユは、イザベルを見据えた。
「裸になってもらわなければなりません。それも、ある男の前で……」
「裸？」
イザベルは、思わず息を呑んだ。
カミーユは、イザベルの動揺を見透かすように、ひやりと笑った。
「ええ……。そして、体の隅から隅まで触られるでしょう。あなたがどう感じるかは知りませんけれど……」
イザベルは、即座に言い返した。
「どう感じるかなど、本人次第です……。ただ、そういうことって、好きになった男の方でないとうれしくないと思います。経験はありませんけれど……」
「それは承知しています。旅の途中で何かあったら別ですけれど……。でもメディチ家の女は好き嫌いで、相手の殿方を評価してはなりません。それとも、この試験を断って、メディチ家であることを止めますか？」
イザベルは、はじめて相手を睨んだ。

「このまま帰していただけるのなら、止めますわ。いえ、メディチ家の血筋を引く女だからこそ、誇りを持って、好きでもない男に体を触れさせはしません」
「このままは帰れません……。断れば、あなたは、メディチの名を偽ってかたったものとして、それこそ、その白い皮膚をむかれた裸で、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の前の広場でさらしものにされるでしょう」
イザベルは、むきになって言い返した。
「皮膚をむかれたらもう裸じゃありませんね。きっと、私、恥ずかしいとは思いませんわ」
「そうね……。人体標本に触れたがる男もいないでしょうしね。たとえ、あなたが好きな相手でも……」
まるで、売り言葉に買い言葉だ。
このままでは喧嘩になって、イザベルが、本当に標本にされかねない。
「待って……、ちょっと熱くありません？」
二人のやりとりを黙って聞いていたレミーが、ことさら軽く言った。
「えっ？」
二人は、肩透かしを食ったように、レミーを見た。
「火花が飛んでる感じ……。花火はフィレンツェで発明された名物だって言うけれど、いまはまだ昼間……。でもって、質問……。イザベルさんを裸にして何がわかるの？　体に、メディチ家の紋章でもあるのかな？」

「なもの、ありません。家財道具じゃあるまいし」
イザベルがすねたように口をとんがらかした。
「ごめん……。そんなんじゃなくて、生まれたときから変わらないほくろとかね……」
「小さいのを入れると二十四個あるはずです」
イザベルが話す前に、カミーユが当たり前のように答えた。
「え？　私、そんなにあるんですか？　ほくろなんてひとつもないと思っていたのに……」
イザベルは信じられないというように首を振る。
「人間にならだれにでもある。二十四では少ないほうじゃ。しみひとつない肌といっていいぞ」
医学に詳しいカットナルが、突然知識を披露した。
また話が、脱線しかねない……。レミーは、話を元に戻した。
「でも、それを調べるのに、なぜ男の方が必要なの？　男が女性の裸を虫眼鏡で覗く姿なんてルネッサンスのあぶな絵としたって、価値があるとは思えないし、だいち、品定めのために、この娘のような貴重品の壊れ物を簡単に殿方に触らせるなんて、もったいなくありません？」
「壊れるかどうか触れてみなければわかりません。隅々までね」
カミーユは、イザベルを標本でも見るような目で見た。
そのときだった。
「恐れながら、その娘、もうわかりました」

猫背で、伏し目がちの男が入ってきて言った。
歳のほどは二十五、六……生彩のないやつれた顔だが、眼光だけは異様に鋭かった。
鼻筋が、だれかに潰されたのか、極端に歪んでいた。
さらに、身にまとった服は、乾いた泥がこびりつき、そこが、華美なメディチ家の広間だけに異質だった。
「仕事中に、呼び出され何かと思えば、またしても血筋調べ。私の指を煩わすのはもう、ご勘弁願いたい。わざわざ触れずとも、その娘、メディチ家の血を引くイザベルに違いありません。私には見ればわかります」
レミーは、この男を知っているの？　とでも聞くようにイザベルを見た。
イザベルは、首を振る。
「触れずともわかる？」
カミーユが聞き返した。
「ここ一月、メディチ家の血筋の婦女を触り過ぎました。もう私は、その娘の歩き方を見るだけで、解剖をしたように骨格、内臓、血液の状態がわかる。その娘は、確かにメディチの血を引いている。何なら、その娘が、メディチ家のだれとだれの間に生まれた娘かまで言いあてましょうか？」
「そこまでは不要です。しかし見ただけでわかるとはたいした自信ですね」
男は、明らかに機嫌を損ねてカミーユを睨んだ。

「私の目を、お見損ないになりますな。私の仕事は、人間の体の動きはもちろん、人体の内部を知りつくしてこそ可能です。私の目と指は、外から、それを探ることができる。まして、百人を越えるメディチ家の婦女を触った今、メディチ家の血を引いた女子の体内の特徴など、触らずとも衣服の上からですら見て取れます」

ケルナグールが、感心してカットナルに言った。

「あの男、まるで人間レントゲンじゃな」

カットナルは、納得して何度も頷いた。

「なるほどな、骨格と内臓の状態で、身元を確かめるのか……。こりゃ、血液検査よりも正確かもしれん」

キリーが、囁いた。

「じゃあ、あいつは医者か？　にしちゃあ、薄汚ねえなあ……。消毒が、いりゃあしねえか？」

幸い、キリーの声が耳に入らなかったらしく、男はカミーユに話し続けた。

「しかしながら、私の指は女の体をまさぐり、その血筋を確かめるものではありません。この指は、土や、石に、生きとし生けるものの姿を形作り魂を吹き込む、神より授かりしものです。やわな女体で、これ以上この指をふやけさせるのは堪りませぬ」

ブンドルが、だれに言うでもなく呟いた。

「あの男、おそらく、彫刻家、絵も描くに違いない。……この時代の芸術家は、より迫真の表

現を求めて人体の仕組みはおろか、自然科学まで詳しく研究したそうだ。それを血筋調べのために使われては……、その忸怩たる思い、わかるような気がする」
カミーユは、男に念を押した。
「確かに、この娘を、メディチ家と信じていいのですね」
「それを疑うのは、私の作り出す彫刻を疑うのと同じことです。私の目を疑うことは、私をお抱えになったロレンツィオ・デ・メディチ様の目すら疑うことです。そう受け取ってよろしいのですか？」
カミーユは、言葉に詰まった。
「では、私はこれで……。今、制作中の作品の粘土の感触を忘れたくありませんので……」
男は、一刻も惜しいような素振りで、きびすを返して広間から出ていこうとした。
「お待ちなさい」
カミーユが呼び止めた。
そして、舐めるような目で、男を見詰めた。
「もう、血筋調べをあなたに頼みはしませんわ。あなたの目と指の素晴らしさは、まさに神の授けしもの……。今度、私をお願いできませんかしら。大理石の上に私そのものを写していただきたい。私、あなたの彫刻のためなら、芸術に無知な生娘のように触れられるのを嫌がったりしませんわ。よろしいこと？　ミケランジェロ・ブォナルローティ」
……ミケランジェロ！　この男が……

レミーたちは、呆気にとられて男を見た。
ルネッサンスの巨匠、ローマ・バチカン宮殿のシスティナ礼拝堂の天井画。最後の審判。ダビデ像。ピエタ。その作品名は知らなくても、二十一世紀、いや、二十世紀でもいい……、地球に生きていたことがあるなら、一度はその作品を写真で見た覚えのある、だれでも知っているミケランジェロ本人がそこにいるのだ。
ケルナグールさえ知っていた。
「コーヒーの名前じゃろ？」
「そりゃ……、キリマンジャロ」
真吾が、丁寧に訂正してやった。
ミケランジェロは、カミーユに振り向くと首を振った。
「女の体はもう真っ平です。私の指がそう言っている。私は男を描きたい。モデルにするなら、むしろその男を……」
ミケランジェロは、レミーの仲間の一人を見詰めた。
ブンドルでも真吾でもキリーでもなかった。ましてカットナルでもなかった。
「わ、わしがモデル……」
柄にもなく怯えてるように竦んだのは元プロボクサー……、世界チャンピオンだった男、ケルナグールだった。
「さよう……。老いたダビデ……。躍動したかつての肉体はくたびれ、力は弛み、筋肉の残骸

となったダビデ……。描きたい題材だ……。触れてみたい肉体だ……」
美術評論家としてのレミーは、自分がモデルに選ばれたようにいささか興奮して呟いた。
「ミケランジェロがあなたをモデルに……、凄い」
「けど、ヌードになるんじゃろ……。わし、自信ない」
ミケランジェロは、肩を竦めた。
「ならば、私はここに用はない。いずれにしろ、まずは、若く逞しいダビデを作ってからだ。
だが、いつかきっと……。私は、あきらめませんよ……」
ミケランジェロはケルナグールに微笑みかけると、まったくカミーユを無視して出ていった。
だが、カミーユは、気分を害した様子もなく、むしろその後ろ姿に笑みを送っていた。
「芸術家は可愛い……」
そして、くるりとイザベルに向き直って言った。
「イザベル・デ・メディチ……、歓迎します。それにしても……、奇妙な傭兵たちね」
カミーユは、ミケランジェロを見詰めた同じ目で、五人の男たちを見詰めた。
そして、擦り寄るようにブンドルに近づいた。
「特にこの殿方。長い髪がことのほか、たおやか……」
「殿方?……男?……」
供の兵士たちがどよめいた。
兵士たちも、ブンドルを女と思い込んでいたようだ。

「お黙りなさい……。不粋な者ども……。この方の男らしさを理解できぬか？　まるで、伝説のアポロのような、男の美を……」
……アポロ！……よくいうよ……
レミーは思わず咳込んだ。
だが、当のブンドルは、照れた様子もなく、まして怒りもせず平然と言った。
「この私を、男と認めてくれるのかな」
「私には、ここに入ってきたときから香りでわかりました。しかし、いくら殿方といえ、見るところ何の武器も持たずに、どうやってイザベルを守るおつもりだったのかしら？」
「それなりに……」
ブンドルは、そっけなく答えた。
カミーユはひやりと笑い、供の兵士の傍へ行く。
「それなりにね……。ならば……、こうすればどうします？」
「逃げて！」
叫んだのは、レミーだった。
カミーユの声と雰囲気に異様な殺気を感じたのだ。
おそらく、女同士でなければ気がつかない、じめついて陰湿な感覚だ。
だが遅かった。
カミーユは、いきなり供の兵隊の持っていた剣のつかを握り、奪い取るように抜くとブンド

ルの頭上に叩きつけた。
ガシッ！
鈍い金属音がした。
ブンドルはびくとも動かなかった。
剣は、ブンドルの額、すれすれのところで、ブンドルの抜いたレーザー銃のグリップで受け止められていた。
ブンドルとカミーユの目は、数センチの距離で見据え合っていた。
ふっとカミーユの瞳が笑った。殺意はいつのまにか消えていた。
カミーユは、剣を引いた。
「お見事だわ……。少しも動じてらっしゃらない。男はやはりたくましさ。いくら美しいとはいえ、殿方は、こうでなければ価値がありません……。ごめんなさいね……、ほんの悪戯ですわ……」
……嘘つけ……
レミーは、袖をまくってカミーユを引っぱたいてやろうかと思った。
……あれが、悪戯のわけがない……。確かにこの女は、ブンドルを殺す気だった……
……でも、今は……、なに？　あれは……
レミーは、カミーユのブンドルを見詰める瞳に呆気にとられた。
まるで、初恋に目醒めた十代の少女の目のようにうるんでいる。

……こんなのあり？……

だが、ブンドルは、そんなレミーの気持ちを知ってか知らずか、カミーユに答えた。

「なかなかに洒落た悪戯……。今まで何人に試したのかな？……」

「これはと思った殿方は、そうはおりませんわ。いずれ、あなたとだけでお話を……。もっと、お洒落な悪戯もありましてよ……」

カミーユは、妖艶な微笑をブンドルに投げかけてからイザベルに向き直った。

「イザベル……、あなたが、イザベルとわかった以上、ただちにロレンツィオ様に会っていただきます。私の従者に案内させましょう」

今までが嘘のように、毅然とした口調でそう言い、兵士たちに馬車の用意を命じた。

「待ってください。ロレンツィオ様はここにおいでではないのですか？」

イザベルがカミーユに聞いた。

「ロレンツィオ様は、おかげんがよろしくなく、フィレンツェ郊外のカレッジの別荘においでです」

「そうですか……」

イザベルはカミーユを見据えた。

「では、私の兵士を連れてまいります」

「兵士たちを？　メディチ家に来た以上、あなたの安全はメディチ家の兵士が守ります」

「メディチ家の兵士は、今度の旅で、私の安全を守れたとはいえません。私の兵隊たちがいな

ければ、カミーユ様が疑われたように、私は死んでいたでしょう。私は、この人たちと離れたくないのです」
「あなたの世話をするのは、ロレンツィオ様から言われた私の役目です。私の指示に従いなさい。さもないといろいろ不都合が起こるやもしれませんよ」
　カミーユは、威圧するように言った。
　イザベルは一歩も引かなかった。
「それはあらためて、ロレンツィオ様からこの耳で聞きます。失礼ながら、カミーユ様は、ロレンツィオ様の養女とか、このイザベルは、メディチの血筋です。血は水より濃いと申します」
　カミーユは、うっすらと笑みを浮かべた。
「その気の強さも、いつまで続くことか……。では、イザベル様、お好きになさい」
　カミーユは、くるりと踵を返して出ていった。
　イザベルは緊張が解けたのか、大きく息を吐きだし呟いた。
「もう、ほんと……、恐かった……」
　今まで黙ってことの成り行きを見ていた真吾が、レミーにそっと囁いた。
「どうも、外よりメディチ家の中のほうがうさん臭いな……」
「同感だ」
　ブンドルが頷いた。

「わかっているわ」
もとよりレミーも、そのつもりだった。
なぜ、イザベルが死んだとメディチ家は思い込んでいたのか……。
しかも、手薄になったとはいっているが、十七年間も監視員がついていたイザベルである。
あの襲撃は、本当に、盗賊化した他国の兵の仕業なのか……。
レミーは、カミーユの出て行った扉を、じっと見据えた。

*

時は春……。
フィレンツェは郊外も花の都の名にふさわしい。
馬車の窓から、ここちよい花の香りが忍び込んで来る。
二台に分乗したレミーたちを乗せた馬車は、花咲き乱れるフィレンツェの郊外を走っていた。
イザベルは、窓の外を眺めながら、何気なく歌を口ずさんでいた。
「春よ、君は美しすぎる。
けれど、こぼれ落ちるように去っていく。
若き者、楽しむがよい。
今という時を逃さずに……
確かな明日はありはしないのだから……」

レミーは、そのメロディは知らなかったが、詩を、どこかで読んだことがあった。
「いい歌ね……」
レミーは、聞くでもなく呟いた。
「はい、私が一番、好きな歌。バッカスの歌……。ロレンツィオ・デ・メディチ様が若いときに作った歌です」
……そうか……、ロレンツィオの歌……
フィレンツェでは、二十一世紀でも子供たちですら、暗唱している詩だったのをレミーは思いだした。
「似たような歌を知っている」
同乗していた真吾が、ぼそりと言った。
「命、短かし……恋せよ、乙女……。紅きくちびる……あせぬ間に……。あつき血潮の……冷えぬ間に……。明日の月日は……ないものを……。日本の歌だ……。死んだ親父が、よく風呂の中で歌っていた……」
レミーが知るはずがなかった。
「ゴンドラの歌」……。二十世紀に日本人が、ロレンツィオの詩を意訳して作った歌なのを、もちろん真吾も知らない。
メロディも言葉も歌われた時代も国も違うが、意味はだれにも共通だった。
だが、レミーの知らないルネッサンス期のメロディで、まさに青春のただ中にいるようなイ

ザベルに歌われるこの歌は、ことさらせつなくはかなく聞こえた。
イザベルは、さびしそうに微笑した。
「この歌だけで、私、メディチ家とフィレンツェに憧れていました。でも、ここに来て、少しだけしょげています」
「あの、おばさまが、気になるのね？」
「いえ……、変なおばさんはどこにでもいます。それより、サヴォナローラとかいうお坊さん。そして、扇動(せんどう)されて舞い上がった街の人たち……。季節は確かに春ですけれど、フィレンツェの春はもう過ぎてしまったのかも……」
「えっ？」
レミーは知っていた。
フィレンツェにサヴォナローラが現れたころ……、それは、確かにフィレンツェのルネッサンス芸術が黄昏(たそがれ)といわれた時期だった。
芸術を、贅沢に目が眩んだ者の堕落の象徴として攻撃するサヴォナローラの登場後、芸術の都としてのフィレンツェは、衰退(すいたい)を辿(たど)る。
この娘は、フィレンツェに来て、一日もたたないうちにそれを感じるのだろうか？
レミーは、イザベルを見詰めて言った。
「でも、あなたの春は今でしょう？　歌詞にもあるわ……若き者、楽しむがよい、って……」
「ですよね……。今という時を逃さずに……。そうですよね……、花、咲いていますもの

ね……、はい」

イザベルは頼りなげに頷いて、窓の外を見た。

そして、また、口ずさんだ。

「確かな明日はありはしないのだから……」

レミーはそんなイザベルの横顔に思った。

……私にも、確かな明日はなかった。でも、生きている。だから、あなたもね……

レミーは、この娘を、とことん守ってやることに決めた。

＊

「おまえが、ヴェネチアから来たイザベルか……」

カレッジの別荘に着いたイザベルは、レミーたちとともに、取るものもとりあえず屋敷（やしき）の一室に通された。

見ず知らずのレミーたちが、ついていくのに、だれも咎（とが）めごとは言わなかった。

それほど、ロレンツィオはイザベルに会うのを急いでいるらしかった。

四十代とは見えぬほど老け込んだ男が、ゆっくりと寝台から身を持ち上げた。

ロレンツィオ・デ・メディチ……。かさかさの肌、やせこけた身体（からだ）は昔日のフィレンツェの豪華王と呼ばれた面影はまるでない。

ただ、まなざしだけは、二十の青年のように熱く燃えていた。

「生きていてくれてよかった。会いたかったぞ……」
ロレンツィオは、弱々しくイザベルの手を握りしめた。
イザベルは、かねてから尊敬していたロレンツィオのやつれ方を目の前にして、何を言っていいかわからなかった。
「型どおりの挨拶（あいさつ）はいい。わしに時間はもう残されていない。イザベル、おまえの資料はかねがね読んで期待しておった。さあ、わしの質問に答えてくれ」
「質問？」
いきなりきりだされたロレンツィオの言葉に、イザベルはとまどったようだった。
「そう、聞きたいことはひとつ……。メディチが築いたこの街の文化を、どうやって世界に広め……、そして、かつてのギリシャ、ローマがそうであったように、フィレンツェが世界の文化の中心として君臨するにはどうすればいいか……」
「そんな大それたことを私に話せとおっしゃるんですか？」
「それを考えたこともないとは言わせぬぞ……、私が、世界中に送りだした百余名の娘たちの中で、おまえが送られてきた資料どおり、頭脳、学力、ともにもっとも優秀な娘なら、自分とメディチ家の今後を考えぬはずがない」
イザベルは、意を決したようにこくりと頷いた。
「はい、私が、メディチ家の血筋であると聞かされたとき……、なぜ、女の私が、身元を秘してヴェネチアで育てられねばならないのか……、考えたことは確かです」

「それで……？」

「今、スペイン、フランス、イギリス……、欧州の国王支配の国々は、こぞって勢力を拡大しています。そして、東には巨大なイスラム世界が、欧州を支配しようと狙っています。その間に位置するイタリアにあるのはジェノバ、ミラノ、ヴェネチア、ナポリ、そしてこのフィレンツェ……、商業で富を手に入れた裕福ですが小さな国です。軍隊はいるけれど、ほとんどが、お金で雇った傭兵です。国王支配の軍隊が、本気で攻めてくれば、国を守る気のないお金で雇っただけの軍隊はたちまちばらばらになって逃げてしまうでしょう」

「そんな状態で、フィレンツェを守るにはどうすればいいのかな？」

「まず、だれもが考えるのはイタリアを統一すること」

「無理だな……。それは確か、フィレンツェの小役人のマキャベリという男が盛んに唱えている。だが理想論にすぎんな」

ロレンツィオの言葉に、イザベルは頷いた。

「はい……。イタリアの国はジェノバ、ミラノ、マントヴァ、ヴェネチア、ナポリ、ローマ、どの国をとっても、利害がぶつかり今のままで統一などとても不可能です。残る手段があるとすればそれはひとつ……、フィレンツェはどんなことがあっても戦争をしない……。それしかありません。フィレンツェの街だけでなく、メディチ家が目ばえさせた芸術や文化を守るためには、絶対、戦争を避けなければなりません。勝つにしろ敗けるにしろ、戦争をすれば、人々は貧困にあえぎ、心はすさみ、文化や芸術は育つどころか破壊されるでしょう」

レミーたちは、すらすらと答えるイザベルに呆気にとられた。
この時代の十代の娘が、これほど国外の情勢に詳しいのが異様にすら思えた。
しかし、話の内容に気乗りしないのか、イザベルはまるで、教科書を棒読みするように話していた。
「そこで、ロレンツィオ様は、このフィレンツェを守るために、新しいタイプの女性を作りだそうとされた……。いえ、新しくはないのかもしれません。古くはギリシャやオリエントに先例があったと伝え聞きます。それは、伝説の女王たちの国家……、子供を生むためだけではない、国を操った女性たちの国です……。いままで、国と国との間で、女性は、政略結婚の道具でしかありませんでした。嫁いだ先との和平の保証です。でも、その女性に、政治の知識と、国を動かす能力があれば、嫁いだ先の国を裏から操り、生まれてきた後継ぎに後世を託し、子々孫々まで血筋を延ばすことができます。もしメディチ家がそんな女性たちを、世界中の強国に送り込めれば、その国を、メディチ家の支配下に置くことができます」
ロレンツィオは、微笑を浮かべて黙ってイザベルの話を聞いている。
「そして、たぶんロレンツィオ様の目指す世界とは、欧州だけではないのでしょう。イスラムの国……、アフリカ……、中国……、さらにその先、マルコ・ポーロの記したジパング……、そんな知識と異国の言葉を学ぶならヴェネチアは最適です」
ロレンツィオは満足気に頷いた。
「わしは、いまさら、国としてのフィレンツェに世界支配は望まん。だが、メディチ家が育て

た芸術と文化は世界中に花開いてほしい。イザベル、この街の文化は、世界の中心になれると思うかな」
イザベルは、ふっと俯いた。
「それは……」
ロレンツィオが聞き返す。
「それは？」
「無理です……、今のままでは……」
ロレンツィオは、大きく溜め息を洩らした。
「なぜかね？」
イザベルは言いにくそうだった。しかし、やがて、意を決したように話し始めた。
「欧州では、確かにフィレンツェが今、文化の一番栄えている国かもしれません。でも、イスラムや中国では、もっと優れた別の文化が栄えています。むしろ欧州の文化程度は、遅れているといっていいかもしれません」
「われわれが遅れている？」
「科学も医学も、明らかに遅れています。フィレンツェで発明されたという自慢の花火も、中国ではとうの昔に使われています……。たぶん、私たちは、もっともっと、あちらの国から学ばなければならないことがいっぱいあると思います。文化を広めるなんて、正直いって、おこがましいことかもしれません」

「そこまでわかっているならば、あちらの世界の文化を、フィレンツェのものにすればよい。世界中の文化を集合させ、フィレンツェを世界のアカデメイアにすればよいのだ」
「アカデメイア……。昔、ギリシャのプラトンがアテネに作った学校を模して、メディチ家が作った学園のことですね？」
イザベルのいうように、近世最初のアカデミー「プラトン・学園(アカデミー)」が、メディチ家によってフィレンツェに創設されていた。
「あれは小さな試みにすぎない。わしの目指すアカデメイアは、全世界の芸術、科学、文化を支配する美と知の黄金郷だ。それを可能にするのは、世界の国々とフィレンツェのメディチ家を、血筋で繋(つな)ぐことのできるおまえたち、メディチ家の女たちだ……」
イザベルは、ふっと溜め息をつき、ロレンツィオを見詰めた。
「あまりに大きすぎる……。夢のようなお話です」
「人生は短い……」
ロレンツィオは、ゆっくりと寝台に身を横たえて天井を見上げた。
「わしはもう長くない。だが、墓の中にいても夢は永遠に見続けていたい。残念ながら、わしの後を継ぐピエロ・デ・メディチは、贅沢な生活になれきったうえに、好戦的でありながら、臆病(おくびょう)で決断力に欠ける。芸術や文化などを理解できる輩ではない。他国が攻めてくれば軽率に戦いを挑み、祖父、コジモ・デ・メディチとわしが育てようとしたフィレンツェの文化を荒廃に導くだろう。ピエロは、メディチ家の当主たる器ではないのだ。たよりになるのは、蔭(かげ)でメ

ディチ家を支える女たちしかいない。わしは、この一カ月、メディチ家の血筋を引く百人以上の娘を集め会ってみた。だが、おまえほど、聡明で先を見通せる娘はいないようだ。イザベル、わしが、もっとも信頼する女とともに、メディチ家のこれからを頼むぞ……」
「信頼する女性？」
イザベルは、聞き返した。
「メディチ家の中で、芸術、科学、文化にもっとも造詣の深い女だ。おまえのよき相談相手になってくれるだろう」
寝室の扉が開いた。
「イザベル様とのお話は、終わりましたこと？」
そこに、カミーユが立っていた。
さっきのカミーユとは見違えるほど、薄い化粧で、楚々とした衣装だった。
ロレンツィオは、微笑を浮かべた。カミーユを信頼しきっているのが見てとれた。
「カミーユ、イザベルは、調査どおりの娘だった。イザベルと、フィレンツェに集まった百余人の娘たちを頼んだぞ」
「おおせのとおりに……」
カミーユは、寝台のロレンツィオの前に跪き、その手にくちづけした。
その場だけを見れば、清楚で柔順な女性だった。
ロレンツィオは、満足そうに頷くと、力尽きたように目を閉じた。

ロレンツィオの顔が、蒼ざめていく。
イザベルは、すがるようにカットナルを見た。
カットナルが、医学に明るいのに気がついていたからだ。
もとよりカットナルは、寝室に入ってきたときから、ロレンツィオの様子を窺っていた。
本来のカットナルなら頼まれなくてもしゃしゃり出て、医学知識を披露したかもしれない。
だが、今のカットナルはイザベルに首を振るしかなかった。
ミケランジェロほどとはいえないにしろ、カットナルには、ロレンツィオの容体が身体に触れなくても見てとれた。
シーツでも隠せない異様に膨れた腹部……。腹水が、溜まりに溜まっているのだ。癌の末期症状……、たとえ、二十一世紀の最新医学設備があったとしても、ここまで悪化しては手のほどこしようがなかった。
想像を絶する痛みがあるはずなのに、碌な麻酔もないこの時代……、顔色も変えずイザベルと話していたロレンツィオの精神力にカットナルは感嘆し、黙っているよりなかったのだ。
カミーユは、ロレンツィオのシーツを整えると、イザベルに振り向いた。
「ロレンツィオ様はお疲れです。後は私におまかせください。イザベル様のこれからは、このカミーユが、しかとうけたまっておりますから」
カミーユは微笑した。だが、その目は、笑ってはいなかった。
イザベルもいつもの微笑を忘れて呟いた。

「こんなことになるなんて……」
……メディチ家の末端にすぎないと思っていた自分が、いつのまにか、重要人物にさせられている……
「私、フィレンツェに来たのはこんなつもりじゃなかったのに……。私、どうすればいいんですか？」
レミーもブンドルも、他のだれも答えられるはずがなかった。

＊

イザベルとレミーたちは、カミーユの指示で、フィレンツェの郊外、カステロにあるメディチ家の別荘に宿泊することになった。
そして、その別荘の一室で、レミーは呆然として一枚の絵の前に立ち竦んだ。
それは、レミーがフィレンツェを訪れると必ず通っていたウフィツイ美術館にあった絵だった。
フィレンツェのルネッサンス時代を代表する絵画のひとつのはずだった。
それが、この時代、メディチの別荘にあったのはレミーも知っていた。
だが、しかし……、
「これが、ビーナスの誕生？……」
確かにそれは、フィレンツェを代表する画家、ボッティチェリの描いた有名な作品に似てい

た。
風の神と時のニンフの祝福を受け、貝殻の上に佇む裸のビーナス……。だが、その腹部が、ふっくらと膨らんでいたのだ。
……子供を身ごもったビーナス……？　そんな馬鹿な……
しかも、この絵の中で、レミーが大好きだった、もの憂げなビーナスの表情が、今、まるで、なんの感情もないように無表情だった。
だが、これを、けっして偽物とはいえない。
古美術の鑑定をした経験もあるレミーだ。
絵を見れば、それが、ボッティチェリの書いたものであるのは、筆のタッチでわかる。
この時代の、女性の美は妊娠した姿にある……。イザベルの言った言葉が頭をかすめた。
……それにしてもどうしてこんなことが……。私の知っている「ビーナスの誕生」はどうなってしまったのか？……
「どうやら、ここは、私たちの知っているルネッサンスとは少し違うようだ……」
「えっ？」
ブンドルが、絵から目を離さずに言った。
「私は、この時代のメディチ家のことなら少しは調べて知っている。ロレンツィオの話だと、イザベルとカミーユは、今後のメディチ家にとって相当重要な女性になるはずだ」
「確かにね……」

レミーは頷いた。
「二人がメディチ家の末端ならともかく、私には、二人の名前の記憶がない」
「……どういうこと？」
「もしここが、本当にルネッサンスのフィレンツェなら、この時代の現実を、何かが作用して私たちの知る歴史に変えたことになる」
「それは、私たち？」
「おそらく……、それしかあるまい」
「だとしたら……」
レミーは導きだされる結論にぞっとした。
……イザベルをあのまま助けなければ、イザベルはあの場で殺されて歴史に残りはしなかっただろう。しかし、助けた今……、ブンドルの知るメディチ家の歴史の中にイザベルが出てこないとすれば、消すのはだれか？……
もしかしたら、いったん助けたイザベルを歴史から抹殺するのは、自分たちではないのか？
……そして、あの女、カミーユはどこに消えるのか？
レミーとブンドルは黙って、ボッティチェリの描いたと思われるビーナスを見詰めた。
身ごもったビーナスは何も答えず、まるで無表情だった。

＊

数日後……。
莫大な富の力でルネッサンスと呼ばれる文化を庇護し、フィレンツェの豪華王と呼ばれたロレンツィオ・デ・メディチは、四十三年の生涯を終えた。
後継者のピエロに、メディチの当主としての裁量がないのは、だれの目にも明らかだった。
フィレンツェとメディチ家に混乱は必至だった。
葬儀の日も、サヴォナローラのメディチ家非難の叫びが街に聞こえていた。
一四九二年、十五世紀末……。
欧州の人々は、再三猛威を奮う不治の病、黒死病の恐怖に脅え、人々の精神的支えだった教会は腐敗し権力争いが絶えず、イタリアの都市国家群は、相変わらず互いの利害を争い、隣国フランスはシャルル八世の下、イタリア制覇を企てていた。
一方、東方からは、コンスタンチノープルを陥落させたイスラム教の国トルコ帝国が迫っている。
人間復興と呼ばれた自由なルネッサンスの空気を享受できたものは、実はほんのわずかの人々だった。
病床のロレンツィオが夢みた芸術と文化の黄金郷は、フィレンツェの春の花のようにはかないものかもしれなかった。

第三楽章

孔雀の黄昏

歴史への挑発

ロレンツィオ・デ・メディチの葬儀の鐘が、憂鬱な音で、フィレンツェの空に響いた。
鐘の音を聞いて、人々の多くが、得体の知れない不安を感じていた。
これから先、フィレンツェはどうなるのか？
ロレンツィオの死に、フィレンツェは大きく動揺した。
……今までの暮らしがいつまでも続くはずがない……。いつか何かよくないことが起こるに違いない……
……人々は、あまりに豊かで平穏な暮らしが続くと、その生活がうしろめたいのか、不安の種を捜したくなるものらしい。
フィレンツェの豊かな暮らしは、メディチ家によって支えられていた。
それも、ロレンツィオ・デ・メディチに商才があり他国との駆け引きが上手で、メディチの銀行を通じて莫大な富をフィレンツェに集めることができたからだ。
だが、後継者のピエロにその実力をあてにできない。
先代が偉大であればあるほど、次代に対する評価はきびしくなる。
フィレンツェの人々のピエロに対する評価は、ロレンツィオと比較される分、悪くなる一方だった。事実、ロレンツィオの訃報を聞いたとたん、メディチの銀行との取り引きを見あわす国も出てきた。
メディチ家が転べば、フィレンツェも転ぶ。富がなくなれば、もともとは、小国のフィレンツェだ。

イタリア制覇を狙うフランスや、東方のイスラム教の大国トルコの前では、ひとたまりもないだろう。
いや、商売のライバルであるヴェネチアやミラノにすら敗けるかもしれない。
フィレンツェの人々の心に、不安が膨れ上がっていた。
そこに修道僧サヴォナローラが油を注いだ。
サヴォナローラのメディチ家非難は激しさを増した。
「メディチ家に天罰が下ったのだ！　フィレンツェの民よ目醒めよ！　今こそ、贅沢な生活に奢ったその身を悔い改め、神の教えに従い身を清めるのだ……。さもなくば、フィレンツェに大きな災難が降り注ぐであろう」
サヴォナローラの脅しとも思える言葉に、人々は震えあがった。
……そうだ、メディチ家のせいで贅沢に目が眩み、はしゃぎ過ぎたのがいけなかったのだ……
……これというのも、贅沢をそそのかしたメディチ家が悪いのだ……
世の中が不安になると民衆は、自分のことは棚に上げて、責任を何かになすりつけたがるものだ。
フィレンツェの市民にとって、つい昨日まで、祖国の父、豪華王、街の象徴……、美辞麗句を並べて讃えていたメディチ家がその矢面になっていた。
さらに、フランスがイタリアに進撃を始めたという報が、不安に拍車をかけた。

サヴォナローラの下に、不安からの救いを求めて集まる民衆は、ますます増えていった。
人々は、口々に叫んだ。
「メディチ家こそ不幸の元凶」
「メディチ家を追い出せ！」
「サヴォナローラに従え！」

*

「ロレンツィオ様が亡くなれば、メディチ家に対し不穏な空気が漂うことはわかっていました。しかし、後継ぎのピエロ様がいらっしゃるのに、メディチ家の今後について、女の私がさしでがましいことは申せません」
ロレンツィオの埋葬が終わったその日の夜、イザベルを訪ねカミーユがカステロの別荘にやってきた。
カミーユは、イザベルとだけ内密に話したいと言った。
だがイザベルは強引にレミーの同席を求めた。
「レミーさんたちがいなければ、今の私はいません。私のすべては、この方たちとともにあります」
カミーユはしぶしぶ了解して話し始めた。
「私はただ、ロレンツィオ様のご遺志を実行するだけでございます」

「ロレンツィオ様のご遺志？」
「お忘れですか？……愛の宣教師とでも申しましょうか……。世界中にメディチ家の血筋を広める企てです」
「まさか……」
イザベルは呆然として聞き返した。
「まさか本気で実行するつもりなんですか？」
カミーユは、意外そうにイザベルを見返した。
「つもり？……つもりとはどういう意味でございます？　イザベル様もロレンツィオ様から聞かれたはずです。すでにロレンツィオ様の呼び寄せた百余名の娘たちは、それぞれの嫁入り先に向け旅だっております」
「信じられない……」
イザベルは同意を求めるように、同席したレミーを見た。
レミーは、肩を竦めるしかない。
カミーユは、かすかに薄笑いを浮かべて答えた。
「何をおっしゃいます。とうの昔に手筈は整い、どこの国も、メディチ家の嫁が来る日を待ち望んでいることでしょう」
「待ち望んでいる？……それはどんな国なんです？」
イザベルが畳みかけるように聞いた。

「イザベル様は、ご自分の嫁がれる国さえご存じあればよろしいのでは……?」
イザベルは即座に言い返した。
「ロレンツィオ様はおっしゃいました。あなたとともに私にも、メディチ家の今後を頼むと……」
カミーユの顔から微笑が消えた。
「確かに……」
カミーユは、懐から数枚の羊皮紙を出した。
「ただし、これは、くれぐれも、ご内密に……。他ならぬ、大富豪の血を引く娘たちです。この名簿が外に洩れれば、旅の途中どんな災難が起こるやもしれませんから……」
イザベルは、受けとった名簿を見たとたん、顔色を変えた。
「こんな……、無茶です!……そうでしょう? レミーさん……」
イザベルは、かすかに震える手で名簿をレミーに渡した。
「……! これがお嫁入り先?」
レミーは、名簿を一目見るなりイザベルの震える気持ちがわかった。
娘たちのほとんどが、キリスト教の欧州にとって異教の国を指定されていたのだ。ある者は北辺の地……ある者はアフリカの国々……そしてまたある者はイスラムの国々……さらにインド周辺の国々……シルク・ロードを越えて中国へいく者さえいた。
旅の距離の問題だけではない。この時代、異教徒同士の結婚が、簡単にできるとは思えない。

まして、相手が、王室ならなおさらだった。
それに……、これはイザベルにはいえないことだが、二十一世紀生まれのレミーの知る世界史に、アジアの王室にメディチ家の血を引く妃がいたという記憶はなかった。
そればかりか、フィレンツェを旅だった娘の誰一人として、その後の消息を歴史に記した者はいない。いや、百余名もいたというのに、指定された国々に辿り着いたかどうかすら、定かではなかった。
イザベルは、カミーユに懇願するように言った。
「すぐにみんなを呼び戻すべきです」
「なにをおっしゃいます。これは、ロレンツィオ様が望んでおられたことです」
「あれは……おそらく……夢です。きっと、ロレンツィオ様はご病気の苦しみの中で見果てぬ夢をごらんになったのです」
カミーユは、イザベルを見据えて言った。
「夢かもしれません。けれど、これはあなたが生まれる前にロレンツィオ様が仕組んだ夢なのです。けして、病いから出た戯言ではありません。でなければ、幼いあなたをヴェネチアなどに送り込みはしない。確かに異教徒の国と手を結ぶなど許されることではないかもしれません。ローマ法王に知れたらメディチ家の破門は間違いないでしょう。ですが、ロレンツィオ様は、あえてそれを試みようとされた。それが、たとえ夢であっても……。もちろん、これは後継者のピエロ様も知らぬことです。それを知れば、臆病なピエロ様のことです。教会の怒りを恐れ、

証拠を残すまいと娘たちまで抹殺するかもしれません」

イザベルは詰まった。

カミーユは酔ったように話し続けた。

「この街で育った美しい芸術を守り、育てるには、強力な力が必要です。ロレンツィオ様にはそれがあった。でも、ピエロ様には、ロレンツィオ様の器はない。芸術の価値などわかりはしない。知っているのは、贅沢三昧の味だけです。そして、あれほどメディチ家の恩恵を被ったフィレンツェの市民は、ごらんなさい。その恩も忘れ、今や、修道僧のサヴォナローラなどという田舎者の口車に乗せられている。どうせ、サヴォナローラなど、メディチ家の富を羨み、わがものにしようとするローマ法王の操り人形にすぎないのに……。こんなフィレンツェでは、遅かれ早かれ、せっかく生まれた芸術の芽は、刈り取られてしまうでしょう。それを防ぐためには、私は、異教徒でも悪魔とでも手を結びましょう。私は、このロレンツィオ様の育てたこの街の芸術を守って見せます。それが、ロレンツィオ様のご遺志でもあります」

イザベルとレミーは呆気にとられてカミーユを見詰めた。

カミーユは、ひやりと笑ってイザベルを見た。

「こんなことを軽はずみに言う私に、驚いているのでしょう?……イザベル様、あなたが相手だから言えるのです。あなたは、この街に来てロレンツィオ様に会って、お言葉を聞いたときから、この計画の中心人物の一人です。あなたは、この計画をだれにも話せません。なにしろ異教徒と婚儀を結んでまで果たそうとする計画です。教会がそれを知れば、あなたが、どう弁

解しようと魔女扱いで火焙りでしょう。もはや引き返せません。ロレンツィオ様のご遺志を実行するのです。そうせねば、私と百人余人の娘たちもろともあなた自身の身が破滅するだけです……。いいえ、なにも知らぬメディチ家の他の者さえ、その身が、安全とはいえぬでしょう。このこと、ご理解いただけますね？」

カミーユは薄気味悪いほどやさしく、諭すようにイザベルに言った。

イザベルは、ふっと息をついた。

「おっしゃることはわかりましたわ……。それで、ロレンツィオ様は私をどこへお嫁にやるつもりだったのです？」

「あなたほどの娘です。相手は大物です」

「大物？」

カミーユはひやりと笑った。

「異教徒の国ではありませんわ……。でも、ローマの教会とは、決して仲がいいとも言えません。しかも、イタリアを狙うフランスとは犬猿の間柄……。それにメディチ家の財力を持ってすれば、先方が満足する十分な持参金を用意できますわ」

イザベルはもうそれがどこの国かわかっていた。もちろん、レミーにも……。

それは、イギリス……。ロレンツィオの思いどおりにことが運べば、フィレンツェとイギリスでフランスを挟み込むことができる。

だが、この時代、チェダー朝のイギリスにイザベルの名などかけらほども出てはこない。

ということは……、イザベルは、どこに消えてしまうのか？

……もしかしたら殺される？……

レミーは、そんなイザベルの暗い未来の予想を、頭から振り払おうとした。

カミーユは、そんなレミーの思いを知るはずもなく、皮肉っぽくイザベルを見詰めた。

「もっともイギリスはお家騒動の盛んなお国とか……。あなたは、見事、イギリス国王の心を摑んであの国を操ることができるかしら？」

「もう、決められてしまったのですね？」

イザベルがカミーユに聞いた。

「裏交渉はしました……。でも、相手は遠い異教徒の国ではなく他ならぬイギリスです。秘密裡に慎重にことを進めねばなりません。……そのためにも、今日は、あなたのはっきりした気持ちを聞きたいのです」

「断れないと言ったのはあなたでしょう？」

イザベルは、泣きそうな顔をこらえて言った。

「死ぬ気でおいででしたらお断りになれましてよ」

カミーユはイザベルの表情を窺った。

「……」

イザベルは唇を嚙みしめた。感情を懸命に堪えているようだった。

「どうなのです？　王妃を目指すか、身の破滅か、簡単な選択ですわ」

「…………」
イザベルの頬に、涙が一滴伝わった。
たまらずレミーがカミーユに言った。
「まだ死ぬ歳じゃないわ。この娘はあなたよりずっと若いもの」
カミーユはレミーを睨み返した。
「ロレンツィオ様のご遺志に従うのですね？」
「この娘を殺させはしないと言ったの」
「お黙り！」
いきなり、カミーユはレミーの頬を叩いた。
「あなた、イザベル様の責任が取れる立場なのですか？　傭兵の癖に……」
レミーはふっと笑って、こめかみをぽりぽりと人差し指で掻いた。
それはめったに人には見せないが、レミーがひどくむかついたときの仕草だった。
ぱし～ん！
イザベルが思わず竦むほど派手な音がした。
レミーの平手がカミーユの頬をしたたかに弾いたのだ。
カミーユは、頬を押さえるのも忘れて、ぽかんとレミーを見詰めた。
レミーはにっこり笑った。
「よろしいこと？　少なくとも、私を雇ったのはあなたじゃない……。あなたが私を叩ける立

場じゃないわ」
　二人は、睨み合った。
　イザベルがぽつんと言った。
「私、死ぬのも……」
「え？」
　レミーとカミーユは、イザベルを見た。
「女の人が痛い目見るのも、好きじゃないです」
　イザベルはけなげに、微笑を作ってみせた。
　カミーユは頷いた。
「今のを、よいお答えとして受け取りますわ……」
　カミーユは、会釈をして出ていった。
　扉が閉まったとたん、イザベルはレミーに言った。
「ごめんなさい」
「え？」
「私、泣きます」
　耐えに耐えていたものが吹き出したように、イザベルはレミーの胸に飛び込んだ。
　そして、声をあげて泣きじゃくった。
　レミーはイザベルを抱きしめた。そして、胸の中で何度も呟いた。

……死なせない……。絶対、この娘を死なせない……。けれど……、それは可能なのか？……

今、イザベルはイザベル王妃という、歴史の表舞台に登場するかもしれない状況にいる。

だが、レミーの知る現実の歴史には、存在しない……。

ということは……。

レミーたちがどんなことをしても、歴史から消える運命の娘なのだろうか。

歴史に残る前に消える。

とすれば、イザベルが、イギリスに行く前だろう。

イギリス王室に嫁入りすれば、歴史に残らぬはずがないからだ。

若いイザベルが歴史から消えるとしたら、突然の死がその理由だと考えざるをえない。

一方、イザベルが歴史に残り十五世紀のイギリス史が変われば、二十一世紀の世界情勢も変わって、当然、二十一世紀の歴史に残っているレミーたちの行動にも影響が出る。

今のままのレミーたちでいられるはずがない。

それが、こうやって生きているのは、やはり、イザベルが消えたと考えるよりないのか……。

これでは、不治の病を宣告された患者を、本人に黙って見詰める医者のようなものだ。

しかも、一度は助けた命なのだ。

レミーは、やるせない無力感を感じていた。

＊

カミーユがイザベルとの話を終えて出てきた広間の前には、中のなりゆきを気にしながらも、ブンドルたち、五人のメンバーが手持ちぶさたで立っていた。
そして、まっすぐにブンドルに近づいていった。
カミーユは、そんな五人にちらりと目をやると、かすかに微笑した。
まったく、他の四人を無視していた。
カミーユは、しっとりと濡れた瞳でブンドルを見詰めた。
「またお会いしましたね」
ブンドルは軽く会釈し、言った。
「今度はどんな悪戯をするつもりかな？」
「今夜はもう遅いですわ……。それにここではお仲間が、ほら、恐そうな目で見ておいでです」
カミーユは、ブンドルの耳元で囁いた。
「よろしかったら明日、私の屋敷で……、一人分だけ、門の隙間は開いております」
「墓石はいくつ用意してあるのかね？」
「同じ眠るにしても、枕ならありますわ……、二人分……」
カミーユは、それだけ言って優雅に着物の裾を翻して出ていった。

＊

そのころ……。
メディチ家のピッティ宮殿の当主の間で、ロレンツィオの後を継いだピエロは、酒にまみれ喚いていた。
「こんな馬鹿なことがあっていいのか！」
今まで、ピエロはメディチ家の資産状態など気にかけたこともなかった。
豪奢な生活の日常で、金銭など、湯水のように湧いてくると思っていた。
だが、ロレンツィオから引き継いだ資産台帳を開いたピエロは目を疑った。
メディチ家の誇る銀行経営は赤字……。世界中に借しつけた融資金は、ほとんど焦げつき、返済要求はできそうになかった。
そして、なんのために使われたのか、メディチ家の創設したアカデミーへの寄附金は、実にフィレンツェ市庁の年間予算を軽く越えていた。
おまけに、メディチ家の家の金庫にうなるほど蓄えられているはずの金銀宝石は、いつのまにかピエロにとって愚にもつかぬ美術品を買うために使われていた。
ピエロは資産台帳を引き裂いた。
「彫刻や絵を飲み食いできるか！　すぐ外国に売り払え！」
だが、戦争と貧困と黒死病の蔓延するこの時代、価値のあるのは金銀宝石であり、それこそ

飲み食いできぬ芸術品など買い取るものはいそうになかった。
しかも、念のために美術品のありかを確認すると、いつのまにか異国への贈答品(ぞうとうひん)としてフィレンツェの外に運びだされている。
「ロレンツィオ！」
ピエロは、父の名を呼び捨てにして呪(のろ)った。
「あんたは、自分の名声だけ高めて、おれになにも残してくれぬのか……」
フィレンツェの中央、シニョリーナ広場で群衆を扇動(せんどう)するサヴォナローラの声が、ピエロの酔った頭に耳鳴りのように響いた。
「フィレンツェの市民よ、身を清めよ！　さもなくばメディチ家の一派とともに、神は怒りの鉄槌(てっつい)を下されるであろう」
ピエロは、サヴォナローラの言葉が、現実そのままのような気がした。
だが、豪奢な生活を改める気もなかった。
……まだ、おれの代ぐらい、メディチ家の資産は耐えられる。ロレンツィオも歌ったではないか……、人生は長くない。春を楽しめ……。おれは、フィレンツェの春の散っていく花弁の最後の一片まで楽しんでやる……
ピエロは、部屋に飾られたロレンツィオの肖像画(しょうぞうが)に乾杯し、その場に酔い潰(つぶ)れた。

＊

翌朝。

レミーたち、六人のだれもが身の置き場のないような奇妙な気分で、朝食の用意された広間に集まった。

イザベルは、死を約束されているのかもしれない……。レミーから、イザベルのおかれた状況を聞いた一同には、レミーが昨夜感じたと同じ無力感のようなものが漂っていた。

「さあ、朝だ！　この時代にいないはずのおれたちだからって、飯まで食うなって法はない」

キリーが、伸びをしながら、ことさら陽気に言った。

豪奢をきわめたといわれるメディチ家も、その朝食は意外と質素だった。

焼きたてのパンにライムを浮かべた水とミルクとワインが、テーブルの上に置かれてあるだけだ。

「イタリアの朝は濃いエスプレッソといきたいもんだが……、あるわけないよな、この時代じゃコーヒーが……。ま、朝酒もよしか……。本場のキャンティ・ワイン……」

キリーは、ぺろりと舌を嘗め、ワインをグラスに注いだ。

カットナルが、そのグラスをさっと取りあげた。

「一分間、待つのだぞ……」

重い気分を吹き飛ばすように、カットナルは奇術師のような大袈裟な身ぶりで、懐から小瓶を出すと、中の粉末を調味料でもふりかけるようにしてグラスに入れた。

「なんの真似だ？」

……おまけにカミーユって女、美しい薔薇には棘……、顔からして毒殺しますって雰囲気じゃろ？

「万能の解毒剤じゃ……。おまえな、中世の欧州といえば、暗殺と毒殺が花盛りじゃや。……おまけにカミーユって女、美しい薔薇には棘……、顔からして毒殺しますって雰囲気じゃろ？用心にこしたことはない」
「そりゃまあそうだが……。いちいちそれを気にしていると餓死しちまうぜ」
だが、毒殺はともかく、カミーユを警戒したほうがいいというのは、六人の共通した思いだった。
少なくとも、イザベルの今後に気をもむよりは、割りきれる気分の心配だ。
赤く透き通ったワインに異常は見られなかった。
「どうやら無事のようだ」
カットナルは頷いた。
「オーケー……。いただきます」
キリーは、グラスを一口、口に含んだ。
「ん？……なんだこりゃ！」
ぷっと、ワインを吹き出した。
……毒薬？……
一同は思わず立ち上がった。キリーは、あわてて手を振った。
「いや……驚かしてすまん……。だけど、こりゃなんだ……、腐ったグレープジュースかよ」
カットナルは平然と答えた。

「あん？　そりゃそうかもしれん。アルコールは有害物質じゃ。解毒剤で消える。ワインからアルコールを取ったらただの葡萄水じゃ」
「おれにゃ、アルコールは有害じゃないんだけどなあ」
ブンドルがふっと笑って、グラスにワインを注いだ。
「有害であろうと無害であろうと、フィレンツェのキャンティ・ワイン……。それもメディチ家貯蔵のものを味わえぬは、あまりに惜しい」
ブンドルは、ワインの香りを嗅ぎ、口にふくみ舌で転がすと、満足そうに頷きす～っと飲みほした。
一同は、呆気にとられてブンドルを見た。
「さすが、最良のキャンティは、ブルゴーニュに勝る……」
「ほんと……」
いつのまにかワインに口をつけていたレミーが、うっとりとして言った。
ブンドルが飲み干したのを見て、毒が入っていないと信じたのだ。
キリーが、ワインを明かりに透かしながら言った。
「おい、おい、大丈夫なのかよ。お二人さんまさか、ミケランジェロちゃんに、墓石の彫刻を予約したわけじゃあるまいな」
ブンドルは、二杯目を口にしながら言った。
「カミーユは、少なくとも、ワインに毒を盛る女ではあるまい」

「なんで……？」
「あの女の美意識が許すまい……。美酒を毒で汚すぐらいなら、他の方法を選ぶはずだ」
「あの人の美意識なんか、認めてるんだ……。お好みのタイプ？」
レミーは、ちょっと茶化して言った。
「……あの女の美意識に興味がないとはいえぬ。それに……」
「それに？」
「あの女は、私に興味を持ったらしい。そんな相手を殺すかね？」
「あ、そ……。そこまで言う……。毒は盛られなくても毒気にあてられないように……」
レミーは、むっとして言い返した。
「酒はともかく……」
いきなり、真吾が口を開いた。
「このミルクは、確かに旨い。さすが、無公害の味だ」
本人が意識しているかどうかしらないが、真吾は気の抜けたことを言って、その場の雰囲気を白けさせるのを得意わざにしていた。
レミーたちは、いつものように白けてはみたものの、すっきり白けきれた感じではなかった。
やはり、イザベルが気になるのだ。
そのときだった。
「ひどい顔ですよね、私……。おはようの朝なのに……」

当のイザベルが、明るい声で入ってきた。
イザベルが自分で言うように目がはれぼったい。昨日は、夜中、泣き続けたのかもしれない。
「モーニング・コーヒーならぬモーニング・ワインで元気をつけましょう」
レミーがことさら明るく言ってワインを、イザベルのグラスに注いだ。
キャンティ・ワインのグラスを見詰めながら、イザベルが呟いた。
「今日、一人で街を歩きたいのです」
「一人で？……」
レミーはイザベルを見詰めた。
「ロレンツィオ様のご遺志に従わなければならないにしても、私の一生が決まることです。ロレンツィオ様の守ろうとしているこの街の文化がどれほどのものか、この目で確かめたいんです……、はい」
イザベルは自分自身に言いきかせるように頷いた。
……一人歩きは危険だ……とレミーたちが言っても聞きそうな顔ではなかった。

＊

「イザベルの好きなようにさせてやろう」
イザベルが部屋に戻った後、ブンドルは残った一同を見回して言った。
「たとえ、イザベルの定められた運命が変えられぬとしても、このままイザベルが動かず、み

なも、ただイザベルにくっついて守っているだけではらちがあかぬ」
確かにブンドルの言うとおりだった。
イザベルを取り巻く事情はカミーユを含めて、わからないことが多すぎた。
「イザベルが動けば何かが動くかもしれぬ……。それを見定めて、やれるだけのことはやってみよう……」
一同は頷いた。
「やるだけやるか……」
キリーは、懐からジャック・ナイフを出して、パンを切った。
「おれのこの相棒は、この時代で何をやっても不思議はない。だが、こっちはどうするかね……」
キリーは、腰に提げたレーザー銃を、ぽんと叩いた。
「私の恋人もこの時代に弾を出すには早すぎるわ……」
いうまでもなく四十五口径の拳銃のことだ。
「やるだけやるということは、持てる力をすべて使うということではないのかね?」
ブンドルが言った。
「……ここへ来たとき、私は思っていた。歴史に関わるな。二十一世紀のわれわれが変わってしまうから……確かにそうかもしれない。だが、もう関わってしまった。一人の娘の命を救うことでな……。もう、後には返れぬ。われわれは今の時間を進むしかない。……私は思うのだ。

われわれにとっては、二十一世紀はもう今ではない……。ここがわれわれの今なのだ。われわれは今を生きるしかない。二十一世紀は、十五世紀のわれわれにとってもう過去に過ぎぬ。われわれは、あるがままにやるべきだ。それで、責任を負うべきものがいるとすれば……」
カシャン……。
真吾が、レーザー銃の安全装置の調子を見ながらさりげなく言った。
「この時代にわれわれを送り込んだやつが責任を取ればいい……。だれだか知らんがね……」
「決められた歴史を、ぶっとばす気かね？」
カットナルが聞いた。
ケルナグールは、シャドー・ボクシングをしながら答えた。
「アフリカの歴史なんざろくなもんじゃなかった」
「やる気なんじゃね……、みんな……」
か〜っ！
歴史と関わりのないカラスが、景気よく鳴いた。
「わしの大統領もろくなことはなかった。潰れてちっともかまわんよ。うむ」
カットナルは頷いた。
歴史を変えれば自分が生まれてくることすら危うくなることを六人はよく知っている。
だが、十五世紀末の今を生きることにした六人は、それを考えないことに決めた。

フィレンツェを一人で見たいと言うイザベルを、レミーはヴェッキオ橋まで送った。
「フィレンツェのどこを見たいのかは聞かないけれど……、けっして、あなたは安全だとは思えないわ」
レミーはイザベルの肩に手をやり、やさしく言った。
「はい……、きっと、カミーユ様に見張られているでしょうね」
イザベルは、にっこりと答えた。
「わかってるんだ……」
「はい、でも、私、平気です。見張られ慣れてますもの……、ヴェネチアで……」
レミーは聞き返した。
「ヴェネチアで？……気がついていたの？　メディチ家の見張りを……」
「はい……。だって、生まれてからずっと見張られていたんですもの。女の子って感じませんか？　ほら……、だれからか、黙って見られているのって……」
「見守られていたいなって思ったことはあるわ。だれかさんに……」
「はい……私もそう思っていました……。もっと素敵な人だったらよかったんですけど……」
「そうね……。きっとこれからそんな人が現れるわ……、あなたにも……」
イザベルは、こくりと頷いた。

＊

「じゃ、見つけてきます」
「え？」
「これから、一日で……。無理かな？」
イザベルは、首を傾げて微笑した。
二人は夕方、同じ場所で落ち合う約束だ。
「じゃ、がんばります」
「がんばるまえに気をつけて……」
「はい！」
イザベルは、初めて一人で旅をする子供のように手を振って、レミーと別れると橋を渡っていった。
もちろん、レミーたちは黙って一人歩きをさせる気はない。カステロの別荘を出たところから別行動で、真吾とキリーがつかず離れず、ぴったりマークしている。
イザベルが橋の向こうに姿を消すのを見届けると、レミーは物陰に隠れ、通信機のついた腕時計に話しかけた。
「イザベルが橋を渡ったわ」
「確認した」
真吾の声がした。
「で、私たちのおともはいた？」

「ああ、君たちは、別荘を出たときから、しっかり尾行されているよ」
「案の定ね……。で、御一行は何名様？」
「五人いた。橋で別れたところで二手にわかれイザベルには二人……」
「私に三人か……」
レミーはさりげなく街路を行く群衆を窺った。だが、それらしい人物はいない。
「そうとう尾行がお上手のようね。その人たち……」
通信機の向こうの真吾が答える。
「いないよ。きみのお供は……」
「え？」
「おれたちが、始末した。レミーも一人歩きがしたいだろう？」
「始末したって……、まさか」
「朝っぱらから酒を飲んでるお国柄だ。酔っ払ってどこかに頭をぶつけ、気を失ったやつの三人ぐらい倒れていてもかまわんだろう」
「ちょっと乱暴……。だれの手先か、調べないでよかったの？」
「そのうちイザベルを尾行しているやつに聞くさ」
キリーの声が入った。
「何せ、ここは不案内な街だ。イザベルをしっかりマークするには、一人でも多いほうがいい。レミーが、尾行さんを巻いている時間が惜しい」

「サンクス、お気づかい……。で、今、イザベルは？」
「真ん中にでかい塔のある四角い建物の前の広場だ」
「ヴェッキオ宮殿ね……。フィレンツェの市庁舎だわ。広場の名はシニョーラ広場」
「イヤホーン・ガイドがついてるとは心強いぜ」
「フィレンツェの街にお礼して……」
ルネッサンスのフィレンツェの街並みは、昔と変わっていない……、いや、二十一世紀の未来もほとんど変わっていないのが幸いだった。
「服を着替えて、すぐ行くわ……」
レミーの服は、イザベルからの借り物だった。
ルネッサンス時代の上流階級の服は、女のレミーとしては一度は着てみたい服にしても、ファイターとしては向かない。
「男物の服がいいぞ」
真吾の声がした。
「この時代の女に比べると、レミーは身長が高い。女だと目立つ……。かといって、妙に色っぽい男に見えてもなあ……」
真吾の目の前を、その気のありそうな、妙になよなよした男が通り過ぎていく。
気にしてみれば、広場にその手の男が、やたらと多い。
「はあ……。ルネッサンスの音娘(おとこ)たちか……」

すれ違った男にウインクされたキリーが慌てて通信に割り込んだ。
「止せ止せ。男装の麗人は……。女でいるより面倒が起こりそうだ」
「よけいなお世話……。お二人にファッション・センスは期待してません」
とは言い返したものの、悔しいが二人の言うとおり、レミーの体格はこの時代ではいささか派手だ。
……せっかくルネッサンス・ファッションの中心地にいながら……。これだもんね……
結局、レミーが選んだのは、露天の古着屋に積み重ねて並べてあった尼僧の服だった。
いくら、いかがわしい露天にしろ、キリスト信仰が万能のこの時代に、聖職者の衣服が叩き売りされていたのだ。
フィレンツェの風紀は、そうとう自由？　というか乱れているというか……。
修道僧サヴォナローラのメディチ家への罵声も、あながち根拠のないものではなく思えた。
だが、いずれにしろ尼僧の衣裳なら、どんな趣味の男にしろ誘われる心配はあるまい。
それにレミーの太股に紐でとめた四十五口径の拳銃も目立たない。
もちろん服は黙って失敬したのだが、代わりにイザベルの服を置いてきたから古着屋に損はさせないだろう。
「真吾、キリー、私になにか懺悔することがあれば今日のうちにね……」
「あん？」
二人の声が同時にした。

「今日の私は神のしもべ……。多少のことなら許してあげるわ……」
レミーは、通信機にそう囁くと、いかにも尼僧らしく楚々とした足取りで、イザベルの後を追った。

＊

ヴェッキオ宮と呼ばれる市庁舎とシニョリーナ広場は、いうまでもなくフィレンツェの中心だ。メディチ家にとっても由緒の深い場所である。
だが、イザベルは市庁舎の高い塔を、ちらりと見上げただけで足も止めずに歩いていった。
花の大聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の傍を通って、サン・ジョバンニ洗礼堂に抜ける。この八角形の礼拝堂こそ、フィレンツェを訪れたら立ち寄らぬ人のない、この街の象徴だった。
金色の彫刻を施された北門は、あの自信家で人を誉めたことのないミケランジェロすら、天国の門と絶賛した彫刻家ギベルディの傑作だった。
しかし、イザベルは、この門に近寄りもせず通り過ぎていく。
腕時計の通信機で、その様子を聞いたレミーはいささか慌てた。
……目的の場所があったのか？
観光旅行でないにしろ、イザベルは、フィレンツェに憧れていた娘だ。
フィレンツェの名高い場所に立ち止まらぬはずがないと思っていた。

そこは、人通りも多いはずだし、めったなことは起こるまい。
それに、真吾とキリーは国連とニューヨークのギャングという出身こそ違え、集団のなかで親分を人知れず守る護衛術のプロ中のプロだ。
その技術は、私なんかよりずっと上手だ。
二人がイザベルを守りきれる時間を計算したからこそ、衣裳を調達したのだ。
……誤算だわ……。もしも、イザベルが、どこか人通りの少ない街角に入りこんだらどうなってしまうのか……。なにごとか起こったとき、土地不案内の真吾とキリーでは咄嗟にはイザベルを守りきれないかもしれない……
ましてて、レミーの衣裳のような尼僧の修道院……。女しか入れない場所もある。
レミーは、いつのまにか、大股で走りだしていた。
……いけない……。いくらなんでも尼さんのマラソンランナーは、目立ちすぎる……。サン・ジョバンニ礼拝堂までの近道は……、こっちだ……
勝手知ったる、フィレンツェである。レミーは横道に飛び込んだ。
百メートルほど走ったレミーは、いきなり立ち止まった。その横道の人通りが妙に少ないのに気がついたのだ。
レミーは今来た方向を振り返った。
僧侶の集団が、奇妙な念仏を唱えながら道をふさぐようにしてやってくる。
そして、前を見れば、やはり僧侶の行列だ。

……まいったなあ……
これでは、自分から罠にはまって横道に入ったようなものだった。
……お目当ては私よね、当然……。参ったなあ……、真吾たち、掃除しきれてないんだもん……
だが、まだ自分を襲う敵と決まったわけではない。
まして、相手はこの時代の僧侶である。
見方考え方によっては貴族、王族より身分は上、正義の味方である。
本来のレミーなら、一応ここは黙ってやり過ごして、相手の出方を待つところだ。
……本来しないの……今日の私は！……
……いきなり頭巾を取る。ふわりと髪がこぼれる。裾をまくりあげる。僧服の下のすらりと伸びた足。
僧侶たちが立ち竦むに十分だった。だが、それだけでレミーは満足しない。
太股から抜かれた四十五口径が間髪を入れず火を吐く。
一発、二発、三発。
僧侶たちの足元の石畳が砕け散る。さらに、僧侶たちの頭上に向け、四発、五発、六発。壁の煉瓦が吹き飛びばらばらと落ちてくる。
四十五口径の威力は、この時代では、おそらく小型の大砲に思えるだろう。
しかも目の前の尼僧から発射されたのだ。

僧侶たちは、腰を抜かし天を仰ぎ神に祈った。

レミーはすぐに撃ちつくした弾丸を入れ替え、銃を僧服の中に戻し頭巾をかぶると走りだした。

問答無用どころではない。むちゃくちゃなやり方だった。だが、それだけに、僧侶たちが我に返るのに数時間かかった。

そして、白昼、フィレンツェの中心地で尼僧の姿をした魔女が大暴れをしたという噂が広まり、フィレンツェの市民はいよいよサヴォナローラの予言した破滅の日が近づいたのではないかと恐怖にうち震えるというおまけまでついた。

＊

フィレンツェの名所にほとんど関心を示さなかったイザベルが、初めて立ち止まったのは、大聖堂からもメディチ家のリカルディ宮殿からも離れた建物の前だった。

イザベルは街角に佇むと、建物の開け放たれた門を見詰めている。

なにかの工場なのだろう……。のみやつるはしの石を穿つ音が絶え間なく聞こえ、荷馬車や職人ふうの男たちが、忙しく出入りしている。

「イザベルに追いつけそうだぜ。レミー」

レミーの災難など露知らないキリーの気楽な声が、通信機から聞こえた。

「だけど、ここは何なんだ？　メディチ家の女の子が来るようなところじゃないぞ」

真吾の声がした。
「よかった。そっちは無事ね……」
「無事って……、何があったんだ？」
キリーの声が、緊張して返ってくる。
二人の通信機の発進地点を腕時計のレーダーでサーチしながらレミーが答えた。
「あった。あったの大あり。でも話は後……。すぐそちらに行くわ。その位置だと、ヴェロッキオ工房のはずだけど……」
「ヴェロッキオの工房？」
「いわば美術品製造工場……。フィレンツェでも一、二を争う大手だわ……」
「美術品を工場で作るのか？」
「フィレンツェの美術案内は、後でします。ともかくイザベルに注意して。私たちを尾行している相手は、簡単じゃない……」
レミーは、道を急ぎながら考えた。
カステロの別荘からつけてきたレミーの尾行者を、真吾たちが始末したというのはおそらく確かだろう。とすれば、カステロから連絡を受けた別の一派が、フィレンツェの入り口で待ち構えていたことになる。
イザベルとレミーの二人を尾行するにはかなり大きな包囲陣といえる。
そして今のところイザベルには手出しする気配はないのに、レミーだけが襲われた。

もしかしたら……。尾行者のねらいは、イザベルよりレミーのほうにあるのではないか……。

……それにしても、同じ襲うのでも、僧侶の格好をした一団である必要があるのか……。しかも、ご丁寧に念仏の合唱までつけて……。ちょっと芝居がかっていすぎはしませんか?……

レミーにはわからないことだらけだ。

……ま、いいや、先、行きゃあ。何かが見えてくる……

こんなときのレミーは、いつも、後ろを振りむかず前進する一手だった。

レミーは、ヴェロッキオの工房の前にくると、すぐに街角のイザベルを見つけ、だれにも気づかれぬように物陰に隠れた。

ヴェロッキオの工房は、確かに、美術品の製造工場の一面をもっていた。

ヴェロッキオはルネッサンスを代表する芸術家だが、当時の芸術作品は必ずしもその作者ひとりで作られたものではなかった。絵画にしろ彫刻しろ親方を中心にして、数多くの弟子たちの共同作業で作られていのだ。評判のいい芸術家の工房にはまるで、ブランド商品のように注文が殺到し、毎日、突貫工事現場のような活況を呈していた。

優良企業には優秀な社員が集まるように、売れっこの作家には、優れた弟子が集まった。

実は、ヴェロッキオ自身は四年前の一四八八年に他界しているのだが、相変わらず注文が引きも切らないのは、故ヴェロッキオの名声もあるにしろ、なにより工房自体が、芸術製造会社として絶大な信頼を得ていたからだ。

ヴェロッキオの工房は、親方を凌ぐ芸術家を次々と輩出した。

ちなみにあのレオナルド・ダ・ビンチも、元はといえば、この工房の出身だった。
美術品を作る工場とはいえ、現場は決して上品とはいえない。
彫刻の材料の大理石や絵画の顔料、絵の具をのばすために使われた大量の卵を積んだ荷馬車が引っきりなしに行き交い、ぼんやりしていると引き殺されかねない忙しさだ。
そんな工房のある街角に佇むイザベルは、いかにも場違いに見えた。
誰一人立ち止まるものもいない街路だけに、じっとしているとかえって、目立ってしまう。
レミーは、何度も場所を変えながら、イザベルを見張った。
真吾もキリーも同じ苦労をしているのだろう。レミーが見るところ、通りのどこにも彼らしい男がいないのがさすがだった。
真吾とキリーがどこにいるかはわからないが、すぐにレミーは、イザベルを尾行していたらしい二人の男たちには気がついた。
……下手くそね。真吾たちを見習いなさい……
レミーは微笑んで、その男たちの位置をしっかりマークした。
レミーが動き回っているのと裏腹にイザベルは、じっと同じ場所に立っていた。
やがて、昼休みの時間がやってきた。
イタリア人のランチタイムはやたらと長いのが特徴だ。ワインを飲んだついでに昼寝でもしているのかと思うほど長い。
だが、イザベルは、立ち止まったまま動こうとしない。

じっと、工房の門を見詰めている。

痺れを切らしたのか、尾行の男が街角から消えた。おそらく、仲間に連絡に行ったのだろう。

尾行が入れ替わるのは面倒だった。

……始末したほうがいいかも……

だが、レミーは、イザベルから目を離すわけにはいかない。

そのとき、レミーの気持ちを見透かしたように、真吾から通信が入った。

「レミー、あいつは、そのままにしておく」

「どうして？」

「今、やつは伝書鳩を放った。もしあいつを始末して敵さんへの連絡が遅れてみろ。様子を見によけいなやつらが押し寄せる。とりあえずここでは、顔馴染みだけで相手をしていたい」

確かに真吾の言うとおりだった。

午前中の喧騒が、午後も続くとして、そこに見ず知らずの新手が来たら収拾がつかないのは目に見えていた。

……それにしても……、いったいイザベルは何を待っているのだろうか……

午後になっても、イザベルは一歩も動かなかった。

＊

フィレンツェの上空を舞っていた一羽の伝書鳩は、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖

堂のドームをかすめ、郊外に向かって飛んでいった。
やがて、鳩は、ロレンツィオの別荘カレッジの近くの丘にある瀟洒な屋敷のバルコニーに舞い下りた。
そこはカミーユの屋敷だった。
「やはり、来てくださいましたのね。思ったとおり、大胆な方……」
薄布を纏っただけのカミーユが、妖艶な笑みを浮かべ、ブンドルにワインのグラスを差し出した。
「この屋敷に一人だけとは、あなたも大胆にしてやはり尋常とはいえぬようだ」
軽薄な罠など仕掛けるタイプではないと思っていたが、屋敷の中に警備の兵はおろか人の気配すらないのにブンドルはいささか呆れていた。
「確かにこの屋敷は一人には広すぎます。けれど三人では窮屈ですわ。今日一日は、二人だけの時間を用意いたしました」
カミーユは、次の間の扉をゆっくりと開けた。
それを待ち受けていたようにリュートの曲が聞こえてきた。
ブンドルが聞いたことのない曲だが、どこかモーツアルトに似ていて、構えて聞くには退屈だが、ＢＧＭとしてはむしろモーツアルトを越えるできだった。
広間の壁面に歯車の噛みあわせで弦が弾かれる巨大なハープのようなものが置かれてあり、そこから曲が流れていた。

「楽隊などという不粋(よすい)なやからはおりません。レオナルド・ダ・ビンチという男が、考えた操り機械が弾いておりますの。もっともこの曲を作曲したのは私ですが……」

……カミーユが作曲を？……

ブンドルはカミーユを見返した。

……この曲を作ったのなら、かなりの才能の持ち主だ……

「もっとも、私は彫刻が好き……。見るのではなくて作るのが……。最近は、いいのができなくて……」

カミーユはうつむいた。妙に寂(さび)しげな横顔だった。

＊

フィレンツェに黄昏が近づいていた。

大聖堂のドームに、沈みかけた太陽がかかり、大理石の壁面が、サーモンピンクに輝くころになっても、イザベルは動く気配がなかった。

レミーとヴェッキオ橋で落ち合う約束の時が近づいていた。

それでも、ヴェロッキオの工房の門をじっと見詰めたままだった。

喧騒をきわめた通りも、この時間になると家路につく人が多いのだろう、しだいに人通りもまばらになってきた。

街角にぽつんと佇むイザベルはまるで、置き捨てられた石の彫刻のように孤独に見えた。

やがて、夕方の時を報せる大聖堂の鐘が、街中に鳴り響いた。
それに答えるように街中の教会の鐘が、フィレンツェの黄昏の空気を震わせ鳴り渡る。
イザベルは、肩を落とし溜め息をついた。そして、鐘の音に促されるようにやっと歩き始めた。
イザベルに待ち人がいたとしたら、その人は現れなかったのだ。
もしかしたら、イザベルはその人と約束すらしていないのかもしれない。
物陰で見詰めるレミーは、イザベルの後ろ姿に、ふっとそう思った。
……そういえば、私にもあんなときがあった気がする……。そう……十二か十三のころ、あれは、パリのモンマルトルだった……
冷たい冬の雨の日……。育ててくれた街娼のおばさんたちの飲む無印のコニャックを買いに行った帰り道、両手が酒瓶にふさがれたレミーは、何かにつまずいて転んでしまった。酒瓶は割れるし、びしょ濡れにはなるし、途方にくれていたレミーに、「大丈夫かい？」と声をかけ、ハンケチを貸してくれた人がいた。ハンケチを洗って返すと言ったレミーに、首を振って名も言わず、その人は行ってしまった……。
うらぶれた街娼の娘として生まれ、一人ぼっちだったレミーは、それがとてもうれしくて、せつないほどその人にまた会いたくて、しみひとつないようにと何度も洗ったハンケチを持って、次の日からその舗道であてもなく待っていた。
すれ違いが恐いから、三日間、飲まず食わずで立っていて……、肺炎になって慈善病院に担

ぎこまれた。
結局、おばさんたちの客の中にその人の顔を見つけ、何度目かの片思いはだれにも告げず苦く終わったけれど、あの待ち続けた三日間のときめきは今でも胸のどこかに残っている。
レミーは、イザベルの姿を見て、昔の自分を鏡に写しているような気がした。
……でも……、そうだとしたら……
物心ついてから一度も来たことのないというフィレンツェで、イザベルはいったいだれに会おうとしたのか……。
……もしかしたら、フィレンツェの黄昏の鐘の音に、センチメンタルな憶測をしすぎたのかもしれない……。いけない……いけない……。さっき、四十五口径をぶっぱなしたばかりだというのに、ここはハード・ボイルドでいかなきゃ……
レミーは、気を引き締め直してイザベルを見詰めた。
イザベルは、重い足取りを進めながらそれでも後ろ髪を引かれるか、何度も何度も工房の門を振り返った。
その足がふっと止まった。じっと立ちすくみ工房の門を見詰めている。
レミーもそのほうを見た。
顔料の樽を積んだ馬車が止まり、工房の門からでてきた数人の男が品定めをしている。
イザベルの肩がかすかに震えた。
泣いていた。でも、動こうとはしない。

だれを見詰めているのか、レミーにはすぐにわかった。
男たちの中では一番若いのに、彼らを代表して、顔料をひとつひとつ吟味して、身振り手振りで盛んに商人に注文を出している金髪の青年だ。
顔料の樽が、工房の中に運び入れられるのを見届けた青年は、今日の仕事が終わったのだろう、両手をあげて大きく伸びをした。
その手が、一瞬、止まった。
街角のイザベルに気づいたのだ。
青年は、信じられないものを見たように何度も何度も首をふった。
二人とも、石畳の広い道を挟んで、一歩も動かなかった。
しかし、見詰め合った瞬間に、気持ちは駆け寄っていた。
まるで、二人の間にだけ真空の時間がぽっかりと開いたようだった。
それは、実際にはわずかな時間かもしれなかったが、見詰めるレミーには二人がどんな関係か、わかったような気がした。
……二人は愛し合っている……
どこでどんな出会いをしたか知らないが、二人の男女の間に通い合う空気は、親しみでもまして憎しみでもない……。心から人と愛し合った経験のある者だけがわかる、微妙な空気の肌触りだった。
おそらく今、あの二人には、互いの姿しか見えていない。

暗闇の中にまるで、お互いだけがスポットライトに当たっているように……。
音すら何も聞こえていないだろう。
見詰めるレミーは、何となく一人だけとり残されているような気がした。
自分だけしみじみとたそがれた気分だ。
だが……、そんな気持ちに身を委ねる時間は、すぐに弾けた。
耳鳴りのような音が、ざわざわと響いてきたのだ。
それは、大勢の人々の祈りの声だった。
「主よ、我らの懺悔を聞き届けたまえ……」
フィレンツェの夕暮れに、その言葉だけが、うねるように広がっていく。
やがて、道幅を埋めつくすような人々の群れが、僧侶たちに引き連れられて現れた。
イザベルと青年の間の空間が、人の波で、見る見る遮られていく。
人々は、ヴェロッキオの工房の門を遠巻きにした。
「な、何の騒ぎです……」
人の波の向こうのイザベルを気にしながらも、青年が、聞いた。
僧侶の一人が叫んだ。
「黙れ……、腐敗堕落の徒!……」
それはサヴォナローラだった。
「これは、この工房で作られた物であろう」

僧侶の中の二人が、抱えるように運んできた大理石の彫像を路上に放り投げた。
それは、背中に鳥の翼をつけた若い男の裸体像だった。
石畳に落ちた彫像から翼が砕け散った。
「汚らわしさの極み！　恥を知れ！」
青年は、彫像に駆け寄り叫んだ。
「何をします。これは、ギリシャ神話にある、ダイダロスが作ったという人工の翼をつけたイカルスという若者の像……。いかにも、この工房の今年のテーマですが、決していかがわしいものではありません。空を飛びたいと願う人々の夢を表現した物……」
「黙れ！　空は、恐れ多くも神の領界……。わずかに鳥と天使のみが飛ぶのを許される。しかも、この彫像、身に何も着けず、けがらわしき物を猛々しく曝け出し、婦女の劣情を誘わんとするおぞましき趣向が歴然……。おまえらは、芸術の名を借りてあの虚栄に溺れたメディチ家と同じく悪魔に魂を売る亡者だ。さあ、ここから立ち去れ！　そして、神に許しを乞い懺悔するのだ」
サヴォナローラは、群衆に叫ぶ。
「さあ、フィレンツェ市民よ！　神に懺悔し、虚飾猥褻を生み出すこの工房を叩き潰せ！」
僧侶たちがそれに答えるように祈りの声をあげる。
「主よ、懺悔をお聞きください！　我らをお救いください！」
群衆たちは、手に手に持った石を工房の門に投げつけた。

燃えさかるたいまつを投げ込むものもいる。
すぐに松明は、門の中の顔料に引火し、どっと炎が広がった。
その炎に煽られるように、群衆の投石は激しさを増した。
のみやつるはしを持った工房の職人たちが、消火と群衆への応戦に飛び出してくる。
たとえサヴォナローラが神の名を使おうと、芸術家を自認する職人たちにとっては、工房を破壊するものは敵だった。
群衆のひとりが叫んだ。
「悪魔の手先をやっつけろ！」
群衆は職人たちに殺到する。
「止めろ！　止めるんだ！」
青年は、群衆と職人たちの前に立ちはだかった。
たちまち、人波に巻き込まれた青年は殴られ蹴られ、血へどを吐いて路上に倒れた。
その瞬間……。
今まで、石に刻まれた彫像のように動かなかったイザベルの中で、押さえに押さえていた感情の止め金が弾けた。
「ベルナルド……ベルナルド！」
そう叫ぶと、通りをまっしぐらに青年に向かって走った。
そこが、暴徒化した群衆のただ中であることなど気にもかけていなかった。

イザベルの気持ちのすべては今、青年だけだった。
「イザベル！　よして！」
レミーも弾かれるように走った。
イザベルは倒れている青年の上に身を覆い被して守ろうとする。
だが、たとえそれが女であろうと、興奮した群衆には区別がつかない。
数人の男たちが棍棒でイザベルに殴りかかる。
レミーは、その一人に体当たりし、他の男の棍棒をもぎ取り、蹴り飛ばした。
レミーの場合、幼いころから自己流で覚えた護身術は、しばしば過剰防衛どころか、結果的に激しい攻撃の手段になってしまうことが多い。
いきなり飛び込んできて暴れる尼僧に、群衆の一部は一瞬ひるんだものの……、なぜ？　尼僧が？　などといぶかる余裕は、いまや暴徒化した彼らになかった。
彼らには、暴力の対象が、一人増えたにすぎなかった。
レミーは、咄嗟に銃を構え叫んだ。
「近寄ると射つ！」
……とはいったものの、無駄なことにすぐ気づいてくちびるを噛み締めた。
……この時代、銃の恐さなど知るはずのない人々に拳銃を見せても脅しにはならない。
……だからといって、発砲したところで、このもみくちゃの騒ぎのなかでは、なまじ怪我人や死者を出すだけで、束になって襲いかかる群衆を止めることは不可能だ。

さっき、レミーに迫ってきた、静かで判断力のある僧侶の集団と、この暴徒化した群衆は、質が違うのだ。脅しというのは、相手にある程度の冷静さがないと効果がない。

レミーは、数分後の、まるでぼろ布のようになって、路上に倒れている自分とイザベルと青年を予感して天を仰いだ。

次の瞬間だった。

数条の閃光が走り、目の前の群衆が、感電したように痺れのけぞって倒れた。

やたらと大柄な尼僧が二人、ラグビーの選手のように肩で群衆をふっ飛ばしてくると、イザベルと青年を抱きあげた。

「無茶が過ぎるぞ、レミー」

尼僧の手には、レーザー銃が握られている。

レーザーの出力を下げているから、相手を殺す心配はない。

いうまでもなく真吾とキリーだ。

レミーは尼僧の二人に呆気にとられて言った。

「そういう格好だったわけ……」

真吾が、レーザー銃を連射しながら答えた。

「思いは、レミー、きみと同じさ……。イザベルが、女しか入れないところにいったら、男の姿じゃどうしようもない」

キリーも撃ちながら言った。

「せっかくのルネッサンス、同じ女装だったらモナ・リザやりたかったがね……。もっともモナ・リザさんの微笑をやってる暇はなさそうだ……」
群衆に埋めつくされた通りに、逃げ場はなかった。
レミーたちは、イザベルと青年を引き摺るようにして工房の門の中へ入った。
群衆は、門を破り工房の職人たちを袋叩きにすると、中庭に並んでいる作りかけの彫刻を次々に壊していった。
この混乱のなかでは、真吾たちのレーザー光線もさっぱり脅しにならなかった。
炎が工房の天井に燃えひろがり、飛び散る火の粉の中では、真吾たちの射つレーザーの光線が目立たないのだ。
おまけに出力を弱くしているから、光線が人に遮られるとその人間は気絶するにしろ、それ以上突き抜けていかないのだ。
群衆は興奮の極にいるから、目の前の人間が、わけもわからず倒れてもさほど気にならぬらしい。
「連中を気絶させるだけじゃあ、たいした効果はないぜ」
キリーが舌打ちした。
「かといって、出力を上げると大殺戮になっちまう」
「やるときは徹底的にやるといったのはだれだ？」
「おまえじゃなかったのか？」

「だれだか忘れた……」
二人とも困っていた。
レーザー銃を最大出力にすれば、この場にいる群衆など、箒で掃くように、一瞬で蒸発させることができる。
だが、相手はサヴォナローラに扇動され舞い上がっているろくな武器も持っていないただの民衆なのだ。
しかも、真吾たちは、彼らに呼ばれてこの時代にきたわけではない。むしろ、こちらは、いるはずのない存在なのだ。
それなのに、この時代では神の雷にも近いレーザー銃で、射ち払っていいのか？
人間が堕落したという理由で、破天荒な力であのノアの洪水を起こし、ソドムとゴモラの街を焼き払ったという聖書にでてくる神様は、そこらのところは、悩みもしなかったのだろうか？
人間である真吾、キリー、レミーとしては、そこのところは、相当引っ掛かってしまうのだ。
レーザーを使うなら使う相手が違う。その相手は、今、見えないが……。
強力すぎる武器を持ち、それしかとりあえず使いようがないのというのは、ありがた迷惑というか考えものだ。なければないで諦めもつくものを……。
しかし、そんな悠長な場合でないことも確かだ。……このままでは、こちらがやられる。
真吾たちはいつになくいらついた。

工房のなかは、神々の像や、絵画が、所狭しと置かれてある。
それは、聖書の神と比べたら、俗っぽく、人間臭く、怒り、笑い、泣き、嫉妬し、性愛に溺れる悩み多きギリシャ神話の神々だ。
ルネッサンス……。専制君主と教会が絶対的な力を持つ中世の暗闇の時代から脱出して人間らしい自由な世界を求める人々が、模範としようとしたギリシャ・ローマの古典の世界だ。
今、フィレンツェの群衆は、狂ったようにその神々の像を叩き壊していく。
神の武器に近いレーザーを持ちながら、彫像や絵画の間を逃げる真吾たちは、ほとんどギリシャの神々の気分だった。
やがて、キリーに引き摺られていた青年が、目を覚ました。
「イザベル……」
青年は、キリーを振り払うようにして、イザベルの名を呼んだ。
「ベルナルド……、ここにいるわ……」
二人は、見詰め合い、そして抱き合った。
「どういう事情か知らないが、そういう場合じゃないんだがな……」
真吾が溜め息をついた。
「人の恋路を邪魔するやつは、馬に蹴られて死んじまえとはいうけれど、このままじゃ、人に蹴られて死んじまうぜ」
キリーが、冗談めかしていったところで状況は悪くなる一方だった。

青年は、キリーを振り払うようにして、イザベルの名を呼んだ。
とうとう、五人は、群衆に工房の奥まで追い詰められた。
「やるっきゃねえのか？」
キリーが、ほとんど絶望的に呟いた。
「らしいな……」
真吾が頷き、レーザー銃の出力絞りに指をやった。
五人が、逃げられるまでに群衆に何人の死傷者が出るだろう？
後の歴史に「ヴェロッキオ工房の大虐殺」と記録される可能性は十分あった。
そのときだった。
煙の中、目の前の群衆が、ばたばたと倒れていく。
一瞬、何が起こったかわからず茫然となった真吾たちの間隙を縫って、血に塗れた剣を持った数人の男たちが飛び込んできた。
男たちが、目の前の群衆を斬り倒したのだ。
その中の二人は、イザベルを尾行していた男たちだった。
レミーたちが、抱き合っているイザベルと青年に、少しだけ遠慮をして離れていたすきを、男たちはついた。
青年とイザベルに剣を突きつけ、その中の一人が真吾たちに叫んだ。
「悪魔よ、動けば二人の命はない……」

そして、青年に言った。
「ベルナルド、守ってやる。われわれと来るのだ……」
……どうなっているんだ？
レミーと真吾、キリーは顔を見合った。
「ちょっと待って……。二人を守っているのはこっちだわ」
レミーが、剣を持った男たちに言った。
「黙れ！　ベルナルドは神より与えられた優れた才能の持ち主だ。悪魔に、魂を奪わせはしない……」
「おいおい、悪魔って、おれたちのことか？」
キリーが、憮然(ぶぜん)として自分を指差し首を捻(ひね)った。
「ベルナルドを誘惑(ゆうわく)したこの女はくれてやる」
男たちは、三人のほうへイザベルを突き飛ばした。
そして、竹の筒(つつ)のようなものを投げつけた。
その先端(せんたん)に火がついていた。
……手榴弾(しゅりゅうだん)？……
「伏せろ！」
素早く真吾のレーザーが、筒を弾き飛ばした。
ぽん……という軽い音を響かせたわりには、赤や黄色、緑の火花が、派手にあたり一面に飛

び散った。
だが、あわてて倒れ伏せた真吾たちにほとんど被害はない。
「なんだ？　びっくりさせやがって……。ただの花火じゃねえか……。大砲のある時代だ。手榴弾ぐらいはあっていいと思ったがね……」
「花火でも、レーザー光線よりは派手で、脅しには効くわ」
煙の中……、ベルナルドと呼ばれた青年をつれて逃げていく男たちは、次々と筒状の花火を投げた。
荒れ狂っていた群衆たちも、目の前で爆発する花火には仰天し、先を争って逃げだした。
ベルナルドを連れ去られたものの、どうにか危険を切り抜けた真吾たちは、飛び散る七色の花火の中で、ふっと安堵の溜め息をもらした。
「……元祖花火。フィレンツェ名物の花火か……」
呟いたレミーは、次の瞬間叫んだ。
「みんな！　逃げて！」
「長居する気はないが……、何をそんなにあわてて……？」
血相を変えているレミーにキリーが肩を竦めた。
「芸術品を作るのが工房……。花火は立派な芸術だわ……。ここにも花火が……」
レミーが言いおわらぬうちに、真吾はイザベルの手を強引にひっぱり、走りだす。
「あ、ならおれはレミーを……」

先を越されたキリーは、レミーの手を引いて走りだした。
……手を離したほうが早く走れるわ……
と、レミーは思ったが、せっかくのキリーの心遣いだ。そのまま手をつないで、工房の外に飛び出した。
次の瞬間、フィレンツェの市内を揺るがすような爆発が起こった。
工房の中の花火が一度に火を吹いたのだ。
いつのまにか陽は沈み、夜空に花火が繰り返し繰り返し炸裂した。
まるでそれは、闇の中で孔雀が羽を広げ舞っているように見えた。
茫然と見上げる一同の前に二人の僧侶がとぼとぼと現れた。
「やっと見つけたぞい」
「わしゃ、方向音痴じゃし、レーダーだけじゃ、どうも不案内で困る。こいつも夜になると鳥目じゃし」
僧侶の肩のカラスが、カアと心細げに鳴いた。
尼僧の姿をしていないのが救いのケルナグールとカットナルだった。
「別荘で待っているはずなのにどうしてここに？」
レミーが聞いた。
「どうしてもこうしても、毒の入ってないのは、ワインだけ、出された昼飯は、みんな毒入りじゃ」

「わしの解毒剤がなきゃ、あの世行きじゃった。とても、あんなところにゃおられんて……」
「わたしたちも、こんな騒ぎの後じゃ、お出迎えがいっぱいそうで、とうてい、あの別荘には帰れないわ……」
　レミーが肩を竦めた。
「ブンドルは、どうなってる？」
　真吾が、腕時計の呼び出しボタンを押した。
　反応がない。
「もしかして……」
　レミーは、くちびるを嚙みしめた。
「いや……、この様子じゃあっちでスイッチを切っているんだ。取り込み中なんだろう。ブンドルおじさん、今回、一番得な役かもしれないね」
「カミーユのお相手のどこが得なのよ！　一番危険じゃない」
　レミーは、つっけんどんにキリーに言い返した。

＊

「やはりね……」
　伝書鳩の頭を撫でながら足につけられた伝文を読み終えたカミーユは、そう呟くと、ブンドルに振り向いて言った。

「あなたたちは、神？　それとも悪魔？　どちらにしても、あなたなら今宵をともにするお相手として不足を言いはしませんけれど……」
カミーユは、とろんとした瞳でブンドルを見据え、濡れたくちびるで三十七杯目のワインのグラスを舐めながら、長椅子に横たわった。
「神……、悪魔……、ずいぶん買い被られたものだ……。なぜ、そう思うのかね……」
ブンドルは、三十八杯目のグラスをあけてカミーユのかたわらに座った。
長い夕食の間中、飲み続けていたが、さすがメディチ家のキャンティ・ワインの味は、飽きることがなかった。
「あなたたちが盗賊軍からイザベルを救けたときの奇妙な武器……、彼らは、あなたたちを悪魔だと思い込んでいたそうです」
「やはりあなたの差し金か……。そんなにイザベルが邪魔だったのかね」
「あの娘は、メディチ家の血筋の娘の中ではできが良すぎます。わたしの味方になれば可愛いが、敵になれば目に障ります。情が移らぬうちに刈り取ろうと思いましたの。でも、そこにあなたたちが現れた。少し様子を見ることにしました。あなたたちを怒らすと、やはり恐ろしそうですから……。でも、私、恐いのは大好きですけれど……」
「そこまで、私に話していいのかね？」
「このようなことすでにお気づきのはずでしょう？　あなたなら……隠すのは時間の無駄……。あなたが神にしろ悪魔にしろ、魅惑できたら女の冥利ですわ」

カミーユは、ブンドルのグラスにワインを注ぎ、自分が飲んだ。
「それに、あなたを神とは思いませんわ……。神が、私の部屋に入るとは思えませんもの。ちなみに鳩が報せてくれたあなたのお仲間の武勇伝……。こちらは、魔女と書かれてありますわ。あの女の方なら、だれが見ても聖女には思いませんけれど……」
「扱いは難しいが、悪い娘ではない。それに女なら多少の魔性は必要だろう」
そのころレミーがわけもなく、くしゃみをしているのも知らず、ブンドルが答えた。
「魔性……、それは、わたしのこと？……」
カミーユはブンドルにじわりと擦り寄った。
そして、ブンドルの耳元で囁いた。
「私、悪魔と契約してもよろしいですわ」
「契約の内容は？」
顔色ひとつ変えずブンドルが答えた。
「あなたの持つ武器を含めた力と、私の手にあるフィレンツェの美、才能、芸術……」
「あなたの手にある？」
ブンドルは聞き返した。
「ええ、ミケランジェロ、ボッティチェリ、ダ・ビンチ、その他、輝く才能ばかり、残る最後のベルナルドも、今日手に入りましたわ……」
「ベルナルド？　聞かぬ名だが……」

「若手では、天才少年のラファエロを凌ぐ芸術家の芽ですわ」
「ラファエロを凌ぐ？」
ブンドルは、カミーユを見詰め返し言った。
「あなたにその興味がおありなら、なかなかに可愛い男ですわ」
「どうやらフィレンツェの美とは、作品ではなく、作者本人のことらしい」
ということは、ミケランジェロやボッティチェリ、ダ・ビンチを手に入れたとは……、誘拐したのか手なずけたのかは知らないが……、カミーユの思いどおりになるところにいることになる。
ブンドルはカミーユに言った。
「……フィレンツェの美とやらのカタログを聞かせていただこうか……」
「やはり、興味を持たれましたね。ええ、よろしいですわ。あなたのお答えは、フィレンツェの美はおろか私に美をお試しになってからで結構です」
「答えは、朝までに……」
ブンドルはワインをカミーユのグラスに注いだ。

＊

昼間ならフィレンツェの街が、一望に見渡せるはずだ。……後にミケランジェロ広場と呼ばれる丘の近くで、レミーたちは、ぽつねんとブンドルの連絡を待っていた。

「ベルナルドは、ヴェネチアのガラス工房のお弟子さんでした」
イザベルに、いつものはきはきした口調はまるでなかった。
ベルナルドの安否を気遣って、今にも胸が張り裂けそうな感じだった。
「ガラス工房って、ムラノ島の？」
レミーが聞いた。
ヴェネチアのムラノ島といえば、ルネッサンスから二十一世紀まで、ガラス工芸の一級品を生み出してきたガラス職人のメッカとして知られていた。
さすがのフィレンツェもガラスの技術に関してだけは、ヴェネチアにかなわず、その奥義を盗もうと、何度もスパイを潜入させたと伝えられている。
「はい……。東方貿易の商品として、ガラス細工を選びに、私、何度もムラノに行きました。そのとき、ベルナルドに会ったんです。いいえ、会ったというより、あの人が、ガラス細工を作る姿を見たんです。私、ただ、見ていただけなんです。ムラノに行くたびに……」
イザベルは、切なそうに溜め息をついた。
「声も交わしませんでした……。そのときには、もう、私、だれかが私を見張っているのに気がついていましたし……、フィレンツェのメディチ家の娘と、ヴェネチアの宝物ガラス細工を作る芸術家……。それが、だれかに知れたらあのヴェネチアで許されるはず、ありませんもの」
イザベルは、ふっと微笑した。

「だから、お話ししたいけれど、黙って見ているだけでした。あの人も、ときどき、私のほうを見てくれたけれど、ただそれだけでした……。私、あの人の名前が、ベルナルドだということ……あの人の仲間があの人を呼ぶ声で知りました……。名前がわかっただけでも、私、嬉しかった。一日中、あの人の名前を心の中で繰り返すような毎日が続きました……。あの人とのこと……それだけです……」

「それだけって？　見詰めていただけ？　お互いに……」

いささか唖然としてレミーは聞き返した。

さっきのイザベルとベルナルドの様子は、それだけの間柄にはとても見えなかったからだ。

「お互いって……、あの人が見詰め返してくれたのは……私の気のせいかもしれません……。なにしろ話したこともないから、あの人の気持ちを聞いたわけではないんです……で――」

「で？」

「ある日、あの人はムラノの工房から姿を消しました。噂では、工房を無断でやめて、フィレンツェに美術の勉強に行ったというんです。芸術の中心地としてのフィレンツェは知れわたっていましたし、芸術家なら、一度はフィレンツェで勉強したいという人も少なくありません。でも、ガラス工房の人は、簡単にヴェネチアの外には出られません。ガラス細工の秘法が他国に漏れてしまいますもの……。だから、あの人にしても二度とヴェネチアには帰らぬつもりで、出て行ったんだと思います。私、あの人とは、もう二度と会えないと思いました。……そんなある日、私は、フィレンツェの商人から買い入れた絵を見たんです。それはヴェロッキオの工

房で描かれた絵でした。その絵の片隅に、女の人が何人か描かれていました。私は、その中の一人を見て、感じたんです。この女性は、私だって……。なぜだかわからないけれど、感じてしまったんです。署名などなかったけれどこの女性を描いたのはベルナルドに違いないって……。それから、ずっと心に決めていました。いつかフィレンツェに行ってみたいと……」

「フィレンツェに来のは、メディチ家に呼ばれただけの理由じゃなかったのね……」

「メディチ家に呼ばれただけでは、私、フィレンツェには来なかったと思います。せっかく、ヴェネチアで世界中を回れるお仕事ができていたんですもの……。それに、フィレンツェにいけば、たぶん、後継ぎに絡んだ妙なお家騒動に巻き込まれるような気がしましたし……、でも、きっとレミーさん、信じていただけませんよね……、見詰めていただけで、口もきいていない人に会いたくてフィレンツェにくるなんて……」

……それだけじゃない……。レミーは、驚嘆してしまう。ベルナルドがいるかどうかもわからないヴェロッキオの工房の前で、イザベルはあてもなく何時間も待っていたのだ。たった一枚の絵の片隅に描かれた女性の絵だけを手がかりに……。

「馬鹿みたいだとお思いですよね……。自分でもそう思います。でも、この気持ちどうしようもなかったんです。けれどやっぱり来てよかった。……嬉しかった。だって、あの工房の中で、あの人は、私の名を呼んでくれた。あの人は、私の名を知っていた。あのとき、抱いてくれた。やっぱりヴェネチアで、あの人は、私を見詰めていてくれていたんです。忘れないでいてくれたんです」

「見詰めるだけの愛か……。わかるのう……、わしにも経験があるわい」
ケルナグールが、コミックなら瞳に星を浮かべるような表情で言った。
ケルナグールの場合は、女性に声をかける度胸がなく、ただの片思いに終わっただけの経験が、手と足の指の数を数えるよりもたくさんあったのだ。
「しかし、ロメオとジュリエットはおろか、ペーパーバックの婦女子向きロマンが、裸足で逃げだす目茶苦茶な設定のラブロマンスじゃね」
カットナルが茫然と言った。
なぜか、アメリカ大統領時代の蔵書に婦女子向き？　ロマンが一番多かったカットナルだ。
こんな純愛ストーリーを小説で読んだら、不自然な展開の筋で馬鹿馬鹿しいといって、ごみ箱に放り込んだだろう。
だが、目の前にいるイザベルが、現実に起きているラブロマンスの主人公なのだ。
「現実は、小説より手抜きだ」
カットナルが呟いた。
「見詰めていただけの思い込み恋愛に巻き込まれ、すったもんだの大騒ぎをしてしまったのがおれたちってわけ……」
キリーが肩を竦める。
「これで、ベルナルドって男が、イザベルを好きでなかったら、少女の思春期のよくある片思いに、大の大人が六人、おつきあいしたことになるよな」

真吾が、ちっとも嫌そうな顔は見せずに言った。
「どんなふうに出会おうと、今、わかっているのは、二人が確かに愛し合っているってこと……。私は、手伝うわ。歴史の流れがどうとかこうとかなるちゅう不確かなことよりも、二人の恋愛のほうが、よっぽど確かだもん」
レミーは、きっぱりと言った。
「一番不確かなもの……、恋愛。それが、今一番確かなものか……」
禅問答のような調子で、真吾が言った。
……今、歴史の流れを変えるなどという大袈裟なことを問題にするより、ベルナルドを取り戻し、ちっぽけだが呆れるほどひたむきなイザベルの恋愛を守ってやろう……
意味のないように思えるルネッサンス時代への漂着に、ファイターたちは、やっと目的を見つけることができたような気がした。
「乙女の純愛におじさんたちとおばさんは頑張るとするか……」
キリーが、ジャック・ナイフを玩びながらふっと笑った。
「おばさんじゃありません。わたし、お姉さん」
レミーが、にっこり笑って、キリーに訂正した。
だが、ベルナルドはどこに？……
カミーユが、その鍵を握っているのは、明らかだ。
レミーたちは、とりあえずブンドルからの連絡を待つことにした。

＊

夜が白々と明けるころ、一同の腕時計が通信音を発した。
それは、ブンドルの声ではなくモールス信号だった。
おそらく、だれかが傍にいて声を出しては連絡できない状態なのだろう。
もちろんモールス信号は、この時代にはまだ考案されていない。
信号を読み取った一同は、思わずイザベルを見た。
……カミーユとともにヴェネチアに行く。ベルナルドもそこに……
モールス信号はそう語っていた。
なぜ、ブンドルが、わざわざベルナルドの名を書き足したのかわからなかったが、ブンドルが、かなりカミーユに肉薄して、その結果、イザベルとベルナルドのことを知ったことは確かなようだった。
レミーはイザベルに言った。
「行くわ……わたしたち、ヴェネチアへ」
「はい？」
イザベルが聞き返した。
「あなたとベルナルドの出会った街が、次の舞台ね」
一同は、フィレンツェと並んでルネッサンス時代を代表する街、水の都ヴェネチアに向かった。

第四楽章

終焉のパバーヌ

ヴェネチアの海に消え……

ヴェネチア……。

ルネッサンス期、アドリア海の花嫁と呼ばれたこの街は、海の浅瀬の上に材木で土台を作りそのうえに築かれた文字どおりの海上都市だ。

西洋と東洋の交易地として栄え、一時はフィレンツェを凌ぐ裕福な都市国家として栄えていた。

さまざまな国が、その富を狙って、襲いかかったが、周囲を城壁代わりの海で囲まれ、強力な海軍で守られたヴェネチアを攻め落とせる国はいなかった。

だが、かつてヴェネチアが占領していたコンスタンチノープルが、イスラム世界のトルコ帝国によって陥落させられて以後、地中海貿易がキリスト教世界にとって危険になり、東方への貿易航路を、大西洋方向からアフリカ回りに求める声が高まってきた。

このころ、地球が丸いのは、貿易商人にとってはすでに常識だったから、西回りに東洋への航路を求めようと企てるものも出る始末だった。

西回りで東洋を目指すつもりが、途中にあるアメリカに辿りついてしまったコロンブスを代表とする大航海時代は、もう始まっていたのだ。

以後、ヴェネチアは、大西洋に面するスペインやポルトガル、そしてイギリスなどにその貿易大国としての地位を取って代わられるのだが、十五世紀末のヴェネチアは、その最盛期から没落の兆しの見えだした、まさに黄昏のときだった。

だが、滅びの予感が、やけっぱちのように文化を爛熟に駆り立てる。

ヴェネチアの人々のエネルギーは、街の繁栄よりも文化を洗練させることに費やされた。

ヴェネチア芸術は、ジョルジョーネ、ティツィアーノ、ティントレット……まさにこれから咲き乱れようとしていた。

「芸術は、朝陽の曙光よりも黄昏の残光の中でこそ美しいものですわ」

カミーユは、ブンドルとゴンドラに揺られながら、アドリア海に沈んでいく夕日を見詰め呟いた。

イタリア本土から、ヴェネチアに渡るには、船しか方法がない。いや、街の中も、大通りらしい道はなく、四方八方に張り巡らされた運河を進む小舟が交通機関だ。

二人を乗せたゴンドラは、陸に向かわず、大運河を通ると、サン・マルコ広場を背に海に向かってすべりだしていった。

*

「本当に、こっちの方向なんですか？」

イザベルが、不安そうに聞いた。

「ブンちゃんの持っている発信機は、そう言っているわ」

ブンドルの居場所を示す腕時計のレーダー反応を手掛かりに、ゴンドラ二艘に分乗した一同は、入り組んだ運河を進んでいた。

「その羅針盤のようなもの、確かなんでしょうか……」

……ヴェネチアの運河は、私の庭のようなものです。どんな迷路に見えたって抜け道はわかっています……

さっきまで、そう言いきっていたイザベルが、今はしきりに首を捻っている。

「……こっちの方向にいるとしたら……、とても困ります」

「どうして?」

レミーが聞き返した。

「どうしてって……」

イザベルは言葉を濁した。

しばらくして、イザベルの戸惑いのわけが、みんなにも理解できた。

「確かに、ブンドルはここにいるはずだが……」

真吾が溜め息をついた。

そこは、サン・マルコ広場が遠くかすかに見える海の上だった。

「ここのどこだよ……」

キリーが、暗く肩を竦める。

海の中しか考えられない。

「通信機の発進音は、別にブンドルが息をしなくても鳴り続ける」

言わなくてもいいのにカットナルが、注釈をつけた。

「おい、イタリアの魚……、ブンドルは煮ても焼いても食えんやつだった。あいつを食っても

きっと旨くはないぞ。生前の言動からすれば、食えば毒に当たるかもしれん」
ケルナグールが、涙ぐんで言った。精いっぱいの哀悼のつもりだった。
「信じないわ！」
レミーが、首を振った。
「ミケランジェロにお墓も予約せずに行っちゃうなんて……」
レミーは、いきなりスカートの中に手を入れると太股の拳銃を外し、キリーに差し出した。
「キリー、あなたのナイフと交換して……」
「あん？」
「あなたは泳げないんでしょう？……私が見てくる」
レミーは海を指差した。
確かにかつて、ブロンクスの狼といわれたキリーだが、唯一の弱点は犬掻きもできない金槌だということだった。
カラス連れのカットナルの水泳はカラスの行水より短い時間しか続かなかったし、頭の重いケルナグールの泳ぎは、二度と浮かんでこない潜水艦だった。
「おれが行こう」
真吾が、上着を脱ぎかけた。
「ノン……。ファイターで泳げる人が、一人は上にいなきゃ不安だわ。海女さんの真似は、尼さんに任せて」

「わかった。だが、おれのレーザー銃は参加させろ。これなら、海のなかでも電気ショックの代わりにはなる。ただし、自分まで感電するなよ……」
真吾は、レーザー銃をレミーに渡した。
「私も行きます」
イザベルが、服のホックをはずし始めた。
「私、ヴェネチア育ちです。ここの海は、私の庭です」
レミーは頷いた。
「OK……みんな後ろを向いて！」
何となく、レミーとイザベルが服を脱ぐのをぽかんと見ていた男たちは、あわてて後ろを向いた。
レミーとイザベルは、右手に発信機のついた腕時計、太股にレーザーとナイフを縛りつけただけの一糸まとわぬ姿になると、素早く海に飛び込んだ。

＊

蒼く輝く天蓋のような水面から、人魚を連想させるような、白い二人の体が、ぐんぐん海底に向かって降りていく。
温暖な地中海のアドリア海とはいえ、春の海は、決して暖かいとはいえない。
だが、二十一世紀には地球の痰壷といわれるほど汚染された地中海も、さすがにルネッサン

ス期の今は、水の透明度が高いのが救いだった。
息の続くかぎり潜水を続け、海面からの太陽の光が、ほとんど届かぬほど、あたりが闇に閉ざされた深みに来たとき……。
レミーは、信じられないものを見て、思わず海水を飲み込みそうになった。
……こんなのありえない。コスチューム・ドラマ（時代劇）がＳＦになっちゃった……。そうでなければ、これ、お伽話？……
レミーの思いももっともだった。
そこに、七色のモザイクで飾られた、巨大なドームがぼんやりと幻灯写真のように浮かび上がったのだ。
遠くから全体の形を確かめれば、それは、ほとんど、フィレンツェの花の大聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂そのままの形をしていた。
だが、三色の大理石の代わりに表面をおおっているのは、内部の照明を海底の暗闇にまき散らす蜂の巣のようにはめこんだ、無数のガラス玉だった。
まるで、スペインの建築家ガウディが、外装だけデザインしたサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂といった感じだ。
それが、海底の闇に宝石をちりばめた王冠のように輝いている。
息が切れてきたレミーは、イザベルに合図して浮上した。
海面に顔を出したレミーは、盛んに海底を指差し、真吾たちに叫んだが、波のうねりの音で

聞こえない。
……話すより、見せたほうが、早いわね……
レミーは、レーザー銃を抜くと、出力を低くして海の底へ向けて発射した。
海中を直進した光線は、ドームのガラス玉に当たると、まるで、オーロラのベールのように拡散し海底の大聖堂を浮かび上がらせた。
ゴンドラの真下に、ゆらゆらと蜃気楼のように大聖堂の巨大な姿が広がり、やがて、ゆっくりと消えた。
「あんなものが海の中に……」
茫然と海の底を見る真吾たちに、レミーは叫んだ。
「入り口を探すわ！」
海中に戻っていくレミーとイザベルの二人の裸身は、ほとんど海の城に帰っていく人魚のようだった。
「ありえんぞ……、この時代には……、絶対あるはずがない」
カットナルが、何度も首を振って言った。
「あれが、本当に人間の住む建造物なら、どうやって建てた。どうやって、中の人間たちは息を吸う？」
「地震かなんかで、海に沈んだ遺蹟じゃないのか？」
キリーが、アトランティスの伝説を思い出して言った。

「あの遺蹟は光ってたんだぞ。あの中に明かりがあるんだ。この時代に水で消えない明かりがあるかね……」
真吾が答える。
「空気があるってことさ……。人がいて明かりを使っているんだ。二十一世紀だって、あんな大きな海底の建造物はめったにない」
だれもが信じられないことだったが、今は、レミーたちの報告を待つしかなかった。

＊

「海底にセントエルモの灯とは奇妙な……」
カミーユが呟いた。
そこは、海底の建物の船着き場だった。
ヴェネチアの船着き場を出たカミーユとブンドルを乗せた、木製の天蓋をつけたゴンドラは、いつのまにか、海中に潜水し、この船着き場に着いていた。
どうやら、ゴンドラは木製の潜水艇のようなものだったらしい。
そして、カミーユが天蓋を開いて、船着き場に降りたとたん、壁のステンドグラスを、オーロラのような光が、数秒間走ったのだった。
レミーの射った、弱いレーザー光線が、ドームの表面を走るさまは、内側から見れば、まさに壁と天井が帯電したセントエルモの灯のように見えても不思議はなかったかもしれない。

「どうやら、あなたのお仲間の仕業のようですね」
カミーユは、かたわらにいるブンドルに聞いた。
ブンドルには、それが仲間のレーザー光線の影響であるのに気づいていた。
「わかるかね？」
「あなたと同じ悪魔の力と技術を持った人たちですもの。いつかここに気がつくと思っていましたわ」
「あなたは彼らをどうするつもりかね？」
ブンドルが聞いた。
「わざわざお招きはしませんが、ここに入ってくるなら拒みはいたしません。それよりも今はまず、私のお城をご案内しましょう」
レミーたちが近づいているのをさほど気にした様子もなく、カミーユはブンドルを船着き場の外に案内した。

＊

どんなに信じられなくても、目に見えたものは信じるしかない。
この建造物が、夢でも幻でもなく現実に存在するとわかったときから、レミーは、海底の建造物に、人間がいると確信していた。
ＳＦ的に異星人とか海底に住む未知の生命とかの考えが、頭をかすめないこともなかったが、

フィレンツェの大聖堂を思わす建物のデザインが、人間を感じさせた。

しかも、ルネッサンスを代表するブルネッレスキの設計そのもののドームを持っているとなれば、人間以外のだれがこの建物を考えだすことができるだろう。

水の中にあることをのぞけば、美術・建築史を少しでもかじっているものなら、だれでも、設計された時代をルネッサンス期だと言いあてることができるはずだ。

何の目的か知らないが、ルネッサンス期の今、この建造物は現役バリバリの建物ということになる。しかも、灯りが点いているということは人が住んでいる。

どこかに人が生きるための空気の吹き込み口があるはずだ。

レミーは、建物の周りを注意深く見詰めた。

そして、内部からの灯りに照らされて、盛んに白い泡を吹き出している場所があるのに気づいた。

……あそこだ……。あそこから空気が出ている……

レミーはイザベルに合図して、いったん海面に出て息を吸いこむと、今度は一気に泡の出所へ潜っていった。

*

「なかなかによくできている……。この時代にこれほどのものを作るとは……」

海底の城の通路を通りながら、めったに誉め言葉を洩らさないブンドルが、思わず呟いた。

どうやら地下に向かっている通路の壁は、一見大理石のように見えるが、実は岩塩でできていた。

「湿気を防ぐためです。空気は、風の力を利用した、陸上の風車で、ふいごを動かし、何本もの管でここに送り込んでいます。何でしたらこの城の設計図をお見せしましょうか？」

カミーユが言った。

「興味はあるが、海の中を走るゴンドラを見せられたとき、ここの仕組みのおおよそは見当がついた。おおむね、ギリシャ時代の潜水艦と海底都市の考え方を現実化したものであろう」

「古代のギリシャは素晴らしい時代ですわ……。あの時代から、人間の科学技術や哲学は一歩も進歩していません。この中世において、人間は進歩をするどころか、神という名の迷信を操る教会と一部の封建領主のために、後ろ向きに歩かされてきました」

カミーユの言うように、彼らは自分たちの時代をすでに中世という名で呼んでいた。もちろんそれは、近世、現代に対する意味の中世ではなく、人間という存在における中世……。中世の次は神による最後の審判が待っており、それによって、人間という生き物の存在が決定されるというのだ。

人々は、最後の審判のくる日を恐れ、神の代弁者である教会にすがり、ひたすら神におのが罪の許しを請うた。教会に金を出して免罪符を買い、自分の罪を許してもらおうとするのも、異教徒から聖地を取り戻すために何度も十字軍を送ったのも、人々に最後の審判への怯えがあったからといえる。そして、天変地異、疫病、災厄のほとんどが神の怒りの前触れと信じられ、

人々は、ただひたすら神にすがり許しを請い祈り続けた。

だから、この時代の人々の生活は、教会と密接に繋がり、生まれる文化も神を讃え恐れるものにしかならなかった。この世のすべてが神によって支配されているのなら、今のままじっとしているのがいい……。そんな空気の中で、科学や芸術が発達するはずもなかった。

科学や人間の真理を探ろうとする哲学の発達は、むしろ、神の教えに逆らうことになる。

神様が、地球が平らで、その周りを太陽が回っているといったのなら、どんなに、天体の運航を研究して、地球が太陽の周りを回っていることを確かめたとしても、神様が言ったのだから、地球は動いていないのだ。

ガリレオ以前にも、地動説を唱えたものはいたが、異端者として処刑されるとなれば、研究をすることとすら危なっかしい。

神の言葉の前では、真実さえ嘘なのだ。

そこに人間中心の自由な考えは不在だった。

その中世に、新しい風を吹き込んだのが、商業で富を得たイタリアの小都市群だ。

彼らの商取引に対する合理的で自由な考えは、土地にしがみつき神の許しを請う人々とは違っていた。

彼らは、表面上は神を恐れつつも、教会もまた、自分たちと同じように最後の審判という目玉商品をもつ神の言葉で、商売をしているのだと思うものすら出ていた。

彼らは、神を恐れるのではなく、神とともに生きようとした古代ギリシャの古典に見られる

自由な世界に憧れるようになった。
　こうして、ルネッサンスはまず古代ギリシャ・ローマの文化を模倣、研究することから始まった。
「そして、今、私たちは、模倣の枠を越えたのです。ギリシャ時代の科学者の夢を実現したのです」
　カミーユは微笑した。
「この城を作ることのできる天才がいたわけだ」
「今は、さまざまな天才の花開く時代です。けれど、神を恐れて、その才能に賭ける出資者はいない。もし神を越えるようなものを作り出せば、教会から破門され身の破滅ですもの……」
「それを覚悟で、あなたはやったのだね？」
「破滅などさせられるものですか。神はこの世に存在するかもしれません。けれど、今の教会にはいませんわ」
「しかしさぞや大工事だったろう。工事の人員は、どうやって集めたのだ？」
「アフリカは、奴隷の供給地です。港の街ヴェネチアは便利ですわ。人間を目立たずに貿易できますもの」
　アフリカ出身のケルナグールが聞いたら、逆上するに違いないことを、カミーユは言った。
　ブンドルは肩を竦め、
「この城については興味がつきぬが、今の私は、あなたの持っているというルネッサンスの美

とやらが楽しみだ」
「それなら、こちらへ……」
カミーユは、通路の扉を開いた。
そこは、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の堂内もかくやと思われるほどの大広間だった。
「これが、海底の空間？」
「いいえ、もうここは、海底の岩盤の下に作った洞窟です。もちろんここも壁は岩塩を張り巡らしてあります。あの城は、海底に作った港にすぎません。もっとも、この洞窟に、あの港以外の出入り口は、空気穴しかありませんけれど……」
「外からの通路は、海だけなのか……」
「この洞窟の存在は、あまり知られたくないのです。入り口に華麗な飾りをつけておけば、それが見つかったとしても、その城だけ壊せば、まさか、その奥に、本物が隠されているとはだれも思わないでしょう？」
ブンドルは、答えなかった。
海底の城と洞窟の仕組みよりも、さらに興味を引くものが、ブンドルの声を黙らせたのだ。
それは、山のように置かれた、絵画と彫刻だった。
どの作品も、二十一世紀に世界各国の美術館を回り、ルネッサンス期の芸術をむさぼり見て、買い集めようとさえしたブンドルの記憶にないものだった。

だが、作品を見れば、その作風で、それがだれが作ったものか見誤るブンドルではなかった。
「ジョット、マサッチオ、ドナテルロ、ブルネッレスキ、ギヴェルティ、リッピ、アンジェリコ、フランチェスカ、ポライウォーロ、ヴェロッキオ……」
ルネッサンス期の代表的な作家の名を口ずさむブンドルの呟きはきりがなかった。
そして、ボッティチェリ、ミケランジェロ、ダ・ビンチ、初期のラファエロを思わせる絵画……。ここにある絵画彫刻の数だけで、ルーブル美術館が、二つは開設できそうな量だった。
「目眩を起こしそうだ……」
ブンドルは溜め息を洩らした。
「さすが、ここにあるものの価値がおわかりですわ、ブンドルさまには……。これらの芸術品は、今のフィレンツェには置いておけないものばかりです」
ブンドルもそれに気がついていた。
ブンドルが記憶しているルネッサンス期の作家の作品は、ほとんどが、聖書を題材にしたものや、権力者の肖像画、それ以外にあったとしてもギリシャ神話の登場人物か、国威を高揚させる戦争画だった。
だがここには、そんな作品はほとんどなかった。
聖母マリアのイメージで、美しいとされた、女性の身籠もったスタイルはほとんどなく、あってもそれは生々しい裸体画だった。
清らかな聖母画で知られるラファエロに、男女のからみあった春画まがいで猥褻ぎりぎりの

絵があるなど、聞いたこともなかった。だが、ブンドルの目の前にある絵は、確かにラファエロのタッチだった。
「どれもこれも、教会を刺激し顰蹙を買う作品です。あの堅物の僧侶サヴォナローラなら焼いてしまえと絶叫するかもしれません」
確かに数年後、カミーユの言ったことは事実になる。
……神を冒瀆する作品を焼き払え……
というサヴォナローラに扇動されたフィレンツェ市民は、先を争って街中からそんな作品を探しだし、広場で燃やし続けた。
そのとき、焼かれたルネッサンス美術は、想像もつかないほど膨大だったという。
レミーたちが、ヴェロッキオの工房で巻き込まれたようなことが、大規模に行われたのだ。
「でも、私は、これらの作品が、芸術として優れていると思っています。違います？」
「確かに……」
ブンドルは頷いた。
ブンドルが二十一世紀に見た同じ作家の作品でありながら、どの作品もここに置かれたもののほうが、奔放で自由で、創作の輝きに満ちているように思えた。
「ここにあるものが、もしかしたら、彼らの本当に生み出したかった作品かもしれませんわ。私は、こんな芸術を守り育てるために、ブンドル様、あなたと手を組みたいのです。この世界に本当の美の帝国を作りたいのです……。そのためなら、悪魔とも喜んで手を握りますわ」

「すっかり私は、悪魔にされてしまったようだね」
「その時代に似合わない異質な存在は、いつでも悪魔と呼ばれるものですわ。もっとも、本当の悪魔はそれを言われても喜ぶだけでしょうけれど……」
「あなたもそうなのかな」
「さあ……、いずれにしろ悪魔は美しいものが好き……。違いますこと？」
カミーユは、微笑みかけた。

＊

「ふーっ」
レミーとイザベルは、息を吸い込むと、にっこりと笑いあった。
吹き出す泡を目当てに飛び込んだ城の水路は、思ったより長く、海底の船着き場の水面に顔を出したとき、レミーとイザベルの息は、ほとんど切れかかっていた。
「どうにか生きてる」
レミーは腕時計の通信機で海上の真吾たちに連絡した。
「お近くのゴンドラに気をつけて……。うまく乗っ取れば、キリーも溺れずにここまで潜ってこられるわ」
潜水式のゴンドラの仕組みは、船体の底から見るとおおむね理解できた。
大きな、金属製のフックがついていて、鉄の鎖と嚙み合っている。

鎖は、船着き場の奥の巨大な歯車に繋がっていた。
どうやら、ゴンドラは、自力で、ここまで潜ってくるのではなく、鎖で引っ張られてくるようだ。潜水艦というより、ロープウェー……、文字どおり水中のゴンドラだった。
「ほとんど、ディズニー・ランド、ルネッサンス版ね」
そう呟いたレミーは、ふっと、レオナルド・ダ・ビンチの名を思いだした。
芸術家であるとともに非凡な科学者でもあったダ・ビンチは、奇妙な機械の設計図をたくさん後世に残している。
もし奇特なスポンサーが現れ、研究にお金を出し、それが現実化されれば、人類の科学技術は、二百年は先に進歩していただろうといわれるほど、理論的に確かなものが多かった。
だが、当時の世界は、ダ・ビンチの美術的天才は認めても、科学に対しては、まったく無視の態度をとった。
神の力を万能だとする世界で、科学技術は、異端な魔術と決めつけられ、黙殺されることが多かったのだ。
もし、ダ・ビンチに美術的な才能がなかったら、歴史にその名はほとんど残らなかっただろう。
この時代、ダ・ビンチに匹敵する科学的な才能を持ちながら歴史に名を残せなかったものが数多くいたのかもしれない。
いや、もしかしたら、ダ・ビンチ本人が、この城の設計者なのかもしれない。

「ま、そんなことは、先にいってわかればいい」
レミーは、肩を竦めた。
……とりあえずは、ブンドルの生死を確かめなければ……
イザベルのベルナルドに対するひたむきさを見ていて、……別にイザベルに対抗しているわけでも、ブンドルを愛している気もないのだが……、自分も、仲間のブンドルにたいして、やたらとひたむきになってしまうのが、なんだか照れ臭かった。
レミーとイザベルは、停泊している数隻のゴンドラの間をぬって、船着き場の大理石でできた岸壁に近づいていった。
岸壁には、数人の僧侶姿の男たちが、ゴンドラの積み荷を降ろすのに忙しくたち働いている。
積み荷の覆いを解くと、そのほとんどが、裸婦の彫像だった。
岸壁にずらりと並んださまは、ギリシャ伝説のレスボスの島を思わせた。
「傑作ぞろい！……」
レミーは茫然と彫刻群を見詰めた。ブンドルが、大広間の芸術を見て感じためまいのようなものをレミーも感じていた。
ギリシャのどんな遺蹟にも、これほど整った姿の女性たちの集団を見たことがなかった。
しかも、その顔は、それぞれ喜び怒り哀しみ泣き、さまざまに美しい女性の表情の一瞬をとらえている。
そして、それは、生身の人間よりも生き生きとして見える。

こんな彫像を見せられたら、自分の作った彫刻を愛してしまったという元祖おたく族のピグマリオンの言い伝えも信じられるような気がする。

……いったいだれが、こんな彫像を作りえるのか……。ミケランジェロ？……そう、ミケランジェロだ……

レミーは、ほとんど確信した。

この生々しい人間の感情表現の作風は、ミケランジェロしか考えられない。

だが、レミーの知るミケランジェロに、これほど表情豊かな女性像はなかった。

まるで、女性の感情を描くのに興味がないかのように、ミケランジェロの作る女性像は、ピエタのマリアにしろ、ドーニ家のマドンナのマリアにしろ、厳粛で冷たく悲しげだった。

レミーは、ミケランジェロの描く女性を見て、いつも感じたものだった。

……すごいとは思うけれど……。女って、やっぱりこうじゃないと思う……

何だか、突き放されているような……、作家が、描いている女性を、冷たい目で観察はしているが、ちっとも愛してはいない気がするのだ。

レミーが、ミケランジェロの描く女性を見るたびに悲しくなるのは、作家が女を見詰める視線の冷たさを、さみしく感じるからだった。

でも、今、岸壁の上にある彫像群は違う。

作家の暖かい賛美のなかで輝いて見える。まるで、生身の女性が、だれかから愛されていると感じると、自然に美しくなるように……。

これが、ミケランジェロの作ったものだとすれば、今までレミーが二十一世紀に見たミケランジェロの女性はなんだったのだろう……。
ふと、レミーは、メディチ家の宮殿であったミケランジェロの言葉を思いだした。
「女の体は真っ平です。私の指がそういっている」
もしかしたら、ミケランジェロは、女性を彼なりにもう描きつくしたのだろうか……。
それとも、女性に対する計り知れない絶望が、ミケランジェロに女性に対しての愛情を失わせたのか……。
そのときだった。
一艘のゴンドラが浮上して、船着き場についた。
「レミーさん……、彼が……」
イザベルが、声をつまらせながら言った。
ゴンドラから男たちに連れられたベルナルドが降りていく。
男たちの中の二人は、イザベルをつけていた男たちだ。
「今、ゴンドラがそっちに行ったか？……」
通信機から真吾の声がした。
「取り込み中になりそう……。通信機、しばらくさよならするわ……」
レミーは、腕時計のスイッチを切った。

＊

「取り込み中だそうだ……」
真吾がキリーに通信の切れた腕時計を見せて肩を竦めた。
キリーが、さっきまで小さく見えていたゴンドラが、いきなり消えた海の一点を指差して呟いた。海のうねりのなかでは、注意してみていなければ、気がつかない一瞬の出来事だった。
「あのあたりだな。海の城に行く道があるのは……」
「ああ、あそこにたぶん、ゴンドラを引っ張っていくケーブルがあるんだろう」
キリーは腕を振って、泳ぐ真似をして言った。
「取り込み中に参加しようぜ……」
「海の中だぞ」
「泳げないおれにしてみりゃ、上の小舟も海の中も、どんぱちが起こりゃ、危険は同じさ。少なくともあっちにゃ、空気もあるし、なにより堅い地面がありそうだ。ここでぼんやりしているよりはましってもんさ」
「沈んでいった先に空気があるんなら、浮かんでこなくてもいい。今回運動不足じゃで、わしも行きたいのう」
ケルナグールも拳(こぶし)を握って言った。
「見張りだけなら、おまえだけでもできるじゃろう」

腕時計を、カラスの首にかけてカットナルが言った。
「なにかあったら、三回鳴け……。鳴いてもこっちは海の底、何もできんがね……」
カラスは、水に入れないのが恨めしそうに、カア〜と鳴いた。
「ＯＫ……しかし、今回のおれたちは、どこか慎重さが足りない……。行き当たりばったりだな」
真吾が苦笑した。
「どうせ行き当たりばったりでこの世界に流れ着いたんだ。その場、その場の命懸けもリラックスしてやりたいぜ」
キリーは、自分自身を突き放したような達観した笑いを浮かべた。
「頼みもしないのに、巻き込まれた状況じゃからな……。うじうじ考えるのは面倒臭くなったわ」
カットナルが肩を竦める。
「わしはもともとぐずぐず考えるのは苦手じゃけ……。気に入らんことは、勝つも負けるも拳で決着をつけたいわい」
彼らの気持ちは久しぶりに高揚してきた。
……一度死んだ命、二度も死んでたまるか……
それが数々の死線を越えてきた、今までの彼らの気持ちだった。
だが今は、

……一度死んだ命、二度も殺すやつはこちらからやっつけてやる……

彼らは、得体の知れぬ何かの力で、無理やり、時空を流されている自分たちの生きざまに、辟易していた。もう、我慢の限度は越えていたのかもしれない。

……たしかにおれは、金槌だ。だが溺れる前に水槽をぶち破ってやる……

キリーの思いは、同じ波長で、みんなの気持ちに広がっていた。

*

……あなたたちと、ご一緒させてもらって恐縮ですけど……

レミーとイザベルは、岸壁に立つ裸女の彫刻群の中に紛れ込んだ。

冷たい海から出た二人の裸の肌は、大理石の彫像の色と変わらぬほど青ざめていた。髪さえ、気にしなければ、ほとんど他の彫刻と違いがわからなかった。

しかし、いくら裸女の像が多くても、裸の二人が、動きだし立ち回りでもしたら目立たないはずがない。……それに、生身の人間にこの寒さは、長くは我慢できない。

やがて、僧侶姿の男たちは、彫像をベルトコンベアのように動く運搬機に、一体ずつのせ始めた。

ベルトは、船着き場の壁の穴を通りぬけ、彫像を中に運び込んでいく。

しだいに男たちは、レミーの立っているところに近づいてくる。

ベルナルドを連れた男たちは、奥の通路に姿を消している。

レミーは、男たちの数を数えた。十五人……。
どう逃げたところで、遅かれ早かれ、レミーたちの潜入は気づかれてしまうだろう。
レミーは、レーザー銃を抜き、相手が気絶する程度に出力目盛りを低くした。
十五人を気絶させても、だれかがこの船着き場の様子を見れば潜入はわかってしまう。
しかし、考えてみれば、レミーたちは潜入しようとしたわけではなく、問答無用で突っ込んできたのだ。
どうせ、行き当たりばったりなのだ。
それに、十五人の男たちの原因不明の気絶は、この城の住人に得体の知れぬ恐怖感を与えるかもしれない。
パニックでも起これば、なおさら好都合だ。
レミーの体を彫像と思い込んで、ろくに見もせずにラフに担ぎあげようとした男たちにレミーは言った。
「よく見て……。女の子って、それぞれ、違った魅力があるものよ……」
!……彫刻が喋った?……
仰天した男たちに、レーザー光線が浴びせかけられた。
男たちをあっという間に気絶させたレミーとイザベルは、倒れた男の服に着替えようとした。
だが、男たちの服は、帯電して、触れると火花が散った。
通路から人の声が近づいてくる。

「服は後で、女の子向きを見つけましょう」
レミーはイザベルの手を引くとベルトコンベアに飛び乗った。

＊

幾重にも錠のかかった鉄の扉がゆっくりと開いた。
さっきの広間よりも高い天井の大広間だった。
「ここが、私の工房のひとつです」
ブンドルを案内してきたカミーユが言った。
その中央に、骨組みだけの巨大な四角い建物が建てられていた。
床には、僧侶の形をした人形が置かれてあった。
カミーユは建物の傍に立っている、顎髭を生やした中年の男に声を掛けた。
「レオナルド、仕掛けが完成したそうですね」
男は見向きもせず、ぼそりと答えた。
「完成させたのは、わしではない。おまえさん、わしの粗大ゴミ圧搾処理機の設計図を、よくもこんなものに変えてくれおったな」
「ゴミを処理するのは同じですわ。教皇というゴミをね……」
「教皇？」
ブンドルが眉をひそめた。

「この建物は、バチカンのシスティナ礼拝堂の二分の一の模型です。レオナルド、実験して見せてください」
「おまえさんが作らせたんじゃ。おまえさんがやればいい」
カミーユは肩を竦めた。
「天才は気難しい……。もっともそこが可愛いのですけれど」
ブンドルは、男をじっと見詰めて聞いた。
「失礼ながらあなたが、レオナルド・ダ・ビンチ殿か？」
その声には、いつになく緊張した感じがあった。
ブンドルが歴史上の人物の中で尊敬している数少ない人の一人だったからだ。
モナ・リザ、そして、イエス・キリストがユダの裏切りを示唆した瞬間を描いた名画、最後の晩餐の作者……。なにより、ブンドルの名前のレオナルドは、ダ・ビンチのような万能の天才になれという両親の願いをこめてつけられたものだった。
「いかにも、わしはレオナルド・ダ・ビンチじゃ……、つまらんからくり師のな」
カミーユは微笑みを絶やさず言った。
「つまらないからくり師？　そんなに謙遜なさらないでもよろしいでしょうに……。この城も、実はレオナルドの設計ですのよ」
「頭の中の理屈も、それを形にした模型も、現実に実物を作らねば完成したといえない。それを実現させるためには膨大な金がいる。金をだすスポンサーが必要じゃ。あんたは、わしの研

究にとって手を差し伸べてくれた天使に思えた。だが、天使のささやきが悪魔の誘いだったとはな……。わしはこんなことに使うために粗大ゴミ圧搾機を作ったわけではない！」

ダ・ビンチは、傍にあるレバーを蹴り飛ばした。

大広間を揺るがす轟音がした。

骨組みだけの建物の天井が、そのまま落下し、僧侶の人形を押しつぶした。

カミーユは、顔色ひとつ変えずに言った。

「上々の出来ですわ」

「吊り天井か……。これをシスティナ礼拝堂の天井に仕掛ける？」

ブンドルが呟いた。

「あの礼拝堂の天井には天地創造の絵を描く計画があるのです。そのときこの天井を仕掛ければ、どんな教皇が就任しようが、その命は私の意のまま……。それに、この仕掛けは、どこの教会にも使えますわ。どこの教会の天井にも、最近は、神や天使の描かれるのが流行です。もし、その天井が、僧侶のうえに落ちれば、人々は、腐敗堕落した教会に神の怒りが下ったと思うでしょう。今の時代は教会を操れば、世界を操るも同じこと……。私の意にそわぬ教皇や僧侶がいれば、神の怒りが下る」

ダ・ビンチは吐き捨てるように言った。

「神も悪魔もないわい。教会も科学も扱う人間次第じゃ。人のためを思って設計した粗大ゴミ圧搾機……、人をつぶせば殺人機械。人間にとって、まこと科学は鏡のように裏表じゃ。使う

人間次第で、鏡に写ったような裏の使われ方をされたら悪魔の道具にすぎぬわい。いや、待てよ……。鏡に写った人間の心こそ、裏の心に見えて実は本当の人間の姿かもしれんな」
ダ・ビンチは、手鏡を取り出し自分の顔を写しその場に座り込んだ。
そして、ぶつぶつと呟いた。
「これは深遠な問題だ。鏡の中のダ・ビンチよ。おまえとわしとどちらが本当のダ・ビンチなのか……」
さっきまでの怒りが嘘のように、考えに熱中している。
カミーユはいとおしそうにダ・ビンチを見詰めて、ブンドルに言った。
「鏡の中の世界こそ真実の写し絵……。これが、レオナルドの永遠のテーマですわ。このことを考えだすと、周りが見えなくなる。すべての思いをそこに没頭させる。これが天才です。ここには神も悪魔もない。考える人がいるだけです。素晴らしいことだと思いませんか？」
「私に哲学の講義をするつもりかね？」
「悪魔に哲学などありませんわ……。あるのは実践です。私はこういう天才たちに、教会や権力者の言いなりにならずにすむ自由な創作をさせたいのです。そんな世界をこの世に作りたいのです」
「その理屈、こんな殺人機械を作らせても通るのか？」
「ダ・ビンチは、粗大ゴミの処理機を作ったのです。作ることに意味があったのです。生み出すことに意味があるのです。それが、何に使われようと恥じることはありません。それは使う

人間の責任です。作った人間の責任ではありません。私も、この計画を終えたらば、人間でない、文字どおりの粗大ゴミを潰すために、この吊り天井を使いたいと思いますもの」
カミーユは壁に備えつけられてある照明用の燭台を手に取った。
「ごらんなさい。この炎……、人間が手に入れたもっとも美しいものの一つですわ。人を照らし、人を暖め、美味な料理を作り、そして、人を焼き殺しもします。今、だれが、この炎を手に入れた最初の人間を恨みます？　私は愛しています。炎を最初に手にした人は、おそらく神よりも偉大な存在です。その人はこの世界で、最高の科学者であり芸術家ですわ。人間に炎を授けたというギリシャ伝説のプロメテウスは、神から厳しい罰を受けました。でも私は、そんな神の世界なら破壊します。人間が自由になんでも思いのままに創作できる世界が、私の作りたい世界なのです」
カミーユは、完全に自分の言葉に酔っているようだった。
そのときだった。
大工房の隣の扉が荒々しく開かれた。
「こんなところで、思いどおりの創作ができるか！　玩具造りの職人め！」
のみと槌をもった男が、血相を変えて入ってくる。
そして、鏡を見ながら座っているダ・ビンチの胸ぐらを掴んで、引き摺り上げた。
ブンドルの知っている顔……、ミケランジェロだった。
さらに絵の具のついた筆を持ち、樽のように腹の出た中年男がよたよたと入ってくる。

「さっきの振動で、私ののみの刃先が狂った。誤って削り落とした彫刻の鼻をどうしてくれる！」

とミケランジェロが喚く。

「そのままにしておけばいい。喧嘩で殴られてまがったというおまえの鼻と似合いではないか。事故だと思え……。しょせん、彫刻……、くそリアリズムの三流の美術に目くじらを立てるな」

ダ・ビンチの言葉に、ミケランジェロはわなわなと震えた。

「私の鼻のことは許しても、彫刻の三流扱いは許せん！」

「存在するものを石に置き換えただけの彫刻など、単なる写し替えの技術にすぎん。芸術とは、現実をただ写すだけでなく、一つの世界を作品の中に描くことだ。彫刻で世界が描けるか……。この世で、世界を描けるものは、絵画をおいてない」

「何を看板屋……。世界を描くに最高の手段は彫刻をおいてない。こんな玩具を作っている暇があったら温泉の風呂場の書き割りでも書いておれ！」

たちまち論争が始まった。

ダ・ビンチの絵画至上論とミケランジェロの彫刻至上論が、互いの仲を気まずいものにしていたのはよく知られている

一見美男子だったダ・ビンチに対して、若くして喧嘩で鼻をつぶされたミケランジェロが顔の差をひがんで、芸術論争をふっかけたという、うがった説まであるほどだ。

いずれにしろダ・ビンチとミケランジェロというルネッサンス期が誇る希代の天才の論争である。ブンドルにとしては、耳をかたむけたい論争だったが、喧嘩となれば口から先に生まれたと言われるイタリア人である。売り言葉に買い言葉、先祖のことから関係した女性のことまでまくしたて誹謗しあい、なかなか芸術論までいきつかない。

太った男が情けなそうに言った。

「さっきの振動で、わしの絵もデッサンが狂っちまったんだがなあ」

「黙れ！　大衆におもねる通俗猥褻美人画屋が出る幕か……」

ミケランジェロが、突っぱねるように言った。

「そうとも。おまえの絵に比べたら、ミケランジェロの彫刻のほうがまし。おまえなんぞ、存在自体のデッサンが狂っとる。この酒樽野郎！」

ダ・ビンチが、畳み掛けた。

酒樽とは、ボッティチェリ……。当時の画家はあだ名で呼ばれることが多かった。いうまでもなく「ビーナスの誕生」の作家である。

ボッティチェリは顔色を変えた。

「名前のことはなんとでも言われましょう……。しかしデッサンが狂っているとはなんです！猥褻美人画とはなんです！」

たちまち三つ巴の論争になった。

もうひとつの扉の前では、整った顔の少年が、おとなびた笑いを浮かべて、冷ややかに言っ

た。
「あ〜あ、また喧嘩か……。これじゃあ勉強になりゃしないね。せっかく、大御所たちのテクニックをいただこうと思ったのに……。ま、盗むに値するほどのもんじゃないけどな……」
「なに〜？」
ダ・ビンチたちが少年を睨んだ。
「あ、聞こえました？」
「おまえのような小僧にわしらの真似ができてたまるか！」
ボッティチェリが鼻でせせら笑う。
「あ、お言葉ですけれどね……。おじさんたちの考えている芸術に対する考えってちょっと古いんじゃやない？　だいたい真実を描くとか世界を描くとか、ご大層なんだよ。絵はね、感情の爆発なのよ。美しい女性を見る。抱きたいと思う。その熱情をいかなる方法で絵の上に現すかが大事じゃないの？……あ〜あ、嫌だ嫌だ。歳は取りたくないな……」
ボッティチェリが喚いた。
「ませた餓鬼は、お家で塗り絵でも書いていろ！」
「才能に歳の差はないでしょう。このラファエロ……、あんたたちより若いだけ、傑作を生み出す可能性はある。それとも、おじさんたち、ぼくに誇れる傑作はある？」
ラファエロ……、ダ・ビンチ、ミケランジェロに並び評されるルネッサンスの天才だ。
確かに、ラファエロの言うように、この十五世紀末には後世に残る作品を、まだ、ダ・ビン

チもミケランジェロもほとんど作り出していない。
油の乗り切るのは、もう少し後の時代だ。
もっとも、ラファエロも習作しか残っていない少年時代だ。
ボッティチェリの作品は大衆受けはしていたが、その華麗さが、識者の反発を買っていたし、ボッティチェリ本人も、華美に飾りすぎる自分の作風に迷っていたという。
しかし、自分の子供ほどの少年に面と向かって言われると腹が立つ。
「来るがいい。わしらが小僧に芸術とは何か教えてやる」
「口なら負けないよ」
論争は四人になりさらにけたたましくなった。
それぞれ、一家言を持っているからだれも妥協しない。
カミーユは微笑んでから溜め息をついた。
「こうなったら、三日は続きますわ。もう、吊り天井も、壊した彫刻も彼らの眼中にはない。
……あるのは自分の考えの正しさを、相手を押さえつけてでもわからせること……。そこがまた可愛いのですけれど……」
「あなたもそうではないのかな？」
ブンドルが言った。
「私が可愛いということかしら」
ブンドルは、ゆっくりと首を振った。

「いいや……。自分の考えの正しさを、相手を押さえつけてでもわからそうとするところ……。あなたの考えが、間違っているとも言いきれんがね」

カミーユは、肩を竦めて言った。

そのときだった。僧侶の一団が、駆け込んで来ていかにも怯え切った様子で、カミーユに言った。

「船着き場で奴隷どもが気を失っておりました。それも十五人みんながです。きっと悪魔の仕業です」

「落ち着くのです。悪魔がその気になれば、奴隷どもが気を失うぐらいでは済まないでしょう。探しだして、丁重に私の広間にご招待するのです。おとなしくしていただけないのなら、ベルナルドを使いなさい。おそらくご入魂の仲でしょうから……」

僧侶たちに命じた後、カミーユはブンドルに言った。

「さすがですわ、お仲間はとうとうここまでやってきました」

「僧侶まで仲間か……」

「腐敗した今の教会です。サヴォナローラのような狂信的に神の言葉、聖書にかぶれる男もいれば、金を神と崇める僧侶もいます。どちらも、何かことを起こすときは、悪魔から善人善女を救え……。大義名分決まり文句さえあれば、少しの金で下っぱの僧侶など、どうにでも動きます」

「それで、潜入した私の仲間をどうするつもりかな？」

「失礼ながら、フィレンツェの町であの方たちの持つ力を、ずっと試させてもらいました。あなたのお仲間は私たちの攻撃を切り抜けたばかりか、なりゆきでサヴォナローラの暴徒からベルナルドを救いだす手伝いまでしていただきました。しかもついには海底のこの城までおいでになられましたわ。私、実力のある悪魔とは、どなたとでも契約しとうございます」
「本気で悪魔と思ってはいまいに？」
　カミーユは微笑した。
「さあ、どうでしょうか。私、悪魔というものをこの目で見たことはありませんから……。いずれにしろ、あなた方の狙いは、この世界の征服なのでしょう？　悪魔のようなものですわ」
「そう思うのかね？」
「でなければ、雷のような武器を持ってくる意味がわかりませんわ。武器は相手を平伏させるものですもの」
「必ずしもあなたと手を組むとは言い切れまい？」
「言い切れぬか、言い切れるか。決めるのは、早過ぎますわ。私にはまだ、お見せしたいものがありましてよ」
　カミーユは、ブンドルの先に立って工房を出て行った。

＊

彫像とともにベルトコンベアに乗ったレミーとイザベルは、狭い通路を運ばれていく。

船着き場に近づいてきた人声からすれば、もう、レミーたちの潜入は気がつかれているはずだ。ベルトコンベアの出口には、お迎えがわんさと待ち受けているかもしれない。

レミーは、イザベルの盾になるようにして、ベルトコンベアに寝そべると、レーザー銃を水平に構えた。

前方が明るくなる。

出口だ。

ベルトコンベアが止まる。

僧侶姿の男たちが待ち構えている。

レミーは引き金の指に力を入れた。

手に手に武器を持っているが、みんなへっぴり腰だ。

「魔女よ、おとなしくしてくれ……。カミーユ様がお会いしたいと言っている」

脅しにしてはおどおどと怯えた声で、僧侶が言った。

だが、僧侶の一人が、ベルナルドに剣を突きつけている。

「こいつの命を助けたければ、おとなしくしてくれ」

すがるような声で言う。おそらく、レミーたちを魔女と思い込み、恐くて仕方ないのだ。

……こりゃあ、駆け引きのやりようがあるかも……

一瞬そう思ったレミーだが……、

「イザベル！」

ベルナルドが僧侶たちを振り払って、前に出た。
「ベルナルド！」
ベルトコンベアから弾かれるように裸のイザベルが立ち上がり、ベルナルドに駆け寄る。
そして、抱き合った。
二人には、剣の障壁などまるで目に入っていないのだ。
いきなりの出来事に僧侶たちは茫然となり、二人を取り囲むだけで手も出せないでいる。
「あ痛……。人質が二人になっちゃった」
レミーは銃を降ろすと僧侶たちに言った。
「おとなしくしてあげる。その代わり、服を用意して。魔女だって風邪を引く。お風呂があれば、もっといいんだけど……」
ついでに付け加えたつもりの言葉だったが、
「は、はい……。ただちに用意いたします」
気味の悪いほど従順な返事が返ってきた。
僧侶たちは、彫刻の裸女の中から、まるで息を吹き込まれたように動きだしたレミーたちを、ほとんど魔女だと信じ切っていた。
少なくとも表向きには貞操観念でがちがちに固まったこの時代に、男たちの真ん中で、彫刻とみまがうような整った裸身を恥ずかしがりもせず、自分の言いたいことを言う女など、魔女以外思いもつかなかったのだ。

僧侶たちは、あたふたと二人を地下の一室に案内した。
そこは、黄金造りの大きな浴槽と、控えの衣装部屋には、一万着を超える衣装のあるカミーユの着替えの間だった。
レミーはあまりの豪華さに溜め息をついた。
服を選ぶだけで一週間はかかりそうだ。
どの衣装も一度は着てみたい気がしたが、今後を考えて、できるだけ軽そうな服を選んだ。
それでも衣装にちりばめられた宝石の重さで肩がこりそうだった。

*

「これが、私がこの世界を思いのままに動かせる決め手です」
カミーユは、ブンドルを、ガラスのフラスコのようなものがずらりと並んだ部屋に通した。
「何かの実験室かな?」
ブンドルが聞いた。
「実験の段階は終わりましたわ……。ここに並べられた、ガラスの器具を作るためにも、ガラスの産地ムラノ島を持つヴェネチアが好都合でした」
カミーユは、手袋をつけて試験管のようなものを取り上げた。
無色の液体が入っている。
「この中に何が入っているとお思いです?」

「悪魔好みのあなただ。美味なワインというわけではあるまい」
「悪魔のワインですわ……。配達するのは、可愛い悪魔の弟子」
カミーユは、籠の中に飼われているはつか鼠を摑み上げブンドルに見せた。
「ご安心ください。まだこの子は悪魔のワインを持っていませんわ」
ブンドルは試験管の中身がわかった。
そして、カミーユという女に呆れた。
ブンドルはうめくように言った。
「黒死病か……」
「さすがにおわかりですね」
カミーユはこともなげに頷いた。
黒死病……、ペスト……。西洋史の中で最も恐れられた伝染病だ。十九世紀の末、ペスト菌が、北里柴三郎とA・E・J・エルサンによって発見されるまで、その原因がわからなかった。
中世の人々は、統治者の圧政や異民族の侵略よりも、黒死病の流行をなにより恐れた。人間の力で避けることのできない死が、年齢、男女、身分の分け隔てなく襲ってくるからだ。
黒死病が流行したら、人々は部屋に閉じこもり、神に祈るしかなかった。
「逃れられない貧困と黒死病が、中世の人々の間に神への忠誠を根づかしたのです。黒死病を操ることができれば、それは神の力を手に入れたことになります」
「あなたは、それを手に入れた？」

「メディチ家が、薬屋出身なのはご存じでしょう？　黒死病の治療は、薬を研究するものの永遠のテーマですわ。でも、これは、教会にとっては痛し痒しです。黒死病が治るようになれば、神を恐れ敬うものが減る。かといって信者が黒死病で死にすぎては神への献金が減る。だからといって、神が人々の命を奪う黒死病の対策を止めろと言うはずがない。教会にとって、黒死病は、流行りすぎても困るし、たまには流行ってくれなければ困る病気なのです。ですから、薬屋は教会といつも深い繋がりがありました。これは、中世の教会の最大の秘密のひとつです。メディチ家がここまで繁栄できたのは、歴代当主の商売の才能もありますが、最大の秘訣は教会の力を巧みに利用したからなのです」

「あなたはそれで飽き足らなくなったわけだ」

「メディチ家は教会の願う、お茶を濁すような黒死病の研究はしませんでした。教会には秘密にして徹底して黒死病を研究しましたわ。そして治療法こそまだわかりませんが、病気の原因になる小さな生きものとそれを運ぶのが、鼠や蚤だということを見つけだしたのです。私たちは教会がどうすることもできない悪魔を見つけたのです」

「悪魔で教会を牛耳ろうというのか？」

「しょせん、今の教会は腐敗という悪魔が蔓延しています。黒死病を利用して権力を守ろうとする教会のどこに神がいるのです？　それに、教会の語る神は、戒めばかりを振りかざし、人間の自由を束縛するものです。メディチ家が育てた新しい文化と相反するときが来て当たり前ですわ。そして今まで巧みに教会と駆け引きしてきたロレンツィオが死んだ今こそ、そのとき

です。教会は、大きくなりすぎたフィレンツェとメディチ家の富を狙い、潰しにかかるでしょう。けれどそれは、メディチ家にとっても、教会にとって代われる千載一遇の機会なのです」
カミーユは、ブンドルに微笑んだ。
「おわかりいただけました？　私のやりたいことが……」

＊

広間の長椅子に腰を降ろしたブンドルは、カミーユからワイングラスを受け取り、ふっと深い息をついてから言った。
「確かに、あなたのやりたいことをするには、今は千載一遇の機会かもしれない。あなたは、今の状況をどう分析したのかね？」
カミーユは広間の中央にある大きな地球儀を、玩ぶように触れながら言った。
「今、メディチ家が育てた新しい考え方の影響で、教会内部でも腐敗に対する批判が起こり始めています。ルターやカルバンを代表とする、宗教改革を唱え始めた北の僧侶どものことですわ。フランス、スペインなどの君主制の国は、自国の領土を広げようと躍起になっています。イギリスなど、あからさまに、ローマ教会を無視する動きが出てきています。教会の力が地に落ちる日もそう遠くないでしょう。しかし、そうなってからでは遅いのです。教会という文化の世界を一つにまとめる精神的なものがばらばらになってしまう。そうなれば、この西の世界は、終生一つにまとまることはなくなるでしょう。今、世界の人々の心をまがりなりにも一つ

にまとめているローマ教会の力が残っている今のうちに、教会を乗っ取り、黒死病の恐怖を借りて世界を一つにする。そして教会が私たちの芸術を神の芸術と認めれば、世界は、美の帝国になります。私たちの芸術を否定するものが現れれば、そこに神の怒り、黒死病が襲います」
「ずいぶん、ロレンツィオの見た夢とは違う展開だね」
「あの人の夢は夢にすぎませんわ。確かに異教徒の国の芸術は素晴らしい。でも、異教徒の国には違う神がいる。どこの神も身勝手で我儘です。他の神を認めはしません。神と神が手を繋ぐことなどありえません。わたしの芸術と彼らの芸術が融合するとしたら、それは、どちらかの神が、相手を力で屈伏させたときです。残念ながら、科学の力においても兵力においても西の国々が、東を屈伏させる力はありませんわ。まず足元を固めるべきです」
「では、ロレンツィオが企てた、異教徒の国に送り込もうとした娘たちはどうなったのだ？」
「今ごろは、異国に嫁入りではなく、異教徒の慰み用の奴隷として売られているかもしれませんね」
「イザベルはどうするつもりなのだ？」
「前にも言いましたでしょう？　私の邪魔になるなら処分したほうがいいと……。まして、あの娘はロレンツィオの血を引いている。私はロレンツィオの不倫の相手でしかない」
「では、イギリスに嫁に出すというのは？」
「イギリスは大きな力を持っています。そんな国をあの娘が牛耳れば、とんでもない敵になるかもしれない。ロレンツィオが決めたことですが、私はイギリスなど行かせる気はもとからあ

りませんわ。それに……」
　カミーユは、怒りを思い出したように拳を握り締めた。
「それにあの娘は、私の可愛い芸術家、ベルナルドの創作意欲を削いだ娘です。優秀な芸術家だったのに、あの娘は声もかわさず見詰めあうだけでベルナルドの心を奪った。ベルナルドの作る作品にはいつもイザベルの影がある。堕落ですわ！」
　カミーユは、イザベルとベルナルドの気持ちをヴェネチアから逐一届く報告で見抜いていたのだ。
「愛から芸術が生まれることもあると思うがね……」
「愛は芸術への探求心を失わせます。現実の生臭い性に溺れ、美の真理を見つめる目を濁らせます」
　カミーユは決めつけるように言った。
「要するに、イザベルは、いずれ処分する気だったわけだね？」
「あなたたちの出方次第ですわ。神の怒りは吊り天井もいいのですが、仕掛けを見破られやすい。民衆には、僧侶たちが、あなたの雷に打たれるほうが、よほど神の怒りらしく見えますもの……。それに、あなたたちは、私たちの知らない知識をもっと持っておいでてでしょう？　私、何度も言いますわ。私は悪魔と契約したいのです」
　そのときだった。広間の扉が開き、僧侶たちに連れられて、レミーとイザベル、そしてベルナルドが入ってきた。

レミーは、生きているブンドルを見て、一瞬涙ぐみそうになったが、ぷるぷると首を振ってにっこり笑い、手を振った。
「はぁい～、お話は進んでる？」
「おおむね終わったよ……」
「で、どうなるの？　どうするの？　私たち……」
「すべてを始末するしかなさそうだ」
レミーは、表情を曇らせた。
「過激するしかないの？」
カミーユは怪訝このうえない表情で言った。
「あなたたちはこの世界を征服したくないのですか？　美の王国を作りたくないのですか？　私にはその力があるのですよ」
ブンドルはカミーユを見詰めた。
「私たちは悪いが、神でもなければ悪魔でもない。ただの通りすがりだ。そして一人の娘を助けた。助けた以上、その娘を幸せにしたい。ベルナルドという男を愛しているなら、その愛をかなえさせてあげたい。この子が生きていく世界に、黒死病の恐怖を撒き散らすものがいれば、防いであげたい。それだけだ」
「あなたたちには、この時代に生まれた芸術を、宗教や権力から守ろうという気はないのですか？　自由に育てようという気持ちはないのですか？」

「ないといえば嘘になる。私は、この時代の芸術を見るとき、いつもある思いにかられたものだ。教会の天井画、墓石に刻まれた彫刻。広場の記念碑。権力者の肖像。これが、本当に作者たちが作りたかったものだろうかとね？」
　カミーユは、頷いた。
「ええ、私もいつもそう思いましたわ。こんなに才能のある人たちが、本当に作りたいものを作ったら、どんなに素晴らしいものができるだろうかと……」
「わしは今まで、描きたいものを描けたためしがない」
　扉の向こうから声がした。
ダ・ビンチだった。そして、ミケランジェロが、ラファエロが、ボッティチェリが、さらに何人もの職人風の男たちが入ってきた。
　いずれも、美術評論家のレミーが知ったら膝が震えだしそうなルネッサンス期の芸術家だった。
「わしらの作ったものは、みんなだれかの注文だ。それが、教会であったり、権力者にしろしよせん、スポンサー、パトロンあっての作品じゃ……。自由なものが作りたい。思いのままのものを描きたい。だからこそ、ここに来た」
「形は誘拐かもしれんがね。こちらに来る気持ちがなければ来はせんよ」
　ミケランジェロが肩を竦めた。
「私はあなたたちに自由に創作してほしいのです。そんな時代と国を作りたいのです」

カミーユが言った。
「あなたが、神になり代わってかね?」
ボッティチェリが言った。
「え?」
思わずカミーユはとまどった。
「そうなのだよ。カミーユ……」
ブンドルが頷いた。
「あなたは、あなたの思い込みの美を彼らに作らせようとしているだけなのだ。ここで、彼らが、何を作っても、それは彼らが作りたいものではないだろう」
ダ・ビンチが言った。
「教会の注文で作ろうとあんたの下で作ろうと、どこにいても今までと同じということだ。ならば、感性の違う者同士が、一つ屋根の下でお互いを気にしながらものを作るなど真っ平だ。むしろ、美などなんにもわからん馬鹿なスポンサーどもを騙し騙しして、こっちの好きなものを描こうとするほうがましというものだ。わしらはもうここから出ていきたいのじゃよ」
「なんと勝手な……」
カミーユが信じられないといった感じで首を振った。
「勝手はどっちだ。私は女の彫刻はもうたくさんと言ったはずだ。それなのにあなたをモデルに作れという。真っ平だ。女の心は変わりやすい。永久に残る彫刻の題材には不向きなのだ」

ミケランジェロが喚いた。
「ミケランジェロ、あなたは本当にそう思っているのですか?」
カミーユの声は、今までの様子が嘘のようにせつなそうだった。
「そりゃ、ちと偏見じゃよ……。あんたよっぽど女運が悪いな。……喧嘩で鼻を潰されてから作風が変わったというが、よっぽど女にひどい振られ方をしたと見える」
ボッティチェリが言った。
「あんたの知ったことか。これは、私の美学だ」
ミケランジェロが言い返す。
「そうだよな。偏見だって、突き詰めれば立派な美学になりうるもんな……。女心は変わりやすい。永久に残る彫刻には不向き……。手帳に書いておこう」
ラファエロが、ませた口調で頷いた。
彼らはさすが、天才というか風変わりな反応が多い。
ブンドルもいささか呆れて、話をもとに戻すことにした。
「カミーユ……。あなたが思い込みで何をしようと勝手だ。私たちが口を挟むことではない。しかしだが、私たちと関わったイザベルとベルナルドを引き離すこともさせない」
カミーユは、弱々しく言った。
「世界をわがものにするより、小娘の愛のほうが大切だというのですか?」
「ああ、この世界で私たちが理解できるものは、この娘の愛だけなようなのでね……」

「そう……、私の思い違いでしたわ……。とんでもない思い違いよね。あなたたちが、世界の覇者になることを望まないなんて……」

「だれもが、同じ思い込みをしているわけではない。だが、あなたも世界の覇者になりたいために、こんなことをしているとは思えないのだが……」

カミーユは寂しげな表情でブンドルを見詰めた。

「ええ、わたしは、あくまでルネッサンスの芸術を宗教や権力者の鎖から守りたい。そのためには世界を征服し、芸術中心の世界にしなければルネッサンスの美を守れない」

「なぜそうまでして美の女神を気取るのだ」

「私にとってそれがすべてだからです。近代芸術の始まり、ルネッサンスこそ、私にとっても守るべき原点だったのです」

「ちょっと待って……、カミーユさん。今、あなた、ルネッサンスって言ったわよね？」

レミーが信じられないといった表情でカミーユに言った。

「なぜその言葉を知っているの？　この時代をルネッサンスと呼ぶのは、もっと後の時代になってからのはずだわ」

「そ、それは……」

カミーユは、かすかな動揺を見せた。そして呟いた。

「なぜ、なぜ、私はここにいるのか？　いるはずのない私が……」

カミーユの顔が死人のように青ざめた。

「どうして、私はここにいるのか？」
「あなたもこの時代の人じゃないの？」
レミーが呆然と聞いた。
「私はこの時代の人間じゃない……。そんな！」
カミーユは、がっくりと膝をついた。
まるで、カミーユのすべてが崩れさったようだった。
「嘘です！……嘘だと言って！」
カミーユは絶叫した。瞳から涙がほとばしった。
そして、ひざまずいたまま、身体が痙攣したように震えた。
やがて、震えが収まると、のろのろと立ち上がった。
「そう、そうなのよね……。私はこの時代に生きてはいない女」
その顔には生気がなく、まるで蠟人形のように表情が凍っていた。
もう、今までのカミーユではない、心も身体も崩壊した女がそこにいた。
カミーユはふっと長い息を吐いてからブンドルを見詰めて言った。
「そう、そのとおりですよね。思い出しました……、私がなんであるかを……。私はこの時代にいるはずのない人間です……」
レミーにカミーユは頷いた。
「ええ、これであなたたちが何なのかも納得がいきましたわ。あなたたちの武器をみると、私

よりもずっと未来の人のようです。やっとわかりましたわ。私は未来から来た女……、過去を変えてはいけない。歴史が流れが変わるから……。過去を変えようとした私を、止めさせにあなたたちは来たのですね……」
「私たちにそんな気はない……。でも、私たちの前の時代に時空を超えられる科学はなかったわ……。あなたはどの時代から来たの？」
カミーユは微笑した。
「もうそんなことどうでもいいのです。長い暗闇の中から気がついたら少女の私は、この世界にいました。フィレンツェの街角でロレンツィオに出会い、それから夢のような日々が過ぎました。長い日々だったけれど、そう、夢だったのですね……。ルネッサンスの時代に生きルネッサンスの芸術を守ろうとした私の夢……、狂おしく忌まわしい生きざまの中のはかない夢。でも、今、はっきり思い知りました。もう思い出しましたわ。私はこの時代には生きていないことを……。これは、きっと私の夢だったんですね……。でも、とても楽しい夢だった……」
カミーユの身体がふわっとゆらいだ。まるで陽炎のように、ぼやけてきた。
カミーユの存在自体が不確かに見えていた。
レミーは慌てて言った。
「ちょっと、勝手に夢にしないで……。現実にここにいる私たちはどうなるの？……」
そのとき、扉を蹴破るようにしてびしょぬれの真吾とキリーが飛び込んできた。
海底の船着き場から潜入してきたのだ。

二人は応戦を防ぐために、床で一回転してレーザー銃を構え、叫んだ。
「大丈夫か？　レミー、ブンドル」
しかしだれも二人に答えなかった。
陽炎のように消えかけたカミーユを茫然と見詰めている。
気が抜けたキリーが呟いた。
「あらら……、どうなってんの？」
カミーユはかすかに微笑した。
「私の愛したルネッサンス、さようなら……」
ズン！
カミーユの絶望の呻きが、海底の城の崩壊と連動したかのように、凄まじい衝撃音が床に伝わった。カミーユの夢が、弾けたように、広間の壁から七色の火花が飛び散った。
それは、この時代に存在する力が消えようとするカミーユの精いっぱいの感情のほとばしりに見えた。
カミーユの最後の煌めきが、海底の城に貯えられた膨大な量の花火を爆発させたのだ。
「なんだ、なんだ、何事じゃ……」
よろけながらケルナグールとカットナルが飛び込んできた。
待っていたようにブンドルがカットナルに言った。
「カットナル、持っている解毒剤のすべてをくれ」

そして真吾とキリーに振り向くと
「さっそくで悪いが、みんなを逃がしてくれ」
「あん？　来たばっかりで？　また、水ん中かよ……」
ぼやいたキリーだが、至るところで火花の飛び散る今の状況を見れば仕方がない。
「レミー、君もイザベルたちを……」
「了解！」
何が何やら納得できないが、ここはブンドルの言うように逃げたほうがいいのも確かだ。
「ちょっと待った！　娘さん」
手鏡を持ったダ・ビンチが叫んだ。
「鏡のなかに写ったあんたは素晴らしい。はい、笑って……」
「そんな場合じゃ……」
ない……と言いかけたが、
「そんな場合もこんな場合も、わしゃレオナルド・ダ・ビンチじゃ！　文句あっか？」
ダ・ビンチの名を聞いては、いくらこの場が切羽詰まっていたとしても、思わず美術評論家としての習性で、レミーの足が止まってしまう。
「はい、文句はないけれど」
「じゃ、チーズ」
レミーは、いかにも困って曖昧な笑いをした。

ダ・ビンチは、手鏡の中のレミーを見て、大きく頷いた。
「これだ、このほほ笑みじゃ。このほほ笑みだけいただきじゃ……」
ダ・ビンチは、懐から羊皮紙を出し木炭でさらさらと下書きをした。
「よし、さあ娘さん、急ぐんじゃ！」
「はあ……？」
「わしが逃げ遅れて死んだら、せっかくのほほ笑みが絵に描けんではないか」
ダ・ビンチは、脱兎のごとく広間を飛び出していった。
イザベルはといえば、しっかりベルナルドにフォローされ、先を逃げている。
蜘蛛の子を散らすとはよくいったもので、いつのまにか広間には、姿の薄れていくカミーユとブンドルとレミーだけだ。レミーはカミーユを見詰めているブンドルに声をかけた。
「ブンちゃんも早く……」
「先に行ってくれ。私にはやることが残っている」
ブンドルはレミーを振り向きもせず答えた。
ブンドルの身を案じて、無鉄砲に突っ込んできたレミーに対して、いささかつれない態度の気もしたが、ブンドルの後姿には、人を寄せつけない真剣さがあった。
……よほど、何かをカミーユと話したいんだ……
レミーは邪魔をするのを遠慮した。
「……ごゆっくり……。でも、急いで逃げてね」

レミーは、肩を竦めて、他に逃げ遅れがいないか確かめながら、船着き場へ急いだ。

ブンドルは、静かにカミーユに語りかけた。

「カミーユ、聞かせてくれないか？　あなたにとって、美とはなんだったのだ……？」

カミーユの体は、後ろが透けて見えるほど存在感がなくなっていた。しかし、その虚ろな微笑ははっきりと見て取れた。

カミーユは、かすかな声で答えた。

「生涯のテーマでしたわ。そう、私は彫刻家だったのです。何かを作りたいと思った子供が、粘土をこねくり回す。その程度の彫刻家でした。それでも、いつも、求めていました。美とはなにか？　そして、いかにして、美を創造するか……。でも美とは、確かにあなたのいうように、人それぞれの思い込みかもしれません。では、私が思い込んでいる美とは何なのか？　それを突き詰めていくと、いつも、私自身が何なのか？……という疑問に突き当たりました。結局、私にとって美を作り出すということは、私の本当の姿を描くことなのです。でも、本当の自分など、自分ですらわかりはしません。……私が美を作り出そうという行為は、自分が何者かを知ろうとする遍歴でもありました。その旅は、まるで白雪姫に出てくる魔女のように、鏡に自分を写して、私ってきれい？……というような……、だれも答えてくれない疑問を、何度も繰り返すようなものでした。鏡はなにも答えてくれない……。だから……、私は、ある人を愛し抜いて、その愛の中に自分を見つけようとしたこともあります。その人は、私の生まれた時代で、私が信じる最高の芸術家でした。でも、どんなにその人を愛しても……、その芸術家

も私を愛してくれて、どんなに私を美しいといってくれても、結局、私自身の何が美しいのか、私にはわかりませんでした……。私は、私自身がわからず、私のことを美しいといってくれても、彼が、私の生きる世界で最も愛した芸術家さえも、私をわかってはいない。彼が、私のことを美しいといってくれても、彼が、私の作り出す彫刻を素晴らしいといってくれても、私は納得できない……」

「他人それぞれの美意識のなかに、自らの納得する美を求めるのは、美の迷宮に紛れ込むことかもしれぬ」

今は幻のように頼りないカミーユの姿が、広間の片隅にある布のかかった飾り台の前に動いていった。

「私は、まるで、この彫刻のようです。私の作った最後の作品ですわ」

布がゆっくりとすり落ちていった。

そこに小ぶりなブロンズの像が置かれてあった。

ブンドルは息を飲んだ。素晴らしいと思った。

それは羽を広げた孔雀だった。だが、その首の部分には、虚ろな表情の女の顔があった。

「見事な作品だ……」

ブンドルは、正直に気持ちを言った。

「そうでしょうか？　これが私の姿……。この孔雀のように懸命に羽を広げて、広げた羽の重さが苦しくてたまらないのによたよたと歩く。美しいでしょう？……私は他人に問い続ける。美しい……。他人は誉めてくれる。でも、私は、広げた羽を自分の目では見ることができない。

孔雀は、自分で広げた羽が、どんなに美しいかわからない。けれど孔雀は何度も何度も羽を広げる。羽の重さにつぶされそうになりながら、よたよたと苦しい足取りで歩き続ける。私は、孔雀がもっと奔放に羽を広げていた時代に憧れました。羽の重さを感じずに、自分を美しいと信じきって踊っていた時代。芸術家が、自分に対する自信と自惚れに躍動していた時代。現代の私たちの芸術と心の原点が芽生え花開いたころ、ルネッサンス……。その空気の中でなら、私は私の作り出そうとした美が何であるか……、私自身が何であるかがわかるかもしれない。そして、ルネッサンスの美を生み出そうとする心の持ち主たち、ダ・ビンチが、ミケランジェロが、ボッティチェリが、ラファエロが、ベルナルドが、彼らの目が、私を描いてくれたら、その中に、私が見つけたい私自身の美のかけらが見えるかもしれない。私は、心の闇の中で、そんな思いに取りつかれていました。いつも……いつも……いつまでも……。そして、闇のなかに明かりを見つけたとき、私は幼女に戻りこの時代に辿り着いていました」

カミーユは、孔雀の像をそっと撫でた。

「でも、どこの時代であろうと、孔雀は孔雀、重い羽を広げるのは楽ではないのですわ。そして、いつでも、広げようとする羽をさらに重く押さえつける者がいるのです」

「この時代では、神と権力者だといいたいのだね……」

ブンドルが呟いた。

「神は存在するかもしれません。でも、今の教会や権力者の心の中にはいませんわ。そして、孔雀はその重さに押し潰されそうになりながら、もがくように歩くのですよね……。私はきれ

いですか？　本当に美しいのですか？　鏡でしか写せない自分の、真実の自分を知りたいのです……。そう、慟哭しながら踊り続けるのです。……私は思いました。せめて、芽生えの時期の、この時代の孔雀たちには、煩わしいものもなく、自分の自由に、思いのままに羽を広げさせてやりたい……。そんな世界を、この時代から作ってみたい……。たとえ歴史が変わろうと、軽々と羽を広げる孔雀の喜びに比べれば、何ほどのものがあるでしょう」

それもまた不確かで、わかる気もする。しかし、もともと、美とは不確かなものだ。自分とは何か。納得できる答えが出そうもない」

「ええ、そうですわね……。私も、さっき、私がこの時代に生きているはずのない、不確かな存在だと自覚したとき、すべての力が消えていくのを感じましたわ。私はこの時代にいない。たったそれだけのことで何もかも幻になる。あなたたちは、私の夢を夢のまま葬り去る。そのために来たのですね……」

「いいや、これはあなたの夢の中の出来事ではない。現実の世界だ。私たちとて、未来から来た不確かな存在だが、この世界の現実に生きている」

「互いに、不確かな存在なのですね……」

「たとえ目に見えていてもこの世に確かなものなど、そうありはしない。その意味では、あなたの夢も、この現実もそう差はないのかもしれない。だが、あなたの夢は、あなたの想いの強さで、私たちと同じようにこの世界に現れてしまった。あなたは美という不確かなものへの想いで時を越えてルネッサンスに来てこの現実を動かしたのだ。だが、私たちはどうするか？

私たちは、あなたの持ち込んだ不確かなものより、より確かなものを信じることで、自分がこの現実に生きていることを確認するしかない」
「それほど、確かなものが、この世界にあるのですか？」
　カミーユが、聞いた。
「この世界で私が思う確かなもの。それは、あなたの撒き散らす黒死病で確実に起こるだろう大勢の人々の死。死は夢の世界にいようと現実の世界にいようと、いつかは必ず来る」
「ええ、死は夢を見続けていた私にも来ます」
「そしてもうひとつ確かなものがあった」
「もうひとつ？」
　カミーユは聞き返した。
「それは、イザベルが見せた愛だ……」
　カミーユは、弱々しく寂しげな微笑を浮かべた。
「愛……？　愛ほど不確かなものはないのに……、いつ壊れるかわからない……、不安なもの……」
「先のことはわからない……。だが、今のイザベルは愛を信じている。それだけは確かだ。愛は壊れる。愛は脆い。愛は錯覚。しかしそれは後になって思うこと。愛のただ中にいるときは、その人にとって愛だけが確かだ。違うかね。あなたにも覚えがあるはずだ……。何かを愛しているとき、自分の存在が確かにわかる。イザベルはわかっている。今、愛しているからこそ、

自分が生きて存在している実感があるということをね……」
「あなたは、他人の愛で、この世界の確かさを信じるのですか？」
ブンドルは、かすかに微笑んだ。
「もう、自分の愛を信じられる時期は過ぎた気がする……、残念だがね……」
カミーユは、孔雀の像を見詰めながら言った。
「……そうかもしれません……。私にも人を愛したときがあった。あのとき、私は確かに羽を広げた覚えがある。力の限りに……。でもそれが、どんな姿に見えるのか私は知りたかった」
ブンドルも孔雀の像を見詰めた。
「私もかつて、そうだった。そして、確かなものを感じられる瞬間を失った。それから私は根なし草だ。自分は何者かを、今も浮き草のように漂って探している。私はメディチ家の末裔の一人だといわれている。しかし定かではない。歴史上のメディチ家は滅亡しているのだからね。私は何者なのか？　このルネッサンスのイタリアに来ても、わかりはしなかった。いや、それがわかったところで……、今の私が何者なのか？……その問いの答えにはなりはしない。だが、自分が何者なのか？　自分の存在がなんなのか知りたい私には、それが、気にはなる。気にはなるが、それが答えにはならない。私は何者なのか？　その答えを求めながら、答えのない自分の存在に、身をまかせ、旅を続けるしかない」
カミーユは、もう、ほとんど消えかかっていた。
「ブンドル様……、もしかしたら、私の夢は、あなたと会えたことが一番の収穫だったのかも

しれません……」
「そうかな……」
「私は、あなたに会ったとき、自分を鏡で見たような親近感と嫌悪感を同時に感じました。憎むと同時に、好きだったのです。きっと、あなたと私は同じ種類なのかもしれません。だから、あなたに対してあまりに無防備だったのです。それは、もう、どうしようもないほどに……。まるで、あなたと会うために、この時代にやってきたような気すらします……。私と同じような浮き草がいる。自分が何者かという……、その問いかけを続ける美学の迷い人がいる。それが感じられただけで、私はもう一人ぼっちではない気がします……」
カミーユは、微笑んだ。かすかに呟いた。
「広げた羽がどんなものか、やはり見えはしませんけれど……」
そして二度、三度、ゆらいで消えた。
飛び散る火花と硝煙の中、精いっぱい、羽を広げた孔雀の像だけが、虚ろな表情でぽつりと残されていた。
ブンドルは、深い溜め息を吐いた。そして、カットナルから貰った解毒剤を口に含むと、黒死病の菌を貯蔵した部屋にいき、レーザー銃で焼きつくした。

＊

……いったい、海底の城のどこに、こんな人数がいたのだろう？……

レミーは、絶望的な気分だった。
船着き場に逃げてきた人の数は、予想外に多かった。
桟橋は、人がひしめきあい、先を争ってゴンドラに乗り越もうとするが、とても、ロープウエータイプのゴンドラで、逃げ切れる数ではない。
時折響く、地下の爆発の地鳴りが恐怖をあおりたてる。
たまらず海面に飛び込み、泳いで逃げようとするものもいる。
「泳ごうったってなあ……」
キリー、カットナル、ケルナグールは、がっくりと肩を落とした。
死に物狂いで潜ってきたはいいものの、何もしないうちに一件は終わり、後に残っているのは、泳いで、海面に浮かび上がること……。その自信のまるでない三人としては、何の活躍もできなかっただけに、死に損……、いや、溺れ損の気分だ。
「おれには何もなかった」
いつものキリーの口癖が、三重唱になった。
そのときだった。天井から大きな声がした。
「こりゃ、落ち着け、落ち着け、皆の衆。この城はみんな助かるように作ってある。この城を設計したわしが言うんじゃから間違いない」
ダ・ビンチの声だった。どうやら、メガホンの巨大なもので話しているらしい。
「船着き場でなく、急いで上の礼拝堂に集まれ。信じるものは救われる」

船着き場の人々は、先を争って、礼拝堂に入った。
礼拝堂の天井は、巨大なドームになり床は木でできている。
「地下の火薬が、全部爆発すれば、自動的に脱出装置が働くようにできちょる」
自信ありげにダ・ビンチが言った。
「ま、試したことはないがの……。今回が、初めての実験……、なあに失敗は成功の元……。もっとも失敗すれば次はないがのう……」
などと怪しげなことを言っている。
ずん！
すさまじい衝撃で、床が突き上がった。
天井のドームの外側を覆っていた大理石と岩塩とガラスが弾けた。ドームの内側は、防水用のコールタールを塗った布を縫い合わせた、巨大な一枚布になっていた。
ダ・ビンチが叫ぶ。
「行け！　行けっ！　木と風船は水に浮く！」
文字どおり、それは、木の床のついた巨大な風船だった。
床は、エレベーターのように浮上していった。
そして、布の天井がしぼみ、さわやかな潮風が吹き込んでくるまでに、一分とかからなかった。

＊

ヴェネチアの為政者たちは、突然、海上に浮かんできた人間たちの処置にあわてたが、海底に城があったなど信じられるはずもなく、また、教会を含めたヨーロッパの現体制をひっくりかえそうした、カミーユの企てに参加していたなどと話す者はだれもなく、結局、沖合で難破した船の乗組員として保護するしかなかった。

＊

「ここなら、きっと静かに暮らせるだろう」

スイス……、アルプスの人里離れた山荘に、ブンドルは、イザベルとベルナルドを案内した。

カミーユの美の王国計画は、使途不明のロレンツィオ・デ・メディチの財産を執拗に調べたピエロ・デ・メディチに知れた。しかし、教会を敵に回したあまりに過激な計画に、ピエロは驚愕し、いっさいを極秘に処理することにした。

カミーユと、その計画にかかわった百余名の娘たちの名はメディチ家の家系から抹消された。

イザベルも当然その中の一人だ。

異教徒の国へ行った娘たちはともかく、イザベルには、見つけ次第、秘密裏に殺せとの指令が出た。ヨーロッパ中に支店網のあるメディチ家の暗殺者の目を逃れるのは、並み大抵のことではなかった。

「よく、こんなところを知っているわね……」

レミーがブンドルに聞いた。

「二十一世紀に、私が別荘に使った山荘だ。ロレンツィオが、病気の静養のために作った別荘だが、一度も使われず廃屋になっていた。景色はいいがあまりに辺鄙だったため、以後五百年以上、だれも住みつかなかった別荘だ。私が若いころ、メディチの家系を調べていて、ロレンツィオの資産記録の中に偶然見つけたものだ。妙に気に入って、私が、買い取った。もっとも今から五百年以上未来の話だがね……。これぐらいならロレンツィオ・デ・メディチの遺産を黙ってイザベルが使ってもだれも文句は言うまい。いずれにしろ、今から五百年以上、私が住むまでだれも使わなかった別荘だ。安全なことは確かだ」

「しかし、ベルナルドさんよ……、こんなところじゃ、ラファエロさんも真っ青っていうあんたの芸術やろうったってとても食えやしないぜ……」

キリーが肩を竦めた。ベルナルドは、優しくイザベルの肩を抱いて言った。

「いいんです。私はこの人を一目見たときから、すべての作品を遠くから見詰めるだけのこの人に捧げるつもりで創ってきました。今、ここに、この人がいます。遠くから捧げる作品は、もう必要ないのかもしれません」

「あ〜あ、言ってくれるぜ。考えてみりゃ、おれたちだって、ルネッサンスにいる時間は、イザベルに捧げちゃったようなもんだよな」

「そうかもしれない。結局、私も、ルネッサンスに来ながら、私が本当にメディチの家系かどうか、確かめることすらできなかった」

ブンドルが言った。

「二人はこれでいいとして、これからおれたちはどうなるんだ？」
真吾が溜め息混じりに言った。
ブンドルは微苦笑を浮かべた。
「もともとわれわれは、この時代にいるはずのない存在だ。用事が終われば、だれかさんがこの時代から弾き飛ばしてくれるだろう」
「用事が終わったら？」
「カミーユは、もともと、この時代にいない人だ。それが紛れ込んできて、時代を変えようとした。そこでそれを元に戻すために、われわれが飛ばされてきたとは思わんかね」
「ちぇっ、おれたちは壊れそうになった時の流れの糊とはさみ、修正液かよ」
キリーが吐き捨てるように言った。
「もう、たいがいにしてもらいたいもんじゃ。わけのわからないものの言いなりになって、あっちこっちに飛ばされるのは……」
カットナルが、喚いた。
「しかし。わしらがどう思おうとおかまいなしで、あっちさんは飛ばしちまう。まるで、こっちの事情を考えないで対戦相手を決めてくる、質の悪いプロモーターじゃ」
ケルナグールが、ぱちんと拳を鳴らした。
「いつまでこんなことが続くの？　いくら時空を飛んでいるからって、いつまでもお姉さん役やってられないわ。私まだ現役なんだから」

レミーは、花のルネッサンスに来て、まるで浮いた話がなかったのに気がついた。
「何のことはない。走り回って、裸で泳いだだけじゃない。浮いた話どころか、海に沈んだだけだったわ……、ジャポン！」
レミーはおどけて言った。笑い飛ばさなければやりきれない雰囲気だった。
「だが、いつまでもだれかさんの言いなりにされはしない。私たちは……」
ブンドルが呟いた。
「え？」
レミーが聞き返した。
「カミーユが、この世界に来たのを、だれかさんは予測できたのだろうか？　あの人は何の科学的な道具も理論的な裏づけもなく、ただの思い込みだけで時間を越えてやってきた」
「そりゃ、アインシュタインもホーキングもびっくりだろうな」
真吾が言った。
「そして、だれかさんもびっくりしたのではないか？　決められた時間の秩序を思い込みだけで壊されてしまったのだからね……」
「私たちにも、カミーユの真似ができるって言うの？　だれかさんの操りの糸を、思い込みでたち切れるって言うの？」
「それはわからないがね……、今は……。だがイザベルを見てごらん。見詰めるだけの思い込みの愛でフィレンツェに来て、今、ベルナルドと一緒だ。こんなことをだれが信じるだろう」

「そりゃ、アインシュタインもホーキングもびっくりだろうな」
キリーが肩を竦めた。
ブンドルは頷いた。
「そう、人間は、時として科学や理論で考えられないことをする」
「わしらもそろそろ、だれかさんをびっくりさせてやるか」
ケルナグールが、凄味を聞かせた声で言った。
「次は、だれかさんといよいよ喧嘩じゃ！」
カットナルが叫ぶと、肩のカラスが一声鳴いて頷いた。
「だから……」
ブンドルがイザベルを見詰めて言った。
「私たちがルネッサンスにいた時間は、変えられそうになったときの流れを直すための時間とは思わない。私たちの時間は、イザベル、君のために捧げるよ……」

＊

イザベルと別れて、何日目かの満月の夜……。
六人の姿は、ルネッサンスの時代から忽然と消えた。
偶然、目撃した旅人は、六人の人影が、陽炎のように消えたと言った。

エピローグ

六人は、今、時空の闇の中を飛んでいる。
ブンドルの耳に、イザベルの別れのときの声がかすかに聞こえた。
「ブンドルさん……、あなたは、きっとメディチ家の本当の家系です……」
だが、今のブンドルには、どうでもいいことだった。
イザベルとベルナルドは、やがてスイスのアルプスの山奥に栄えるだろう自分たちの一家の名に、五百年以上あとに山荘の持ち主になるだろう恩人の一人の名を付け加えた。
感謝の意味と、かなりの茶目っ気を込めて……、メディチ・ブンドル家……。
五百年以上あと……、この家系に、レオナルドという名の一種特殊な美意識を持った男が誕生する。だが、今のレオナルド・メディチ・ブンドルにとって、それもどうでもいいことだった。
レオナルドといえば、もう一人のレオナルド・ダ・ビンチは、数年後、モナ・リザと呼ばれる、絵画史上あまりに有名な絵を完成させた。だれが、絵のモデルかは諸説入り乱れているが、どうやら、全世界の人々を魅了する曖昧な微笑みの部分だけは、別にモデルがいたようである。
ダ・ビンチはこの絵が気に入り、長く手元に置いて放さなかったという。
だが、今のレミーにとっては、もはや、どうでもいいことだった。
さらに、ダ・ビンチは、ほとんどの手記をなぜか鏡面文字（鏡に写った逆向きの文字）で書き残しているが、その理由も諸説紛々である。
ダ・ビンチの考えだした発明は、ほとんど完成しなかった。本当に完成しなかったのか、そ

れとも、ダ・ビンチの意思で、あえて完成させなかったのかは定かでない。

ミケランジェロは、その後フィレンツェを離れ、ローマに行き、時の教皇ユリウス二世の命でシスティナ礼拝堂の天井に旧約聖書の創世記をテーマにした絵を四年がかりで完成させる。このあまりに有名な天井画を、ミケランジェロが本当に描きたかったかどうかはだれも知らない。ミケランジェロはあくまで、彫刻を最高の表現手段と考える芸術家だった。

さらに晩年の大作、最後の審判は、裸体で描いたはずの人物群像が、教会から猥褻だとのクレームがついて、後に腰布を書き加えられ、現在に至っている。

無理やり下着を履かされた絵を、ミケランジェロはどう思うだろうか。

ボッティチェリは、通俗絵描きといわれたのがよほどこたえたのか、妊婦姿のビーナスを、いつのまにか、今に残るような、すらりとしたビーナスに書き替えたようである。

さらに、芸術表現を突き詰めすぎたのかスランプに陥り、なんと芸術を堕落と罵るあのサヴォナローラに心酔、宗教に凝り固まった末、晩年は、振り返るものもいないほど落ちぶれて、この世を去ったという。

ラファエロは、ミケランジェロのように女性嫌いにならなかった。さまざまな女性と浮き名を流し、研究のかいがあったのか、ルネッサンス時代を代表する魅惑的な聖母像の数々をものにした。

ロレンツィオ・デ・メディチの死をもって、フィレンツェのルネッサンスは黄昏を迎えた。

その後を、ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロの活躍するルネッサンスの最盛期とす

る見方もあるが、その活躍はフィレンツェとは別の都市であり、すべて権力者や、教会の庇護の下のものだった。

フィレンツェでは、サヴォナローラの勢力が強まり、メディチ家非難の声はさらに燃え盛り、ついにピエロ・デ・メディチとメディチ家はフィレンツェから追放される。

だが、そのサヴォナローラもそのあまりに強固な禁欲主義の押しつけが、市民の反感を買い、シニョーラ広場で火焙りにされ、果てる。

その後、メディチ家はさまざまな術策を用い教会と手を組み、再びフィレンツェに凱旋する。だが、そんなメディチ家に、もはやルネッサンスを生み育てたころの活力とみずみずしさはなかった。

それでも陰謀と策謀の入り乱れる中、メディチ家は、一七四三年、アンナ・マリア大公妃の死によって家系が途絶えるまで、ヨーロッパの表舞台に絶えず姿を見え隠れさせながら続いた。

だが、そのころには、フィレンツェの輝かしい花のルネッサンスは、遠い昔話になっていた。

ルネッサンスが人間の歴史にとって何だったのか、いまださまざまな説が唱えられている。

だが、ロレンツィオ・デ・メディチの歌ったバッカスの歌はいまだに人々に口ずさみ継がれている。

……若き者、楽しむがよい……

……今という時を逃さずに……

……確かな明日はありはしないのだから……

＊

二十世紀の中ごろ、南フランスの片田舎の精神病院で、一人の女がなくなった。
時代を代表する著名な彫刻家の弟子であり恋人であり、なにより彼女自身も優れた彫刻家だった。
著名な彫刻家との間にどんな葛藤があったかは定かではないが、発狂した後は、病院で孤独な日々を送った。
彼女の生み出した彫刻は、数少ないが、どれも厳しく、悲しく、美しい。
この女性の愛と苦悩と狂気の日々を考察しようとした人は少なくない。
けれど、その死の直前、彼女がどんな夢を見ていたか知る人はいない。
その女性の名は、カミーユ・クローデルという。

＊

六人は、今、時空を飛んでいる。
……もう、だれの言いなりにも動かされない……
六人の思い込みは強かった。
AND
SEE YOU AGAIN

あとがき

もはや、お待たせしました。ごめんなさい。などと偉そうなことは言えません。ご無沙汰していました……と、頭を下げるだけです。
皆さんが、ゴーショーグンなどという名をとっくに忘れたころをわざわざ見計らったようにのんびりと書かれているこのシリーズも、ほぼ十年、八作目を数えることになりました。
二作目から、時空を飛ばされっぱなしの、この作品のメンバーたちは、それほど月日の経つのを感じてないようですが、現実にはやはり十年という時間は決して短くはありません。
いつのまにか、このシリーズの第一作がテレビで放映されていたころを知っている方たちのほとんどが、二十歳の半ば近くになり、中には三十を越えた方も見うけます。
多少、風変わりな経験を積んだ覚えはあるものの、机に向かって物書きをやっていた僕なんかに比べて、はるかに豊富な人生の体験をした方もいるはずで、そんなみなさんの時間を、過去に出会った懐かしさだけで、この本を読むために費やしてもらうのは、たいへん僭越なことに思えます。
たかがエンターテインメントという言葉があります。

でも、たかがエンターテインメントだけになおさら、無駄な時間を過ごしたとは感じていただきたくないし、この作品がこのシリーズ初めての若い読者の方にも、面倒くさい活字を追っかけるより、コミックを読んだりゲームをやってりゃよかったと思われたくもないし、それだけに、一作一作が気楽に書けなくなっていることも確かです。

書くぞ！　書かなきゃ……という、そうとうの思い込みと馬力がないと、ペン先が、原稿用紙に届かないのです。

あんまり書けないと、そのうち、自分で自分に首をひねりだします。

何のためにゴーショーグンを書くのか？

そもそも作者である僕にとって、ものを書かなければならない思い込みとは何なのか？

そんなことを考えているうちに、この「美しき黄昏のパパーヌ」は、その思い込みというものについてのお話になってしまいました。

人は、それぞれ、他人がどう言おうと、崩されたり侵されたりすることのない個々の思い込みを持つことがあります。ある人にとっては、それが恋愛だったり、仕事をするときのこだわりだったりするかもしれません。

ルネッサンスを舞台にしたゴーショーグンを書こうとは、前々から考えていて、舞台になるフィレンツェやヴェネチアもほっつき歩いたのですが、このあまりに興味深く複雑で面白い時代を、ゴーショーグンのメンバーと僕が、どう対処したらいいのか、まるでヴェネチアの水路のような迷路に迷い込んだ気分でいました。

もう、書くのを止めようと思ったことも何度かあります。

そんなとき、ある人からこんな台詞を耳にしました。

「人を幸せにできたら、自分も幸せになれると思う」

別に宗教団体の人の言葉ではありません。ただ、その人は看護婦を仕事にしていました。看護婦としてあまりに決まって聞こえる台詞を、けれど本気で真剣に言われたとき、たぶん、イザベルの持つ「思い込みの愛」に出会ったゴーショーグンのメンバーが、いささか呆気にとられながら、照れながらも、ルネッサンスでの自分の時間をイザベルに捧げてしまったように、僕もそうとうあわてました。「人間の世界なんてそう甘くはないよ……」という黴の生えた諦観が、「思い込み」の前で、吹き飛ぶ気がしたのです。そして、その看護婦の自分自身の仕事(生き方)に対する思い込みが、おそらく、この作品へのヒントになったようです。さらに、その人の好きな曲が、「ボレロ」で知られるラヴェルのクラッシック、「亡き王女のパバーヌ」だと聞いた瞬間に、それまで、僕自身は甘ったるくセンチメンタルすぎると思っていたに過ぎないあの曲の中の孔雀のイメージが、なぜか、ルネッサンスという時代とつながってしまったのです。

けれど、「思い込み」というもので、この作品をくるには、それから三年近くかかってしまいました。僕自身の「思い込み」に対する答えがぐらついていたからかもしれません。

いまだにその答えが出たわけではないのですが、イザベルと、この作品におけるカミーユの「思い込み」を合わせて、ぼんやりとなにかが見える気もしています。

そして、それが見えたとき、このゴーショーグンの長い旅は、たぶん終わるのでしょう。
さて……ルネッサンスの登場人物に関しては、いうまでもなくフィクションです。
ルネッサンスという時代については、文字どおり百花繚乱の研究書や一般書がありますし、ルネッサンス芸術と芸術家についても同様です。ただ、皆さんがどんな見方で、この時代を覗いたとしても、凡百の小説より興味深く面白いことは保証します。
そして、数多く残された芸術に関しては、実物はともかく、写真や画集で皆さんの目に触れることも多いでしょうし、皆さんの目で見て何かを感じていただければいいことで、僕の感想や意見は、邪魔なだけです。今、残されている作品が、はたして本当に彼らが描きたかった世界かどうか疑問だ……というのも、単なる僕の勝手な思い込みにすぎません。
ただ、ここでは、別の時代の女性彫刻家、カミーユ・クローデルについてだけ、僕の感想を差し挟まずに簡単に記しておきます。
カミーユ・クローデル（一八六四〜一九四三）
彫刻「考える人」で知られるロダンの弟子で、父親ほどの歳の差のあるロダンと愛し合い、ロダンの創作意欲の源になったともいわれる女性です。結局、ロダンは妻と別れられず、カミーユは捨てられたかたちになります。以後、その心の痛みのせいか、カミーユはロダンを芸術の上で敵視し、ロダンが自分の作品を剽窃したという強迫観念にかられるようになり、ついには精神を病み、南仏アビニョンの精神病院で三十年の長い病院暮らしを送った末、孤独な一生を終えます。けれども、近年になって、その彫刻の芸術性が高く評価され、現在は女性彫刻家

のパイオニア的存在とまでいわれています。

代表作……「分別ざかり」(壮年時代)。

……なお、カミーユが、ルネッサンス時代のヴェネチアの海底に残して来たかどうかは分かりませんが、彼女が、女性の顔をした孔雀を作ったという記録は全くありません。

それでは……皆さんとゴーショーグンのメンバーがお会いできる日がまた、必ず来ると思い込んで……。

SEE YOU AGAIN……

首藤　剛志

一九九一年五月

戦国魔神ゴーショーグン　番外篇2

美しき黄昏のパバーヌ

首藤剛志

'49年8月18日、福岡生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。アニメ最新作は「アイドル天使　ようこそようこ」のシリーズ構成。小説家としては「永遠のフィレーナ」と本シリーズが代表作。

羽原久美子

？年11月5日生まれ。学校卒業後、葦プロへ入社。デビューは「ミンキーモモ」動画。「アイドル伝説えり子」で初作監(各話)。「ようこ」でも各話作監を務める。現在は小説のさし絵などでも活躍中。

1991年6月30日初刷　　N-069
Printed in Japan

著　者　首藤剛志
発行者　荒井　修
〒105-55　東京都港区新橋4—10—1
発行所　株式会社　徳間書店
電　話　03(3433)6231(大代)
振　替　東京4—44392番
印刷　製本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　吉田勝彦〉

★この本を読んでの感想を上記までおよせ下さい。また著者へのお便りもお待ちしています。

ISBN4-19-669646-5

首藤剛志関連作品リスト

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
狂気の檻
覚醒する密林
時の異邦人
はるか海原の源へ
幕末豪将軍
美しき黄昏のパバーヌ
永遠のフィレーナ①～⑤
都立高校独立国[上][下]
いつかきっとピーチブック(ミンキーモモ)
それからのモモ(ミンキーモモ)
夢の中の輪舞(ロンド)(ミンキーモモ)
ラインハルトとヤン(銀河英雄伝説)

カバーイラスト＝羽原久美子
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱

徳間書店
アニメージュ文庫　定価390円(本体379円)
ISBN4-19-669646-5 C0174 P390E(0)